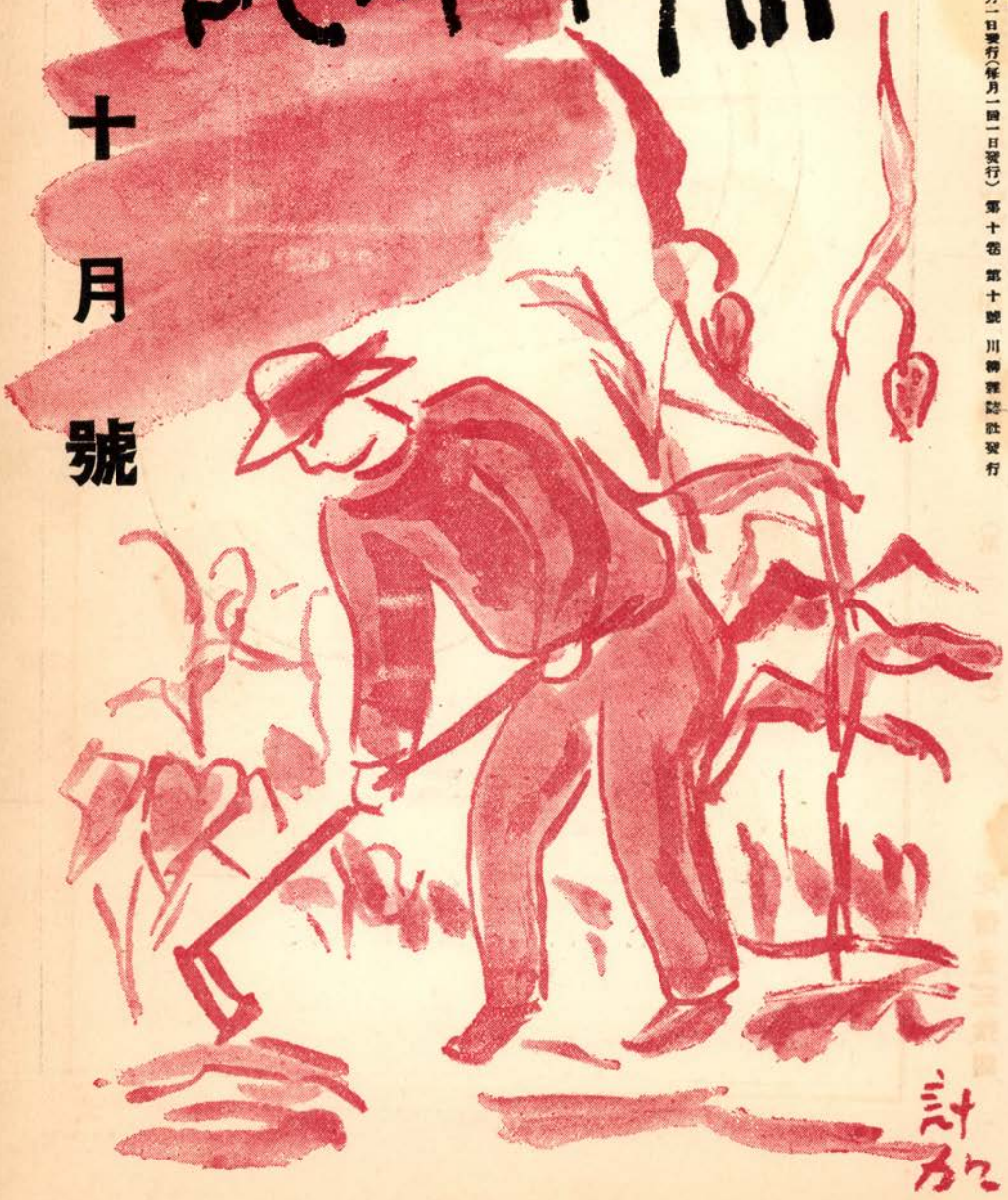
麻生路郎主宰

川柳雜誌

十月號



大正十三年三月三日第三種郵便物認可　昭和八年十月一日發行（毎月一回一日發行）　第十卷　第十號　川柳雜誌社發行

我社は本邦最大の生命保險會社にして、基礎最も鞏固、保險料低廉、約款優秀

加入者配當多額の保險を提供して偏に江湖の稱讃を博す。

日本生命

大阪市東區今橋四丁目

東京句會

本社十週年記念事業の一つ

川柳の社會化を主唱して茲に十星霜。その機關誌「**川柳雜誌**」は全日本は勿論遠く海外にまで羽翼を延ばして光輝燦然たるものがあります。

我が社は斯かる歴史を一層意義あらしめんがために關東川柳家の應援の下に**本社東京句會**を開催する事にいたしました。全國川柳家諸賢の奮つて參加せられんことを切望いたします。

日時 十月十五日（日）自午後五時半至九時半

會場 東京市淺草雷門前 **並木倶樂部**

兼題 「大空」 三句 麻生路郎選

締切十月十日着用紙官製はがき住所氏名明記

投吟所 大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地 麻生路郎宛

▼出席不能の方は兼題と共に小爲替又二錢切手で五拾錢同封されば入選句當品及び此の句會報掲載誌を送ります。

會費 金七十錢

路郎賞 兼題三光天の句に路郎賞、拾圓（債券）を贈呈 兼題三光の地、人位句及席三光句に呈賞

記念品 路郎筆記念手拭 一本宛
「川柳雜誌」合本（金一圓半）一冊宛
句會發表誌（以上二點出席者に限り贈呈）（金三〇錢）一冊宛

講演・席題・選者・記念撮影等々具體的な句會順序は追つて發表いたします。

賛助御芳名（次第不同 敬稱略）

三太郎 雀郎 杜若 茶六 雨吉 玉兎朗 五花村 劍花坊 太郎丸 千壽郎
迷亭 周魚 桃太郎 空壺 紅太郎 しげた 滝の人 天民子 山門 葩夕
陣居 文象 懐窓 鐘美 玄六 丹三郎 呑風 閃光 蒼梧樓
久昭 四青 風嘯 夢小 萩愚 佛露 光柳 湖荷 十夢 一佛
しん平 天邪鬼 角戀坊 叶月峰 呵々子 無名庵 琴莊 紫痴郎 盈光 不涙人
金一郎 まさる 花川洞 三面子 〇丸 瑤天 鞍馬 風花 張六 壽一
信子 六文錢 杵太郎 麈耶火 一郷 默六 牛彌 米花 三笑子 梵天丸
珍竹林 蓉 維想樓 廉雀 春秋 五萬石 不倒人 壽山 鬼佛
半門 萬川 玉吉 紅壺 小次郎 啞三味 佐保蘭 蝶五郎

主催 **川柳雜誌社**

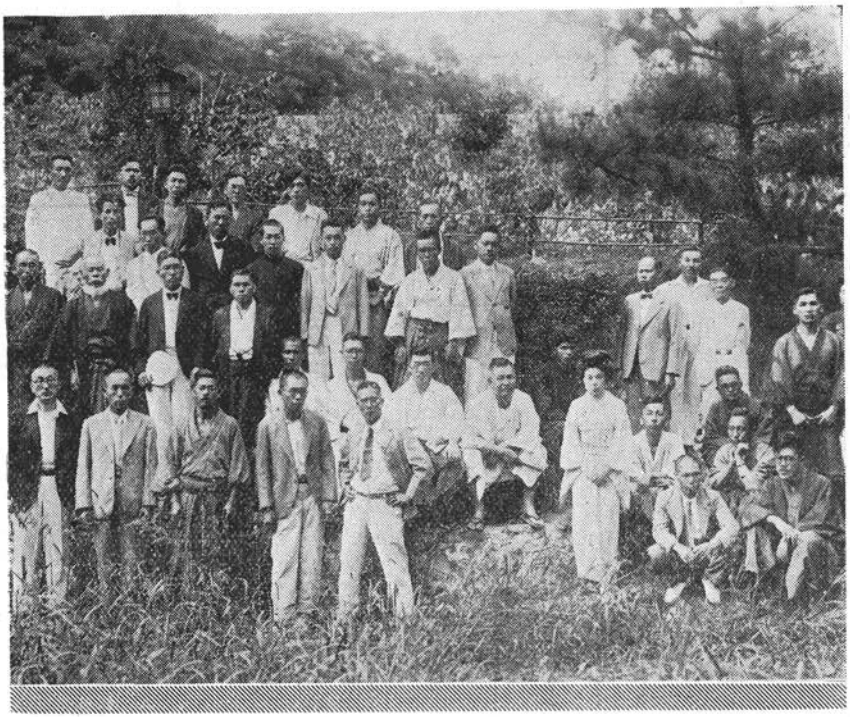
川柳雜誌第十卷第十號目次

五七五の飜譯……麻生路郎…(九)
武玉川初篇研究(一七)……梅本秋の屋・森東省子・蛭魚二…(二七)
柳人を語る……井上劍花坊…(一〇)
危惧ひとつ……山本丹路…(五二)
唐人笛……住田亂耽…(三三)
肱枕艸紙(一〇)……梅本塵山…(六〇)
是空庵より……長野吉高…(五六)
月評 俎上の秋……山雨樓・水路・町丹二…(三八)

雜筆 春秋

來る十五日……安川久流美…(四三)
見た話・聞いた話……辻いの助…(四四)
大阪なまり……曾矢左海…(四三)
武玉川輪講補說……森東魚…(四四)

川柳パイロット欄……福田山雨樓…(四)
柳壇畫報……(三)
川柳塔……麻生路郎選…(四八)
近作柳樽……麻生路郎選…(三)
粒々集……(五八)
日本名所名物川柳（大阪の巻）「ダム」……(三八)
柳風スポーツ……森東魚…(五三)
一路集
坑夫……松丘町二選…五八)
風……松盛琴人選…(五八)
本社柳翁忌句會……二南記…(六三)
續川柳家戸籍調……山雨樓…(六二)
西之町メモ……綠雨…(五八)
編輯の窓……山雨樓…(七五)
題字……麻生路郎…
表紙繪……三好計加…



滿洲川柳大會。一九三三・八月・大連松山温泉にて。
濤島大が袴織羽方下のそ ・君碧三瀬廣が右てつ向に籠盤
林小 ・君穴百川谷長 ・君明雨逸波が方左の君碧三 ・君明
か右てつ向列後 ・君萬月機高が姿服洋列前方下 ・君八若
迷四鬼片が人嘯の目人四列前 ・君樂連の天泰が目番四ら
子さん。そのの左が後藤玉江女史。

一八年本はんさ丸猫。んさ丸猫村下家柳川流女の市江松
さ愛を猫に常非。すで者齢高の一本日てしと家柳川で渡
。すでうさだのたれらけつを號こ丸猫らかろことるれ
（顯参事記の「る語を人柳」の氏蛋んあ村米號月八誌本）

五七五の飜譯

麻生路郎

五

宮森麻太郎教授の「英譯古今俳句選」(AN ANTHOLOGY OF HAIKU ANCIENT AND MODERN) は近頃稀に見る快著である。

日本獨自の最短詩型としての俳句を遠く海外に紹介する意味から云つて本書の好績は實に大なるものがあらう。その緒言に於て俳句の概念を流麗な英文で嚙んでふくめるやうに說かれてある點、殊に句の飜譯にあたつては先づ原句を日本文字で示めし、これをローマ字であらはし最後に英譯となし、單に英譯のみで明瞭を缺ぐきらいのあるものには英文で註釋を施し、更に句末には作者の小傳を附しある點、等々々、全く努力の結晶である

斯かかる名著と雖、俳人達が之を手にした時には必ずや兎角の論難のあることは想像に難くないが、反つて俳人外に於て飜譯問題を誘發し、幾多の人々によつて甲論乙駁されつゝあることは興趣が深い。

斯うした快著に對して、俳人の多くが觀光團のガイドブック視して顧みなかつたものとすれば、俳人の迂遠さを思はせられる。斯かる飜譯に特に選まれたる語學者としての宮森教授の事業を知つて說くに俳句の玄妙、俳句の眞精神を以てしたならば更に〳〵完璧を期することが出來たであらう。

六

私は俳句飜譯の是非については何等容喙の必要がない。しかしながら、著者が該書中に記述されたる川柳に對する記事と引例句、及びその飜譯については無言を呈し、著者並に大方の示教を仰ぎたいのである。

該書の一六頁に著者は川柳に對して左の如く述べられてゐる。

――上述のエピグラムは川柳に非常によく似てゐる。川柳は十七シラブルの機智詩で、川柳と號した柄井八右衛門（一七一八――一七九〇）の創造したものである。川柳はエピグラムよりも、もつと辛辣で、もつと卑俗である。」と。

然し、これだけの註解では私達柳人としては甚だ物足りない。殊に川柳を單に辛辣であり、卑俗であると片附けられては遽に服し難いのである。

著者も　これだけでは物足りなく思はれたものであらう、前述の記事の次にテイビカルセンリユウとは左の如きものであると十九句を引例されてゐる。この小論をすゝめる便宜上それ等の十九句を列擧することにした。（原書にはローマ字と英譯とが掲げられてゐるが、私は日本字で表はすことにした）

黑ン坊が黑ン坊をうんで安心し
芝居見た晩は亭主がいやになり
いつまでも生きてゐる氣の顏ばかり
一本のマツチに闇のたぢろきぬ
人格の裏を女にのぞかれる
今年も相變らずと醫者も來る
獨房に親鸞を知り耶蘇を知り
ひとつひに白と黑と黃いなひと
人生は再演出來ぬドラマかな
金持の家の下にも地震帶
眼に見えぬ神なればこそ信じられ
盜み心のないが乞食の自慢なり
親切に教へてやつてスリも乘り
よく見れば手のとゞくだけ澁い柿
あの星が二人の國と詩人めき
子を賣つた金稻妻のやうに消え
孝行のしたい時には親はなし
いつまでか十九十九の白拍子
町内で知らぬは亭主ばかりなり

以上が川柳の代表句であるとすれば、著者の川柳眼が奈邊にあるかが窺はれて、川柳とエピグラムが非常によく似てゐるといふ、大ざつぱ論が出て來ることもうなづき得る。

七

曾て私は國學院大學の講師金子元臣氏の誤られたる川柳觀について筆を執つたことがあるが、宮森麻太郎氏も又金子氏同樣、誤まられたる川柳觀の下に川柳を論じられつゝあることを悲しむものである。

著者は川柳と狂句とを混同されてゐること、
名句と駄吟の判斷を誤つてゐられること、
川柳そのものの動きについて何等關知されてゐないこと、
を前記の選句振りが歴然と物語つてゐると思ふ。その點私達川柳に携はるものにとつては甚だ遺憾に堪えない。

著者はエピグラムと俳句を比較して、エピグラムは二十行三十行の長いのもあるが俳句はそれよりも短かく內容も主材も違つてゐる。エピグラムの大部分は人事を扱ひ、主として諧謔、皮肉、諷刺を狙つてゐる。然るに俳句は主として自然卽ち自然美、自然現象を扱つてゐて常に季と關聯をもつてゐ

る。諧謔は俳句にとつては惡趣味であると云はれてゐるとまで述べられ、俳句の生命とも精神とも云ふべきは簡潔と暗示であると結ばれてゐるが、簡潔と暗示はひとり俳句に限られてはゐない。三十一音字の短歌に於ても簡潔と暗示は必要であるし、川柳の如きも俳句と同樣に十七音字の短詩としては簡潔であり、暗示的である。しかもこの簡潔と暗示は內容をより効果的にする叙法上の手段であつて、川柳そのものゝ生命とも精神ともいふべき內容そのものとは違ふのである。

從つて宮森教授が例示されてゐるエピグラムの大部分が人事を扱つて居り、川柳の多くが人事を扱つてゐるといふ點に於て、又エピグヲムが諧謔、皮肉、諷刺を扱つてゐるといふ點に於て類似するから、川柳は日本のエピグラムだと云つたら速斷も甚だしいと思ふ。著者宮森氏が英米の文士達は俳句は日本のエピグラムだと云つてゐるが、それは妥當でないと述べてゐられるやうに、川柳も又歐洲のエピグラムでもなければサタイヤでもなく、伊太利に於けるパツクでもないのである。

八

エピグラム(諷刺詩)と俳句、エピグラムと川柳のことを少しく書いたので、勢ひ宮森氏が代表的なエピグラムとして該書に揭げてゐられるものゝ三つ四つを此所に轉載してエピグラムの正體に直接觸れていたゞくことにする。

反譯か反逆かの嫌ひを惧れてエピグラムは該書の原詩のまゝにして置いた。

The Epitaph on Saon

Here lapped in hallowed slumber Saon lies,
Asleep, not dead; a good man never dies.

By Callimachus, a Greek poet.

On Acerra

Acerra smells of last night's wine you say,
Don't wrong Acerra; he topes on till day.

By martial, the most famous Roman epigrammatist

To Velox

You say my epigrams, Velox, too long are;
You nothing write; sure yours are shorter far.

By Martial

About Death

Why shrink from Death, the parent of repose,
The cure of sickness and all human woes?
As through the tribes of men he speeds his way,
Once, and but once, his visit he will pay;
Whilst pale diseases, harbingers of pains
Close on each other crowd—an endless train.

By Agathias

The Balance of Europe

Now Europe's balanced, neithere side prevails;
For nothing's left in either of the scales.

By Pope

以上の外にポープのビート ユアー ペート、ラングアのアン エピタフ アポン ヒムセルフ、エマーソンのザ スタツフ エンド ザ パドウル、アルドリツチのポビュラリテイーなどが揭げられてゐるが省略する。

前記のエピグラムを味讀されたならば、エピグラムの持つ特殊の味を知ることが出來やう。そして川柳の一部分と尤も近い感じのするのは最後に例示したポープのザ バランス オブ ユーロツプであらうか。しかしこの詩が持つユーモラ

スな味だけが川柳の總てではない。

九

こゝでは更に前へ戻つて宮森氏がテイピカル・センリューとして掲げられた句について一言したい。「黑ン坊」の句は狂句である。しかも叙法の拙劣さ顰蹙に値する句である。「今年も」の句は叙法幼稚、着想陳腐である。「ひとつひに」の句はローマ字を讀んで句意が不明であり、英譯を讀んでも、作者の句意とは違つてゐるやうな氣がする。若し英譯通りの句とすれば、まるで川柳になつてゐない。「金持の」の句は凡句、「盜み心の」の句は小噺から脱化した俗惡な句である。一々解說するまでもなく前記の十九句が代表的な川柳であるなどと海外にまで紹介されることは實に有難迷惑の甚しいものである。以上の中で「子を賣つた金」の句や「いつまでか」の句の如きは古川柳の味を傳へてゐて無難である。

又、宮森氏は川柳を十七シラブルの詩であると云はれてゐるが、この語は適當でないやうに思ふ。私は川柳を十七音字と云つてゐるが、これは日本字のアルハベツトの一字が一音を爲し、時に拗音の如く二字が一音をなすに反し、英語のアルハベツトは母音の外、一字が一音をなさず、一語が一シラブルをなす場合と二シラブル、三シラブル、四シラブルと云つたやうに數多くのシラブルをなすので、川柳や俳句を十七シラブルの詩であるとは云へないと思ふ。

次に飜譯上困難を感じるだらうと思はれるのは

戀の罠あの眼だらうか眼だらうか

といふやうな疊み齣の場合、意味の上で適當な語があつたとしても、それが外人の耳にスムースであるか、メロディカルに響くかが疑問であらう。

一〇

俳句の飜譯の至難であることについては小宮豐隆氏が八月號の「文藝春秋」で縷說されてゐるので、こゝで重ねて云はないが、川柳の飜譯はおそらく自然の客觀的描寫を主とした俳句（一部俳人間では主觀的な句を提唱されてゐるが、今は假りに從來の俳論に據る）よりも一層至難であることは言ふまでもあるまい。語感の相違による意外な聯想が生じ或は生じないために、作者の句意が全然改變されたり、何んの變哲もないものとされてしまつたりすることは珍らしくあるまいから、人情、風俗、習慣の相異を理解し得ない外人が、首肯し得る句に飜譯することは容易ではあるまい。

著者は

町内で知らぬは亭主ばかりなりを

All the town is aware
Except her own husband.

と譯されてゐる。なるほどこれで文字通りに反譯された觀があるが、町内卽 All the town が完全な譯とは思へない。日本人殊に舊江戸時代の町内と現代の東京市に於ける町内とでは町内といふ言葉の語感に隔たりがある。そこまで嚴密に言はないことにしても、どうも適當ではないやうに思はれる。この句はこれだけの文字の含蓄と暗示で、妻が他夫と通じてゐることを詠んでゐるのであるが、人情、風俗、習慣の異なる外人が、文字の中からそれだけのものを感じることは全然不可能であると思ふ。文字の飜譯がカツキリと當てはめてさへあれば、それで飜譯の能事終れりとは云へまいと思ふ。さうした飜譯は比較的樂であり、教場用としては最も適當であるといふやうなことを、九月號の「中央公論」で坪内逍遙博

士が述べてゐられたが、その程度の飜譯では文學の眞の味を傳へるのに適しない。さりとて、ただ意味だけとつて、飜譯者が出鱈目な辭句を挿入し、作者の思ひも寄らぬ味を出されても、これ又、眞の飜譯とは云へまい。

一句を一例としても以上の難點があるので要するに俳句や川柳の飜譯は殆んど原句に近いものが二十句に一句、三十句に一句位出來得るに過ぎないのではあるまいか。

一一

「セルパン」の十月號に、岡田哲藏氏が「東詩飜譯の問題」と題し　有形美術と音樂とはそのまゝにて國境を越ゆるが文學は飜譯をまつて外國に入る。そして散文より詩の譯は困難なることいふまでも無い——と述べられ、源氏物語の譯者 Arthur waley の a Hundred and Seventy Chinese Poems から漢詩の譯例を擧げてゐられる。かなり巧みに譯されてゐると思ふので、その一つだけを借用して見やう。

秋風辭　　漢武帝

秋風起兮白雲飛
草木黃落雁南歸
蘭有秀兮菊有芳
懷佳人兮不能忘
汎樓船兮濟汾河
橫河流兮揚素波
簫鼓鳴兮發擢歌
權樂極兮哀情多
少壯幾時奈老何

The Autumn Wind

By wu-Ti(157-87 B.C.)

Autumn wind rises : white clouds fly.
Grass and trees wither : geese go south.
Orchids all in bloom : Chrysanthemums smell sweet.
I think of my lovely lady : I never can forget.

Floating-pagoda boat crosses Fen River.
Across the mid-stream white Waves rise;
Flute and drum keep time to sound of the rowers song;

柳人を語る

井上劍花坊

劍花坊、關東大震災に燒出され、澁谷の親戚に寓し翌十三年五月居を高圓寺に卜す。杉並村がやつと杉並町になつた當座にて

ちらばつた家から驛へ皆急ぎ

の狀態なり。久良岐わざ〳〵反物を携へて見舞に來る。折惡しく不在、禮を缺ぐを遺憾とし、數日の後、富士見町を訪ひ、謝意を表し、十七字をつらねて、その再びの來訪を促がす。久良岐卽座に脇を附く。

杉並町の杉のむら立ち

自分の十七字は何とせしか、忘れて彼の句は今に忘れざるは、句の勝ぐれたる爲めなるべし。

Amidst revel and feasting, sad thoughts come:
Youth's years how few ! Age how sure !

八月二十八日の大阪朝日は」日本古典の世界的鑑賞」と題して源氏物語の英文譯完成を社說欄に於て推奬してゐる。譯者は日本へ一度も顏を見せないイギリスの Arthur waley であるが、紫式部の「源氏物語」は現代とは甚だしく緣遠い古語でつゞられて居り、世界中でも類を絕した長篇として知られる古典で、一ト通り讀みこなすさへ困難なものであり、日本人でさへ容易でないものを十年間に譯了したのであるから、その努力たるや言語に絕するものがあつたことゝ思ふ。正宗白鳥氏がこの英譯を讀んではじめて讀了し得なかつた源氏物語に興趣を感じたとさへ云はれてゐる。さうした言葉を經驗することは多少とも語學を知るものにあり勝ちだ。

私は杉村楚人冠氏ほどの年齡にして、しかもあれだけの博學と才能を有しながら、なほ且つ飜譯の絕對不可能論を稱へられつゝある熱と眞面目さとには深く敬意を表するものではあるが、ある種の讓步を敢へてするならば、飜譯によつて古今東西の人間が淸交し得るよろこびを思ふ時、飜譯も又棄て難いものであることを思はされる。

一二

私の川柳を獨逸譯されつゝある笠原博士は私の

元旦だせめて眼鏡を拭きましよう

といふ句を譯するのに、元旦といふ文字もある、せめてといふ文字もある、眼鏡といふ文字もある、拭くといふ文字もある、拭きましようといふ表現も出來る、が、「元旦だ」の「だ」の表現が困難である。「だ」を「である」といふ意味の言葉であらはしただけでは原句の味が出ない。「!」で表はしても原句の意味の出ないことは同樣だといふやうなことを云はれた。私はそれに斯う答へた。

さうですとも、それだけであればただ逐語譯に過ぎないので、文字の飜譯は出來るかも知れないが句意がその文字からは出て來ない。

原句の「だ」には私の過去の三百六十五日の苦鬪が泌じみ出て來なくては立派な飜譯とは云へません。それを出して頂かねばいけませんといつた。

笠原氏もこの言には同感であつた。そして適譯完成を約された。そして、私の

戀の罠あの眼だらうか眼だらうか

なども、戀の罠といふ語もあるさうだし、ただ「あの」といふ言葉に充分の意味をふくめることが困難であるだけであるから、これもいくつか譯して見て完全なものにして見ませうとのことであつた。そして私の句から譯せさうなものを選んで四五十も譯される筈である。これは私ひとりのよろこびではなく、川柳を海外に紹介する意味に於て非常な好績であることを思はされる。私は氣永くその完成を期待してゐよう(終)

近作柳樽

路郎選

一 微先生へ

兵子帶をぐるぐる博士出で給ふ　大阪　杏三

兩手出して受けるつらさを君知るや　同

編輯同人を辭す

振かへる山は巍然と聳えてゐ　同

拜啓と敬具の間で儲けてゐ　同

W さんへ

むこさんを三十一文字で釣り上げむ　同

疑ひを深めて一人夜を戻る　八幡　十七八

中年の戀ひげを剃りひげを剃り　同

わが家は溝の匂ひのする所　同

忠告を金に買はれた人にされ　同

神聖な戀とは泡を食ふ様な　同

雲仙へ登る（二句）

あこがれの雲仙である湯の匂ひ　大阪　正浦

島原や雨に濡れたる女ゐる　同

戸下温泉一泊

ヨカパイと言はれて銚子あけすぎる　同

鹿兒島見物して

城山で歴史のページくつて見る　同

別府にて一泊

ツゲの櫛誰の土産にするのです　同

本當のことを言ふのに匙を置き　香川　三汀

好き同志デパートを出る足が合ひ　同

胸を張つて三等郵便局長　同

毒づいて出る法界屋へビクトロラ　同

娘の背ポプラの如く伸びけらし　大阪　路生

海の道化師イルカは縦に泳いでゐ　同

痩せにけり南畫の馬に似た俺か　同

サロメの唇の赤い夏の夜だ　同

松の風海岸線のバス輕し　大阪　新市街

天の川夕刊賣がそれつきり　同

生活の全財産で招かれる　同

酒飲の心理も知らず止せと云ふ　同　寒草

金あらばこゝらにもある分讓地　同

資本主義殺されすぎる小の虫　同

迷惑に隣のラヂオ五球です　松江　冬生

汗水を流した金の葬儀です　同

寢ることに決めて一しよに蚊帳をはね　同

母と娘の中へ風呂敷ひろげられ　大阪　木圭

指を鳴らして童貞のそつけなし　同

山の灯へ女十字を切つて寢る　同

舞臺裏ほど刑事室吊つて居る　松江　粹句樓

榮轉の跡雜草に圍まれる　同

忘れたい事が續くに雨が降り　同

三十二だれはゞからぬ戀を持ち　大阪　あや美

紫石君の轉宅を祝して

新事務所來客を待つ椅子並び　同

華天のみつる君へ

こちらにもすゞめが居ると云つて來す　同

雅號を持つて食ひかねてゐる　長野　有爲郎

妹は生花僕は靴を穿く　同

日曜が來た日光を浴びようとか　同

久濶に扇の風を送り合ひ　大阪　大門

缺勤の机へころぶ不易糊　同

一人となつて目につくバスのお札箱　同

大きく息して山がうごく朝　堺川　羅門

掌の上の青空や強し母坐る　同

君も賣名家だつたな蟻過ぐる　同

柔道三段居候に置いてやり　大阪　喜正

妹と夫は沖へ〳〵行く　同

舞扇から思出の一週忌　同

おもふとはいはず溜息ついてみせ　同　榮二

遮斷機につきもどされた物思ひ　同

自動車の搖れるに任せきつた醉　同

ビルディング聳えて聳えて失業者　同　冬光

雨だれに明治維新の夢を見る　同

街は宵浴衣人形のポーズよし　名古屋　三都

夕立の洗つて行つたネオンの灯　同

餘寒去らず妹默つて編んでゐる　臺中　耕朗

バットの空箱二ツ三ツ机のほこり　同

教室の抽出櫛があるばかり　大阪　いわを

駐在所机一脚椅子二脚　同

アラモード裸のやうに水着ゐる　神戸　棄郎

叩かれる戸へ邪魔くさい帶を締め　同

夢は哀しとぼとぼ來れば光り消ゆ　鹿ケ池　寒子

兄の手記もう光明がないのなり　同

何事も知らず妾の子は肥り　大阪　菊路

麻雀へ子はあきらめて泣寢入り　同

故郷は田を賣る話賣る話　小松　しとし

覺めて可笑しき戀のモザイック　同

昇給は嬉しう規約金を出し　大阪　利生

大膽な姿に鯰生れつき　同

泣くな子よ親が苦しい注射器だ　　松江　夢迷

肖像畫羅漢に似たる顔でよし　　同

金か詩か時計の振子搖れてゐる　　大阪　春光

復讐のための結婚とは知らず　　同

流星の尾を曳くとこに療養所　　愛媛　宵明

ペンダコを拜む氣持ちになつて來た　　同

物識りか寄つて話が硬ふなり　　大阪　たけを

心中に彼女と同じ名を見付け　　同

秋茄子あなたにすまぬと云ひたげな　　島根　六郎

秋は秋は又百姓をかなしませ　　同

タイプライター女の音をたてゝゐる　　神戸　貧兒

いゝからだ顔は見ないでおきませう　　同

陽の光材か良心へ明る過ぎ　　大阪　芳一

默つてる方が實力握つてゐ　　同

人間は淋し死にますキリギリス　　松江　巷二

身の上を皆んな話して虫を聞き　　同

わが家は月の下なりまろび寢の　　金澤　今雨

川淺し暑中休暇の川淺し　同

血を吸つて居なかつた蚊のふとあわれ　高知　青雨

下駄なりで上れとは言へ大理石　同

退院にばんざいの聲さみしくす　大阪　千世女（凡子改メ）

おはり子の話千惠藏うたへもん　同

好きな娘の他人行儀もなつかしく　東京　佐保蘭

子が死んでからを健氣な白髪染　同

死の影のサツトかすめし水の色　螢ケ池　縷紅

山菓子を貰ふて蟬が鳴いてゐる　同

大西八歩氏來松

憧れてならぬ大阪きかされる　松江　莞路

夕顔の白さへ媚とバイブルと　同

屹度螫すものにして蜂殺される　螢ケ池　青鬼

同僚K君結婚の報に接して

主婦の友屆くデスクが一つ殖え　同

壁しろき無念無想の我ならず　同　松雨

ひとり來れば空虛に波が響くなり　同

ツントして居てチツプは置いてくれ　千里山　沐天

米の値は知らねど戀は戀となり　同

あへてする甘き表情女店員　長野　玲翠

手の皮の堅さを女見逃さず　同

こゝろに豚のごとく女せまりぬ　蟹ケ池　噴兒

たばこの輪ゆれ〳〵ゆきて子をつゝむ　同

つらからうと云ふて呉れたは人妻よ　大阪　一雄

ゴーストップ俺は田舎へ歸りたい　同

灯の色に損をしてゐるとは見せず　高知　映珠

この町の暗さの中にワンタン屋　同

賣子服似合はぬ齡となり淋し　大阪　小三

參詣人途絶へ乞食は話し合ひ　同

媾曳を驛手が知つてゐそうなり　高知　貞夫

風鈴は子の無い淋しさを知らず　同

まだ一人連れが揃はぬ扇風機　大阪　柳次

兩親の歳は知らないハイヒール　同

共稼ぎ後は風鈴だけの音　今治　心府

晩酌は明日の力となれよかし　同

慰藉料を取つて淋しい日を送り　愛媛　孤鶴

仕出かした罪とは言はず不運です　大阪　ライト　同

チンドンヤゴーストップへ音をやめ　同

背泳へ青さも青し夏の空　大阪　武子　同

年が聞きたい程看護婦の美しい　高知　蟬風　同

今さらに子の無い事が不足らし　同

隣り裏から夜の明ける家に住み　同

コニヤク今日の俺にも似た匂ひ　大阪　喜由　同

神經衰弱の原因が南京虫だつた　高知　梨生　同

君そんなこと云ふて首は健在か　同

横になる日の多くなる八月よ　大阪　美津女　同

黒襟の三味も彈けます構へなり　同　小舟　同

夕立に隣の雲は照つてふり　加賀　儀風子

テリヤ一足やかましく吠えて主人留守　松山　一紫

腹立ちへは蛇は骨あるものに似し　大阪　素月

子を抱いた夫へパラソルさしかける　松山　春峰

ずるそうな目が吊皮にぶらさがり

張合ひの無い程巡査あやまられ

値切つた一圓タク無茶な飛しよう　愛媛　南葉

今日こそはと思ふ日もあり床の上　大阪　一羊

打てば鳴る太鼓だ吹けば鳴る笛だ　京都　陸平

せゝらぎに惱ひとゝきわすれたり　同　子鬼

朝五時を眼覺時計忘れてゐ　松江　祥月

投票に行く朝しめる靴のひも　金澤　綠水

應執はあきらめられぬ宵の床　島根　青波

十度目の高さを乳房ゆる電車　大阪　勝二

洋服のつゞく朝の阿倍野橋　同　野人

二人きりキヤンプを少し離しとき　神戸　多郎

貧乏しても背戸の柿なつてをり　大阪　氷炭

ビルの影物干同志こぼしてる　同　千兩

糞諸共に金魚の情炎　京都　ゆきら

嘘をつく男を背に喫茶店　大阪　冬光

その王手惡ひと暇な顔がふえ　島根　鴉天

畫めしを納屋で喰たで子がはしやぎ　大阪　素萌

蟹は巣に足塲をおいて待つ雨よ　愛媛　蛙倉

うつり香へ妻の眉根がちと動き　高知　子蔦

ビールの泡が散りて膳のにぎやか　同　一沫

三原山の患者になれず病み續け　蛯ケ池　一更

勤續はもう彈力もゆるむころ　神戸　明坊

泣いたのがお可笑しい程に待たされる　大阪　舟々

八幡製鐵所外觀

煙突と汽笛の中へ夕日落ち　島根　水煙

似顔繪の見本の中に菊池寛　大阪　泊童

通る娘を二階でさわぐ年になり　同　白菊

太陽にはぢく今日も蚊帳たゝむ　島根　驟雨

面を揃へて謝りに來た　高知　郷村

てつちりへ亭主の通り箸をつけ　神戸　吉左吉

遮斷機が上り突き出る長い顔　大阪　一杯

部屋中がシップした様な憂鬱だ　和歌山　詩郎

九十五度の。暑の中に蟻と僕　同　省三

女房の若さ五十の白髪染　同　翠穂

勝つてみたとて俺は給仕だ　伊豫　芳岸

飲んで食ふ話どちらも五十八　高知　鐵吉

飯炊いてそれで男が立てばよし　兵庫　九天

半世紀振りの暑さよ病重し　螢ケ池　舟家

サーカスの鞭のうねりの眞劍さ　京都　白扇

微笑にかくして金を心配し　紀　泉三郎

貧しさへシャツのほつれのもの〳〵し　長野　玲翠

キャンプの夜姫とナイトに似しは戀　神戸　麥刀子

吉日は近し花名刺なぞ燒いてゐる　螢ケ池　一馬

髭の威嚴も涕かぜ引いて　京都　光街子

踏切でつまづく心角があり　大阪　白柳子

善人であつて一升買ひをさせ　同　青米

どたんばになるまで馬鹿になつてをり　同　元山

夕立に氷背にした雨宿り　同　天馬

今日も又心太屋の暑いこと　今治　小松

狂人の笑顔自動車止まるなり　京都　富美三

新夫婦笑ひの中に豫算立て　島根　汀雨

將軍を訪へば浴衣で飲んで居る　大阪　笛秀

病癒えず希望も捨てず安靜だ　佳香　（蟹ケ池）

二三歩の間だけなるビラをくれ　一笑　（大阪）

せめてもとその幻を持ち歸る　英二　（奉天）

行水の長さ子供は罪がなし　好啓兒　（神戸）

十錢でコーヒー附の雨宿り　勝幸　（大阪）

泣かされた眼へ電燈の戯れる　多計　（名古屋）

結局は死ぬまでの悲劇だ喜劇だ　秋光　（同）

雨だ二度床敷かへて見る天井　市坊　（同）

許してはおけぬ話も凉臺　掉二　（大阪）

ヴイタミンABCの風呂敷よ　公子　（同）

青疊夏を嬉しく腹這ひぬ　春彦　（大阪聖寺）

疊屋の疊よごれてゐるのなり　岩石　（大阪）

胸を張れ松の匂ひに田の匂ひ　のぶを　（同）

待てよ君壽命のまゝに負かしとけ　銀波　（同）

しんまいの新しいトランクに涙落ち　春一　（和歌山）

懐も知らず女給の愛想よし　千代吉　（雲）

親の墓子の墓すゝき搖れてゐる　青水　（高知）

傾むいた屋根にも菊の鉢を置き　大阪　青兒
フェルトを誘ふ白靴ソーダ水　同　はるを
戀の無い淋しさ雜誌を讀み飽きる　同　佐津美
結局は戀を戀したエゴイスト　同　角丸
大掃除西瓜をあてに手傳ふ子　同　三猿子
男は甘きものと知るチップ　松江　絹子
會つて見て瞳の中にある心　大阪　走馬
愁をば隱して客に出る雇仲居　同　美和子
繪日傘へ小僧は故意にホース向け　同　愛子
姿見へ映る白帆に青簾　同　堅
泣かしたる友に白髪と禿で遇ひ　同　良之佑
療養所我が身を例に慰める　神戸　燦宵
文明に勝てずリキシヤの減つて行く　同　幸捐
夏休み今日はカツボウ着の婦人　大阪　白糸
更生の日のサイレンは別な音　今治　十靜
ウキンドはもう撰りくずと云ふ姿　同　紫陽
花氷愛の二人に溶けて行く　松江　柳生

舊友の話儲かるらしいなり　同　榮吉

塵箱を漁る都と露知らず　名古屋　月茶

人生もかくやあらんか蠅取紙　高松　柳夢

靜寂に風を訊くなり病む夜なり　大阪　葉光

シヤボン玉に似た一生を金儲け　同　迂均

逢へばやつぱり君が好きだつた　櫻ヶ池　眞弓

水の色山の色みな秋の色　同　巷巴

よく笑ふ彼奴ぽつくり死んで行き　大阪　いの助

母親がにがしてやつたきりぎりす　大和　翠峯

一匹の蚊を追ふつかれ子の眠り　大阪　窮巣

空席があつても座らぬ折目つき　同　太公望

忘れてるとこが云へないかん〳〵帽　高知　兼子

此の頃の暮し佛に手を合し　同　吳羽

空が青いとて藥瓶の眞晝　同　草路

突出しの豆に笑はれさうな戀　高知　青果

太公望鮒三疋で返つて來　大阪　九文錢

武玉川初篇研究（七）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

(496)

紙燭して遣る恩のはしまり

省二＝恩は恩愛の愛が勝つて居ると解したい。「戀の始り」ではあからさま過ぎる。紙燭は紙撚を油に浸し灯火の代用とせしもの。

東魚＝戀の意はなさうに思ふが、解し得ない。

秋の屋＝他人に恩をきせると云ふ意ではない歟。自宅に來た客が歸る時。紙燭をなし送出するのであらう。

省二＝戀關係のものがあつた氣がするので、一寸句を探してみたが見出さぬ。「始り」に重きを置き前陳の如く解したのではあつた。ム四「恩の紙燭の捨所なき」。戀の紙燭となつてゐないから、同情位に解すべきか。

東魚＝主人が初めて奉公にきた下女などに對する恩かと思ふ。例へば、臺所が片付いたら湯へ行つてお出で、勝手は足元が悪いから紙燭を持つておいで、戸締はちやんと頼むよ、などと云ふ場合かとも考へらるるが如何。

(497)

嘘はうしろの見たい駕の内

東魚＝原本は「咡」である。何か巳の事を云つたのではなからうかと、駕の内で氣を廻す。見え坊なやつが、えてありがちな事で、穿ちの味が面白く受取れる。

秋の屋＝「咡」に相違ない。

省二＝他の活字本は皆、咡とある、咡るれば振返りたいが人情。

(498)

木枕を都から來て匂はせる

東魚＝旅の木枕へ、都人の髪の油などの良い匂が移る。それをかう咏んだのであらう。

秋の屋＝石部の宿の木枕は、都から半長が來て、髪の油を匂はせた。

省二＝「木枕の香も只ものでなし」(ム一一)。也有の旅論に「木枕に横たはりてぞ一日の樂みはおぼえぬ」で旅情を說いて居

る。朝鮮には木枕があるので、私も夏分は用ひてみる。冬はいけない。「木枕に鼻紙あつる夜寒かな」(風麥)。

(499) **半年の埃を見て居る硯箱**

東 魚＝特に大切にしまつて置く硯、それは正月書初めに出したまま、今度七夕に出す。半年振りの埃に驚くのであらう。

秋の屋＝先づ前説に賛成が出來る。

省 二＝同

(500) **捨子の棒のつつかいもなし**

東 魚＝「捨子の」の「の」は、「に」の弱い程の意味。籠で捨られた子の頼るものなきを、かう云つたのではあるまいか。

秋の屋＝ある物を支持する事を、俗に「つつかい棒」といふ、其棒のことであらう。

省 二＝賛成。原句に關係はないが捨子の句を

かな棒であやせば笑ふむごい事
かな棒で赤子の論にきずをつけ
子を捨てた鬼鐵棒の音に逃げ　(古狂句)
捨子を抱て這入る棒突　(ム一〇)

(501) **子にゆるひ頭巾かふせて網代守**

省 二＝子を思ふの情。自分の頭巾を被せるのである。

秋の屋＝寒氣の身に迫つて、耐へ難く思ふ網代守が、吾が子の爲に頭巾を脱いで、それを被せるのは人情である

東 魚＝ゆるい頭巾を被せる處に、妻に先立たれたらしい想像もされる。

(502) **齒の若さ茶漬の中に石の音**

省 二＝御飯の中の砂や石程、不愉快なものはない。然し若いうちは、まあ我慢もせねばなるまい。「衰へや齒にくひあてし海苔の砂」(芭蕉)。石と砂、老若の差は現はれる。

秋の屋＝老人になつて義齒をすると、米飯の中にある砂礫などは、其儘嚥下してしまふのである。

東 魚＝父が晩酌(いや朝酌、晝酌ぶツ通しだつた人だが)の時、よく「目は一里先の標札でもよみ、齒は石臼でも嚙み申す」なんと云つた事を思出す。齒の若さは齒の丈夫さの意の方が強いのだらうと思ふ。年とつても中々齒の達者を自慢な老人もゐる

(503) **朝日を供のふさく干物**

省 二＝乾物に朝日が當つてゐるのを、一寸ふさいで邪魔をして居る供とは、客の供であらう。

秋の屋＝先づ來客の供とみるより外に、何とも解釋が出來ぬ

東 魚＝場合も場所も想像がつかぬ。

(504) **娵入となしに抱取て行**

省 二＝兎にも角にも、來て貰らはねば納りがつかぬと、引取つてゆくのを、抱取つてと深入りした言葉を用ひたのであらうか。

秋の屋＝一種の略奪結婚で、相手は高利貸でもある歟。

東 魚＝抱取てが子供に對する言葉のやうに感ぜられる。赤子のうちから許嫁になつてゐる子供を、成人後嫁入るべき家から遊ばせに連れにくる、と云ふ樣な場合ではないか——偶々ケイに「今の内じやと嫁にする子を抱て」を發見した。裏書されたやうな、氣がされてならぬ。

(505) **消炭を人と思はぬ八王寺**

東 魚＝家藏の原本は、どうも「も」としか讀めぬ。炭に緣の深い八王寺、消炭さへも親しまれる。卽ち「人と思はぬ」は

「他人とは思はぬ」の意かと思ふ。
秋の屋＝木炭の本場の八王寺では、消炭などは炭と思はぬといふのである。
省　二＝然らむ。私見た原本には「を」とあるが。

(506)

あほう拂の接待へ來る

東　魚＝接は原本は攝の草體だと思ふ。誹諧の季題にある攝待で接の字とかくやうである。所謂七月佛の爲に往來の人に湯茶を供する門茶である。あほう拂は俚言集覽に、大小兩刀を取上げて追拂ふと云ふのであるから、道樂の末の勘當されたもの――或は揚屋の拂が出來ずに突出されるのも云ふかと思ふ――が、行き處なく道すがらの門茶を貰つて、渴を醫やすと云ふ意であらう。
秋の屋＝阿房拂は、放蕩息子の勘當などではなく、武家に於て雇人などを遂放するので、刑罰の一種である。
省　二＝武士の兩刀を取上げる刑。「殿樣のお耳に立てば好い仕合で御改易、阿房拂か切腹か、死しても惡名消えはこそ」（夕霧）。

(507)

取持顏て宴のめど

省　二＝酒盛の中心人物。酒席上手な人。
秋の屋＝「宴」は「さかもり」と訓み、「めど」は眼目の意で主人の叔父とでもいふ者であらう。
東　魚＝「めど」は接待の中心人物をさすのか、宴たけなはなる好時機をさすのか、侍する者の中にこれはと目ざす美女のゐる意か。其女を取持たうと云ふのか、宴會の目的だと云ふ樣な意か。色々とれるやうに思ふ。

(508)

藏造夏の嘶の怖しき

省　二＝藏は壁などの乾き良いように、夏時工事をする。下物語も其の催として娛しまる。藏と怪談は適合した材料。
秋の屋＝「藏造」は泥工の意ではなく、藏を造るといふ意であらう。例としては、鍋島家の妖猫の怪談がある。
東　魚＝「藏造り」でなく「藏造る」かも知れぬ、其方が口調はよいやうだが、さすれば「る」を捨てさうなものだと思ふ。或は「土藏造りの家」を「藏造り」即ち「土藏風の塗屋造り」を云つたものかも知れぬ。さうした暗い、ひんやりした家で其の夜怖しい話をしてゐると云ふのかも知れぬ。

(509)

二心内の淋しきゑひす講

省　二＝夷講を催すに就て、家の内の相談か圓滿に一致してゐない、到つてお粗末にすますと云ふのか。
秋の屋＝太腹の主人と、吝嗇の女房とが意見の衝突に依て、他より客も招かずに、夷講を淋しく擧行するのであらう。
東　魚＝別に異見もない。

(510)

雀眼も欲にありく棚經

省　二＝そして「戻ると腰のぬける棚經」（ム五）――餘談であるが柳樽八六編に、「棚經はお布施の紙で尻をふき」此句通りの事を少年時代にみて、大に奮慨した事があつた。
秋の屋＝盂蘭盆の棚經は、寺院の所化が一年中の書入れであるから、血眼になつて東西を奔走するのである。
東　魚＝とり目どころか、欲には目がない。

(51)

一網つつに亭へ挨拶

省　二＝亭の場所、亭の人物を察知し得よう。亭の人々は一網毎に感興多大。

秋の屋＝大川端の大名屋敷か、富豪の別荘の亭であらう。
東　魚＝銀鱗の躍る網を、欄に倚つて見下す。一讀凉味を感ずる。

(512)

脱て女に戻る水干

省　二＝水干は概言せば、狩衣裝束の一種。（堂上方が蹴鞠の時などにも着用された）、白拍子は着てゐる。（卯花園漫錄に說明がある）。白拍子も水干姿は四角張つたものだが、脱げば女だ、エロたつぷりだらう。
秋の屋＝鎌倉時代の白拍子は、烏帽子に水干をきて、腰に鞘卷を佩び、男裝してゐたのであるから、それを脱げば女に歸る
東　魚＝言ひ廻しが巧みである。

(513)

松の風少しかたまる置炬燵

省　二＝置炬燵に寄合ふ、外は松吹く風。
秋の屋＝「少しかたまる」は、少し面白くないと思ふ。
東　魚＝「少しかたまる」が不明。うしろの寒さを覺えて、少し身を炬燵に寄せ合つた、炬燵に抱きつくやうに身をよせたとでもいふ意味か。

(514)

放馬抱た男に智惠はなし

省　二＝危險な放馬を抱きとめた。ゼントルマンでは出來そうにない。
秋の屋＝白刃を持つた狂人を捕へるには、智惠の働が無くてはならぬが、放馬を止めるのは、無智の下郎にも出來る。
東　魚＝愚直な馬方のやうな人物が、あぶない放馬を、平氣な顏で止めたと云ふ場合が想像される。「智惠はなし」は、はたから見て「危ないのになア」と思つた心持。「よせはいいのに」と內心危ぶむ心持を、かう現はしたのであらう。

(515)

死たいと言ふた師走の恥しき

省　二＝一夜明くれば、千里同風のお目出度い日が、迎え得たのだから。
秋の屋＝首を縊る繩切を探したは、昨夜の一夢に過ぎなかつた、目出たし〳〵。
東　魚＝「恥しき」と云ふとしほらしいが、中には「いけしやア〳〵」と甦り」と云ふのがあるから、凄じい。

(516)

先の家內をあてる進物

省　二＝進物の種類により、先方の家風家情を當てる、想察する。
秋の屋＝此の「家內」は家庭の意ではなく、家柄といふやうな意で、先方の貧富をあてるのである。
東　魚＝貧富もあらうが、先方の商賣柄、人柄と云ふやうな事もあらう。例へば、こんな凝つたものを呉れるのは、多分イキ筋からだらうと云ふ樣な場合

(517)

不機嫌な日は音のない臺所

省　二＝例へば夜分迄も、お勝手元が賑やかに整理などの音がして居れば、家內中御機嫌圓滿と察せられる。
秋の屋＝主人が不機嫌なので、女房や下婢がその意を酌むで靜肅にしてゐるのである。
東　魚＝奥さんが御機嫌が悪い場合とも取れる。三人よれば姦しい女中共も、少さくなつてゐると云ふ風に。

(518)

青田に成つて乳か見へる人

秋の屋＝「青田」とは、子を產むだ女の事で、外骨翁著「猥褻

語辭彙」に、享保五年の京阪西川祐信の著畫「繪本美徒和草」に「婦人の産後、俗に青田八反と賞美す」とあり、此語意解し難しとあるが、此れは産後の婦人の〇〇は、青田八反と交換する程の價値が有る、と云ふのであらうと私は考へる。

東 魚＝御指示の書未見、御教示を謝す。

省 二＝私もその事知らざりし。「青田に惚れて新造を買ひ」（武四）もそうであらうか。

(519) **何所へ行とも言はぬ雨性**

秋の屋＝雨性は既に解說されてゐるが、外出する毎に必ず雨に逢ふ人の事で、其人が何處へ行くとも告けず、ふらりと外出するのである。

東 魚＝家人などに「又ふられる」と冷かさるるので、何とも云はず、ふつと出て行くのであらう。全くかう云ふ出る度に雨に逢ふ人はあるものだ。

省 二＝老父が旅行をすると、必ず降る。實に妙だ。當人も今では傘を用意してゆくが、そうすると降らぬ。其時は傘を忘れて歸つてくるのも一興。「その癖志賀は晴る雨性」（ム十二）「雪約束は雨性の伊達」（ム二）

(520) **淀屋かたいこ長崎て死**

秋の屋＝大阪の富豪淀屋辰五郎が驕奢の餘り外國の珍奇な物品を覓める爲に、出入の幇間を長崎へ遣つたのが、彼地に於て死亡したといふので、秦の始皇の爲に不老の藥を探した、徐福といふ男に似てゐるのが面白いと思ふ。

東 魚＝奇拔な趣向の句だ。長崎の異國情緒に陶醉してゐるうちに、本ン元の淀屋は沒落してしまつたので、長崎へ永住する氣になつたのだらう。

省 二＝面白い、複雜な內容を僅か十四字で盡し得てゐる。「大事のむすこ長崎で死」（ム十二）は、淀屋の背景に及ばぬ。

(521) **鳴戸を越て紅繪さめ行**

秋の屋＝阿波の鳴門の荒い潮風に吹かれては、江戸名物の紅繪も、其色彩が褪めるであらう。

東 魚＝「こえて」か「こして」か、前者がよさそうに思ふ。

省 二＝「こえて」とよむでゐた。其方が聲調に强味を帶ぶ。

(522) **下々に見らるゝ顏も初幟**

秋の屋＝武家の若樣の端午の祝に平素出入の下々の人にも、其顏をみられると云ふのである。

東 魚＝若樣もであらうが、其生母である奧方も嬉しい顏をみらるゝ心持ちがあるやうに思ふ。

省 二＝若樣に相違ない。

秋の屋＝旗本ならば格別であるが、大名の奧方であると、下々の者に決して顏を看せないのである。

(523) **莊子の夢の山吹へ來**

省 二＝昔者莊周、夢爲胡蝶とは有名な話。「莊子の夢の飛びあるく麗さ」平凡な作。

秋の屋＝昔から蝶の夢を材料とした、幾多の歌句が存在して陳腐至極である。

東 魚＝さてはこの蝶、拜金宗か。

(524) **嘘をつく顏へ時雨の降りかゝり**

省 二＝嘘をつく顏は、どこか間の合ひ兼ねるヘンなもの、折柄一寸時雨がふりかゝつて、一層間が惡い。

秋の屋＝此句は「僞りのなき世なりけり神無月」がまことより時雨そめけむ」に據つたもので、現に嘘をつく人の顏に、時

雨がふり懸るといふのでは無いと思ふ。

東　魚＝そら涙を時雨に云ひかけたやうな氣もされる。

省　二＝そうらしい。

秋の屋＝改めて前説に贊成する。

(525)

飛ふ傘はくらい買もの

省　二＝清水の舞臺から飛下るのは、前出二句あつた。思慮分別を失した買物、思ひの闇に迷つた買物。

秋の屋＝思の闇といふよりも、心の闇といふ方が適切であらう。

東　魚＝飛ぶ爲にだとは、明して買ふわけにもゆかぬ心持も思はれる。

省　二＝「飛ぶとぶたれる江戸の清水」(ム九)とあるは、上野清水觀音堂であつて、京に比しての舞臺造、四圍尤も櫻が多かつた。「清水も江戸のは飛んで叱られる」と古川柳にはある。「飛はすに叶ふ江戸の清水(ム十三)。「江戸の清水で飛ぶのは二百づつ」(柳ゴリ三)。

(526)

内に寢て獨おかしき夜着ふとん

省　二＝内でねながら、あの三布團を思ふて、獨りおかしくなる迄に、分別がついたわけさ。

秋の屋＝「老夫婦ある夜をかしき蒲團哉」とあるが、獨寢も共寢も、可笑しさは同じである。

東　魚＝昨日の已にひきかへて、今日の貧弱な布團にねる自分、われ乍ら笑止千萬遊びにたけた人物が想はれる。

(527)

死際は人形に似てきり〳〵す

省　二＝女がキリ〳〵スを嫌ふ句は多い。人形に比せられたのは冥すべきか。可憐

秋の屋＝虫の將に死なむとする、その聲愁しとも云へる。

東　魚＝人形は祓の形代の、ヒトカタの方であらうと思ふ。

(528)

浪人たけはすたる言傳

秋の屋＝不明。

東　魚＝色々の知人の言傳を賴まれてきたが、中で浪人してゐるから一つ宜敷たのむ、といふのだけは、先方も迷惑だらうと思つて云はずに置くと云ふ場合か。或は言傳を賴むに無事でゐるとか云ふ事は云つたが、今浪人の身の上だといふ事は、秘して置くと云ふのか。

省　二＝熟考を要する。後日再度の研究に俟む。

(529)

願叶て怖しい町

秋の屋＝遊女が早く素人になりたいと云ふ。多年の念願が叶つて、遊廓を出てから往事を顧みると、五丁町は怖しい鬼の住所であつた、と身顫ひをするのである。

東　魚＝成る程お説の通りであらう。

省　二＝「地女になつて昔の怖ろしさ」。「素人になつて昔の怖ろしさの」古川柳あり。

(530)

細工が成つてはやい還俗

秋の屋＝僧侶の還俗でなくて、松ケ岡へ逃込むだ、新尼かと思はれる。「細工」とは策略のことであらう。

東　魚＝男の方でもよさそうに思ふ。跡取りが死むだからあれを還俗させなければならないと云ふ方略を立てて、手輕く還俗する樣な場合。其實は影に「かの後家」なるものが糸を引いてゐると見てもよろしからう。

省　二＝還俗をする弟子をもつ松ケ岡かと、解してはゐたが

唐人笛

住田亂耽

新涼とはいひながら、家の中ではまだ蒸し〳〵する夜を、門先へ床几を持ち出して、すゞやかな夜氣に浸つてゐると、遠くからチャルメラの音がたえ〴〵に流れて來る。これはこのごろ隔晩に必ずやつて來るわんたん屋のおやぢが吹いてゐるもので、之を聞くと、私は忘れてゐたものを急に思ひ出した時のやうな氣持で「あゝさうだ。今夜はおやぢの來る晩だもう暫く起きてゐて待つてやらねばならぬ」と獨語するのである。このわんたん屋とは全く馴染になつてしまつて、あのチャルメラを聞いておき乍ら、おやぢが來る迄待たずに寢てしまふと、何か義務を果さないやうな、又人を待たしておいて、その人をすつぽかした時の、うしろめたい、すまないやうな氣持に似たものが心の中に殘る。向ふの方でも、多分しにせのついた得意先のやうな氣持で、當てにして來るのであらうから、こちらでもおやぢが來る迄、門先でかなり辛抱强く待つてやつてゐて、ぼち〳〵やつて來ると、必ず何かを喰べて、之でやつと義務をはたしたといふ若干のすが〳〵しさを感ずるのである。

或る晩、チャルメラの音が好きな私はそれが、玩具の喇叭のやうに、口に當てさへすれば、簡單に吹けるものと思ひ込んでゐたので、おやぢからちよつと貸りて吹いてみたが「すうすう」と息が拔けるだけで、薩張りあの妙音をつくり出す事が出來なかつた。

おやぢが言ふには「之だけでも、筋の惡い人は吹ける迄には一週間位もかゝりまつせ。私は二時間程で吹けるやうになりましたが」

と暗に自分の筋の良さと、簡單に見えるこんな商賣往來にも相當の修練が要る事をほのめかした。「チャルメラを吹くだけに、一週間も練習せねばならぬのだから、それ以後のわんたん屋修業もこりやちつと骨だ。若し失業しても、私にはこのわんたん屋の流しは一寸出來さうに思はれない。第一、あのチャルメラが、奇妙な音を出しては、だしも何も腐つてしまふであらう。

「おつさん、笛吹いてんか」と闇の中から近所の誰かゝ言ふと「毎度有難う御座います。へえ、吹きまつせ」と宣言してあやしげな五色の硝子の灯と車の音を佗しくこと〳〵と狹い夜道に殘し、あの哀音を聞かせてくれながら歸つて行くのである。

○

遠ざかつてゆくチャルメラに月並な感

傷をかんじて、妙にしんみりした氣持になつてゐると、つい思ひ出すのは亡くなつた父の事である。

父と言ふと、私は直ぐ鼻を思ひ出す程父の鼻は相當立派なものだつた。芥川の名篇「鼻」に出てくる禪智內供のやうなものすごい鼻ではなかつたが、ピラミッド型の堂々と顏面のまん中に君臨してゐたものだつた。

父から叱言をうける時などは特にこの鼻に大きい壓力を感じた。私の句に

養父の鼻に威壓されてゐる

といふのがあるのをみても、愚陀の

父を喪ひし風流へ

鼻の印象に春うそ寒し

といふ句を見ても、父の鼻が相當のものだつた事を雄辯に物語つてゐる。この追悼句をくれた愚陀も既になき數に入つてゐる今年の秋は、ひとしほ物のあはれを感じ易い私となつた。「子養はんと欲すれど、親待たず。お前も少し親に孝行をする事を考へなさい。」と難しい漢語交りで、冗談のやうによく言はれたが、之も今は大きな悲しい事實となつてゐるのである。幼い時惡戲をすると、父は大きな鼻の上に大きな眼を光らして「ゴールド、ダイミヤウ」と言つて叱つた。この言葉は、叱られる時に必ず聞くのだが、中學へ入る迄これが「God damn You」の訛りであることは勿論知らなかつた。今ではこんな英語の訛りのはしくれも、父のなつかしい思ひ出だ。「子養はん……」といふ句も「ゴールド、ダイミヨウ」も父の海軍時代の收獲なのである。

父は海軍にゐた關係で、晩年でも、若い頃の海軍氣分を愛してゐたやうだ。町會議員に立候補した時、外に寫眞が幾枚もあるのにわざ／＼はたち時代の水兵姿の寫眞を地方の新聞に出した位であつたこんな事を平然とする風變りな父でもあつた。

父のこういふ風な海軍的フアツシヨには度々膽を冷した。中學生時代、勉强はそこのけで、庭球、蹴球、野球とあらゆる遊び事に熱中した私を憤つて、その度にラケットを折られ、蹴球靴を斧で潰され、バットを焚物にしられ、時には木刀で追ひ廻された事も度々あつた。

遂に、ヒツトラーの焚書のやうに、教科書迄燒いてしまふといふ所まで行つたが、幸ひ之は母が仲へ入つて實現せずにすんで、胸を撫でおろした事を覺えてゐる。こんな事を思ひ出しては、父の毅然とした、一本氣の所を嬉しく感ずるのである。

このやうな憤慨で、たゞさへ弱い父の心臟を一層弱くして、死期を早めたのかも知れないと思ふと、女道樂や、赤化ボーイとなつて父を苦しめたより、はるかに罪が輕いと自ら慰めてみても、父に對してまことにすまなかつたといふ氣持が胸一杯に擴つて來る。

急性肺炎で、危篤狀態に陷り、腦症を起してゐても、父の言ふ事は一々正鵠を失つてゐなかつた。「お父さんしつかりして下さい」と手を握つて言ふと「お前等こそしつかりせい。」と、死の直前にまだこんな氣强い事を言つてのけられた又臨終の少し前に「墓口を出してくれ」としきりに言はれたので、方々くまなく

探してみたが、皆目その所在をつきとめる事が出來なかつた。透視術といふのか何事もよく當るといふ評判の高い、高野山別院の坊さんの所まで行つて、所謂お伺ひをして貰つても、その墓口は見つからなかつた。その坊さんは「西南の方角の入れ物の中に入つてゐる。」

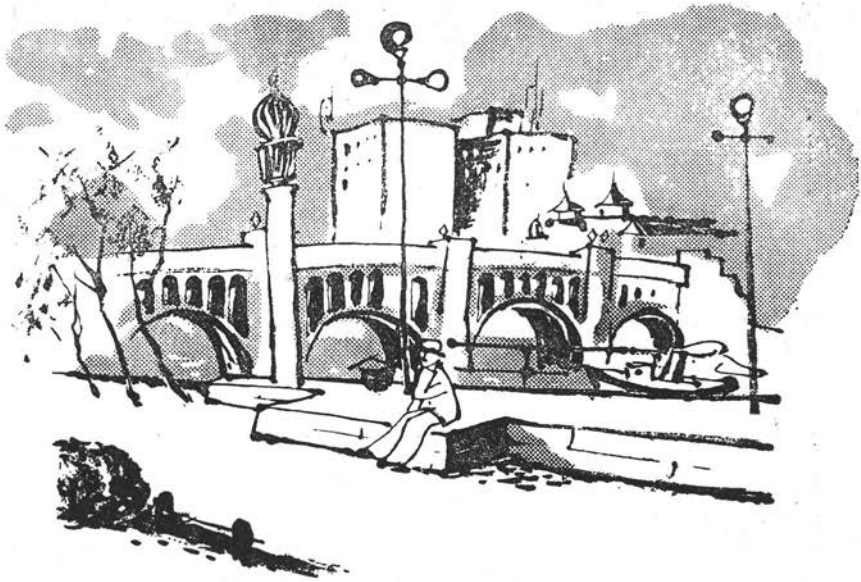
と言つたさうだが、全然その方角にもなかつた。それで遂にその墓口を手に握らす事を得ずに父と永遠の別れをしてしまつたが、多分父はこの鍵の入つてゐる墓口を私の手に渡して、安らかに眠るつもりだつたのであらう。この事でかなり私は神經を痛めて、最後に大きな不孝をしたやうな氣持で、その當時一層憂欝な日夜を送つた。

それから、あれやこれや責任の重さの爲にこの事も知らず〳〵頭から離れてしまつて、一年餘りも過ぎてしまつた今年の八月の或日「亡父の追善圍碁會を催しますから若干金寄附をしてくれ」といふ意味で町の有力者達がやつて來た。追善をするのに先づ遺族へ頭から金額を定めて寄附を言ふて來る人達の、ものの判らなさに、可なりの反感をもつたが、無下に斷つて、相手の感情を害ひ僅かな金の事で、今後の處世上に影響をうけてもつまらぬと思つたので表面はこゝろよく承諾した。その時に「碁會の席上で、故人と對局してゐるやうなつもりで石を置いて行くいはゞ式の樣なものがあつて、それに故人愛用の碁盤を用意しておいて下さい」と聞かされたので、早速藏の中にしまつてある碁盤をとり出しに母が行つたのである。女手にはなか〳〵重味のある盤をやつと外へ持ち出して、さて一度手入れをしておかうと、碁器の蓋をとつた所が、奇蹟とでもいはうか何とそこに父の墓口がはつきりと母の眼に映つたのである。母はその時、一種のインスピレーションで、頭の中がシーんとしたといつてゐる。今から考へるとそれは確かに父のなくなつた室の西南にあつたのだが、誰もそんな中に入つてゐるとは夢にも思つてゐなかつた。こうなつて來ると、やはりあの別院の坊さんの言ふ事はよく當るといふ結果になり、今まで抱いてゐた碁會の世話人達への反感は、霧消して全く感謝に代つてしまつた。まことに勝手なものである。

もし會を催してくれなかつたら、私は碁を打たないから、恐らく永久に墓口は明るみへ出なかつた事であらう。

その中には、百幾圓か殘つてゐて、この不景氣に、まことに有難い話で、中の銀貨は全く錆てしまつてゐた。この金で碁會の寄附も輕く片附いたので、時々說教をきゝに行く母は「之も佛のおひきあはせや。お父さんはえらい人や、死んでもわたし等に、厄介をかけられへん」と感歎久しうせられた。そして言葉を次いで「こんな金はさうむざ〳〵使はれへん」と暗に私の濫費に對して豫防線をはられたが、私もこんなエピソードのある金はやす〳〵使へぬ事に同意しておいた。

私はこの墓口を見る度に「墓口を出してくれ」とせがんだ父のかすれた聲が何處からかすかに聞えてくるやうな氣がする。そしてあの時に一度之を握らして上げてゐたらと、今更歸らぬ愚痴にしてもしみ〴〵と思ふのである。



日本名所名物川柳

大阪の巻

麻生路郎選
大西長三郎畫

日本の名所名物を川柳で殘したいと思ひ、その第一着手として手近な大阪の巻を約一ケ年計畫を發表することにした（路）

（四）ダム

切れ話ダムを兎も角降りるなり　山雨樓

おかあはんダムはこれだすネオン灯　比古

角帶にダムの階段高すぎる　いわを

ダムの風宿の浴衣がならぶなり　豆秋

水都祭ダムへ大きく寄りかゝり　夢裡

畫のダム丁稚同志の高話　紫石

いとはんとぼんちを呑んだダムの口　弘之典

堰きれぬダム青春の血にも似る　一久

ダムのとこ遊覽バスは停めただけ　白柳子
夫婦橋然と並んでダムが出來　無鬼
秋風のよどみてダムは忘れられ　機見女
ダムひそと夜の都會に白く居る　素月
ダムの夕映も大阪のプロフィル　艸樂
なんぞになるんやろダム出來上り　葉平
ダムをみてゐる僕の下駄が滑りそう　靜太
ランデブー橋の方よりダムを行き　水車
夜遊びがダムの仕事を見てかへり　踏幸
子を呑んだダムの灯りの明るすぎ　遊帆
引き潮へたゞ超然とダムの脚　變人
巡警にダム冷やかな色を見せ　二南
滿水のダムへ映つた避雷針　紅
ダムの扉に明日をあづける船世帶　文久
珍客へダムの說明してあがり　麥魚
大阪のダムに蚊ばしらたつてゐる　鮎美
起重機の影はダムまでのびてゐる　同
紅涙もあろう道頓堀のダムの水　翠夢
揚げ鬢とダムの眞晝に語りたり　同

大阪をたづねあぐんでダムの風　八歩

◇

日本の名所名物を川柳で殘したいと思ひ、その第一着手として手近な大阪の卷は御承知の如く私の選で毎號發表を續けて居りますが、大阪の卷ばかりが毎號發表されるよりも各地が入り亂れて發表されてゆくのも各地の讀者諸君にとつて一層興趣が深からうと思ひ、ボツ〳〵全國の川柳大家にその選句方を依囑することになりました。

北陸の卷を金澤の安川久流美氏に滿洲の卷を大連の大島濤明氏にお願ひしたところがたちどころに選者たることを快諾されましたのでその方面の投句家は勿論、その地に遊ばれて印象づけられた人々の佳句名吟を投じられんことを切望いたします。

他の方面に對しても、ボツ〳〵各地の大家にお願ひすることになつてゐますから御期待下さい。（路郎）

月・評

俎上の秋

山雨樓・水車
丹路・町二

近作柳樽より

下駄見ればまだ〳〵若い妻の下駄

裸人

山雨樓——妻が次第に歳をとつて、顔の皺が増えて行くことを寂しく思ふハズの氣持がよくあらはれてゐる。新らしい下駄か、鼻緒の派手な色かにフト見付けた女の若さ——若さ好み——に浮き〳〵した氣分を覺えたのである。「まだ〳〵若い」といふ齣がよろこびに浸つたときの言葉としてふさはしい

町二——下駄といふ文字を首尾に置いて破綻を示してゐない點敬服。皮肉に墮ちず穿ちの誇張にもならず。あつさり叙して讀む者の微笑を誘ふ。

丹路——妻が次第に歳をとつてゆくのに對する寂しさを句主に感ずるよりは、僕は句主なる人の妻がその「若さ」への再認識のよろこびを感じる。

水車——私も通卷、此の句に心をひかされた。妻の下駄まだ〳〵若さ失はず、と言い度いところだが原句であつて初めて作者の心がうなづかれるやうだ。

釣りしのぶ二階の縁で米を研ぎ

木圭

山雨樓——一見平凡な街の風景である。だが其處に小さな諦めに生きる小市民の可愛さを、そしてそれが又人生の妙味であることを感じられる。事實僕もかつてこうした生活を經驗して來たので唯の客觀事象として見逃せない味はひを覺える。句主がなまじつか小主觀を交へてゐない點がこの場合句を大きなものにしてゐる。

町二——「釣りしのぶ」でわづかに清新の氣を與へてゐる。句はむしろ平凡と思ふ。あまくてもいゝ。感傷でもいゝ。平凡でもいゝが、底に苦さを湛えてゐるものを僕は望むこの句は「釣りしのぶ」で救はれてゐると同時にあまくもなつてゐる。

丹路——この句は勿論第三者に訴えやうとしてゐる句ではない。此頃さかんに作爲の克つた句、野心的なおどかしの句が目につくのであるが、その反動でなしに、好感をもつ。併し句を大きなものにしてゐるとは思えない。むしろ平面的である。

水車——スケッチ句としたら見てゐる方もおそらく二階の縁かどこかであらう。教へられる句である。下五でうまく引き締めてあるので救へる「二階の縁で」を端にした方が此句の主眼が生きよう。

山雨樓——句を大きなものしてゐると云へば餘りに過賞したやうに思はれたかも知れぬが、僕は句の餘情を深くしてゐる、と云ふ意味で言つたのである。所謂自然主義の行き方にこの句の場合よさを認めたに外ならぬ。

蟻よそこは下駄の下だよ

噴兒

丹路——表現方法の如何に依つては、案外つまらぬ皮相な内容しか讀者に與へない

と思はれる句の素材であろ。この句の内容がつまらないのではない。表現が拙劣なれば見られない句になつたであらうと思はれるのである。句主の感情をあからさまに出さないで專ら暗示的な表現方法をとつた處にこの句は成功してゐる。素材を如何に取扱つて之を表現にまで導くか――考へさゝれる。佳句

町　二――「下だよ」に不消化を認めるがさゝやかな美や眞理を、習ひ覺えたマンネリズム的技巧で纏めて事足れりとしてゐる句等に比べて、素材を生かさうと努力してゐる點は大いにいゝ。

山雨樓――僕は又、この蟻をいたはる可憐さ(と云つても幼稚な子供らしいと云ふ意味でなしに人間の原始的な愛)が胸に迫つてくるのだ。稚拙の妙を覺ゆる句だ。十七字を意識基本的にせざる破調に對して贊し得ぬ僕ではあるが、この句に付てはこの上一字音の加除を必要と認めない。しかもこの句は誰でもが眞似の出來ぬ純なもので着色されてゐる。眞似たらそれこそ鼻持ちのならぬ甘さに終るであらう。殊に「よ」か重つてゐる點など。

水　車――「足跡のくぼみに蟻は重傷だ」鮎美が思ひ出される、口語調から受けるやさしさはあつても、今一息の深さがほしいと思ふ。ものを觀つめるよき心の表はれとして自然的な粉飾のないのがいたゞける、が例句のやうなつくらない强味を出したいと思ふ。

病ゐんへ行つてなみだの天と地と　　英彦

町　二――十歳の少年の作だといふ私は正直に兜を脱ぐ。頭をさげる。「病ゐんへ行つて」の素直なしかも必然的な表現「行つてが不要だなどゝは云へない筈だ、何故ならこれで「なみだの天と地と」の素晴しい、だが幾分浮き氣味になる言葉の眞實性をつなぎとめてゐるからだ。

丹　路――「病ゐん」を「病院」とせず「なみだ」を「涙」としない用意のよさ。少年作家の將來に期待する。

山雨樓――十歳位の子供の出來榮えとしては全く驚嘆に價する。だがさう云ふハンデキャップを取り去つて取り去るといふことは問題としても)味はつて見ると、さほめてばかり居られぬ。第一、「行つて」は明確を欠ぐ。次に「天と地と」が概念的である詮じ詰めて檢討すれば徒らに煽情的に感傷に終つてゐることを否定することは出來ないと思ふ。結局元に戻つて十歳の少年の作だとしての詩才に驚くべきだ。

水　車――「病ゐん」「なみだ」を假名としたことにそう深い用意のあつた譯ではあるまいが偶然の効果から來る餘韻はげなし難い。構想の大なること蓋し少年の天眞によるものか。

風ひら〳〵〳〵うれしい今日の戀　　弓磨

町　二――古句に「ほれられた日は一生のいゝ天氣」といふのがある、この句は如何?「風ひらり〳〵」の表現が問題だらう。恐らくこの手法からみると、逢つて後か逢ふ前かの一人歩きに思ひ出し笑ひをしてゐる光景だらう　古句ほどの强さがない。

山雨樓――僕は寧ろ「今日の戀」がキズであると思ふ。既に戀を得てその思ひ出に陶醉してゐるものとすれば、風をたのしんでゐる氣持があまりに付きすぎて平凡のやうだこれはまだ見ぬ戀を描いてゐる場合と見た方が句の趣を增すと思ふ。しかしさうだとすれば下五を「戀の道」とかいふふうに推敲する必要がある。

丹　路――「うれしい」が目に立ちすぎるこの句を推敲しやうとする努力は――少々無駄な「遊び」になりさうだが……

水　車――何かせゝこましい感じがする作者としては餘程感激してのこゝであらうが、全体に低調であるのがうらみである　此種の内容は大膽な叙法が必要ではあるまいか。

山雨樓――僕はこの作者と同じオノイスに勤めてゐるので、その生活をよく知つてゐる。この句は作者の心からなる生活感情ではないのだ。戀を戀する氣持で習作したものであるから勢ひ水車君の指摘した大膽さに欠げてゐるのだ。作者の作句經年もさほど深くない。表現を練れと勸めたのはそれを知つてゐるからである。

川柳塔より

人を嘲けり唇を噛みしめぬ　山雨樓

丹　路――主觀を一歩も出ず、主觀に徹した句。何時の世にも主觀客觀は論議を呼ぶのだが、それを別にして、この句を味ふ。「嘲けり」が強すぎるが句面全體に滲むもの全て句主の香りたかき人間味の體息である。主觀一點張りの大膽な正攻法には胸をうたれるものがある。

町　二――この句に接して久し振りに山雨樓の句を讀んだ。そんな氣がする。何故山雨樓はこの道をも少し行つてみないのか。今月發表の他の句はどれも僕には物足らぬ。あゝいふ物の觀方感じ方、そして表現法は、もつと年でもとつて、月並を愛するやうな氣になつたときでもいゝと思ふがどうだ。何も主觀にのみ徹せよといふのぢない。固く尖つた句がいゝといふのでもない。山雨樓君はきつと反駁するだらうが、僕は僕の持論から卒直に云つてみた。

山雨樓――これは有難い言葉だ。僕も、もつとつきつめて心を（從つて表現を）磨かればならぬと思つてゐるのであるが その至らぬことの多いのを常に悔いてゐるのだ。しかし僕は僕の箇を磨くことを一方的に局限しないつもりだ。主觀の句もよければ、客觀の句も亦捨て難い。つまり多情なんだね。自分ではこれを多角性だと思つてゐる。僕は努めてあらゆるチャンスから柳味の吸收にあせつてゐるのだ。眼にふれる、心に映ずる總ての川柳を逃さないことに懸命であるのだ。その結果何物をも摑み（完全に）得ないかも知れぬが、さうした努力の中に自分では何物かを得るつもりでゐる。そのかはり定型律は捨てない決心でゐる。それも捨てゝは遂に川柳と絶縁するより外はないと思ふから。

秋風の中で乞食に拜まれる

豆　秋

山雨樓――この句は選句清記のときに初めて讀んで感心した。それから再び校正のときに見て傍の誰かに推賞した 今日句評に當つてもう〳〵名句だと思ひ讃嘆を措しまない。この句には穿ちもありユーモアも含んでをり眞迫性も感じられるが、そんな要素の多いことは第二としても、人間豆秋の溫かい風懷が直ちに讀者の胸に おごり込んで來る――これは川柳が齎らす最も洗練された人間の醍醐味だ――からである。しかもこのさゝやかな十七音字を通じて斯くも巧みに詠まれるとは、實に神韻に近い作と稱して憚からない。

町　二――褒める方は 山雨樓君が引受けたから贅言を加へないことにするが、「拜まれる」といふ表現が僕にはぴたりとしない。人間豆秋の溫かい風懷――と 山雨樓君は云ふけれど、作者は恐らく落漠とした秋風を一層身に泌ませて甚しい憂鬱と 虛無感を覺えたのではあるまいか。その淋しさの底から湧き上つてくる溫かいもの――作者は そこまで行かぬうちに句にしたのでは あるまいか

水　車――我も打つなり秋の風、作者はこ

れだけのことを言はずしてとぼけ顔なるは心憎い。作者の句作態度としてはさしく努力の句でもあるまい。一見素通りしても又見直させられるのが常だ。

丹　路――諸氏の説に夫々賛。

山雨樓！秋風と乞食と自分とが無言の應對を示してゐるだけの風物詩ではあるが、一度乞食に拜まれて見ると何とも云はれぬ人間臭を覺ゆる。これは川柳發祥以來取り上げられて來た、そして川柳の最も根幹的な要素をなす詩のエスプリであらうと思ふ。落漠とした秋風に包まれ始めて自己の奥底に潜んでゐた温かい風懷が呼び出されたので、フット乞食に言葉をかけて見たくなるほどの熱いものを覺えた――その刹那の心を捉えた――人間豆秋の漫歩振りに、この句を通じて深い〳〵親しみを感ぜずにはゐられぬ僕はそこが句の尊さでありよさであると思ふ。句作としてはさまで苦心したものでないかも知れぬが、この句を生むに至つた人間豆秋の詩的陶冶には全く頭が下がる。

別莊で風邪ひいて來る金もあり

竹　楓

山雨樓――皮肉だ。痛快だ。だが悪ごさがちつともない。再讀三誦して舌の上に殘るものはいとも朗かなユーモアである。恐らく川柳の本筋（代表さるべき本質の一つ）を活歩してゐる好例句であらう。「金もあり」と他所々々しく云つたところに憎らしい程のうまさがある。「金があり」としたらそれこそちつぼけな句に終るところであつた。

町　二――川柳の代　する本質が「滑稽・皮肉・穿ち」とすれば、この句は正に上乘のものと思ふ。併し作者の素材の扱ひ方は非常に常套的である。だが新しい角度から扱つたら、折角の本質が消えて仕舞つたかも知れぬ僕はむしろ消えた方がいゝと思ふのだが……

丹　路――「金」への一つの見方ではあるが「風邪ひいて來る」と云ふ見方は、古すぎはしないか。作者のからだから湧くユーモアは感じ得らるゝが、ユーモアのためのユーモアでありすぎる。もつと新らしい内容のユーモアを發見すべきだ。さすれば素材の扱方が全然變化されねばならないが。

水　車――趣味川柳と川柳趣味、前者は警戒すべく後者は大いに發輝したいのだが稍もすると趣味川柳にとらはれ易い。「滑稽・皮肉・穿ち」が川柳の全生命であり得ない。此句は諷刺として生きてゐる。

粉ぐすりをさみしくなりて吹いてゐる

靜　太

水　車――さみしい ほんとにさみしい句である。いたづらな感傷句として看過することは出來ない。のますとのむ方との對照的な皮肉味もあつて捨て難い。下五客觀に空ぶけたる、涙の喜劇ではある。

町　二――細いがはつきりした線の句だ僕は作者の同じ境地を別な表現に試みた句を作者からプライヴェートに見せて貰つてゐるので、むしろその句の方に心をひかれるが、これはこれでいゝと思ふ。

山雨樓――「さみしくなりて」はわかる。そしてよく肯ける。だがそれはあまりに靜太君に同情（といふより寧ろ味方）しての見方ではなからうか。つまりこちらの見方がはまりすぎてゐるのではなからうか。もつと離れた眼から見るとき、この「さみしくなりて」は或る疑問符を孕んで來るやうに思ふ。手取り早く言へば「さみしさ」を押賣りしてはいけないし、買ひ過ぎてもいけないと思ふことだ。しかし、これは句を磨く立場から聊か慾を述べたのに過ぎないので、この句の「さみしさ」が押賣りと云ふのでは決してない。

丹　路――私の慾から言へば、醫科學の所産である「粉ぐすり」を吹いてゐる句主の「淋

しさ」――それをもつとつきつめてから句にして欲しかつた。町二氏に寄せられた別な表現に依られた句が、どんなか知らないが「これはこれでいゝと思ふ」町二氏の感懷ほうなづける。

町　二――寄せられた句を擧げたいが、今手許にないので、正確に云ふことが出來ないのは遺憾です。

戀に似てるがだいぶ逢はない　　司郎

町　二――丹路君の「鉛筆がないので二階からおりる」と共にこの句が目についた。一見味もそつけもないやうな表現でゐて、仲々どうして作者の眼は鋭い。つきものゝ感傷さやあまつたるさが微塵もないのがいゝ。

丹　路――僕もこの境地を詠もうとした事があつたが斯うは巧みに詠い得なかつた技巧の技巧をふるい落した表現に敬服。

山雨樓――武玉川張りの七・七―十四字詩だ。それ故に表現が張つてゐる。その點はいゝ。しかし「戀に似てるが」と冷靜を裝つた言葉が物足らない。これは其處まで進展した戀でない、懺みが含まれてゐるのかも知れぬが弱々しい。どうも下の齣とそぐはないものを感じる。結局十四字詩を撰ぶべき句想ではなかつたのかも知れぬ。斷定要素に乏しい句想は短かい調律にふさはしくないのだとも考へられる。

町　二――冷靜を裝つてゐるのではなくて、初から冷靜なのである。そこが面白い。七七の十四音ではあるが、決して武玉川張りではないと思ふ。武玉川ならもつと美事な技巧を弄するだらうし、リズムも武玉川みたいにするだらう。僕はこの句の投げやりな調子に心をひかれたのである。

水　車――明かに白狀してゐると思ふ戀そのものが實は魔物で山雨樓氏説の通り十四字には無理だが叙法の新らしさをとる。

―川柳句集―

潮騒

麻生路郎序・住田亂耽編著

故伊藤愚陀を偲ぶ友情から愚陀の句を拾ひ集めて愚陀篇となし、これに亂耽自らの亂耽篇を合纂して句集「潮騒」の刊行となる。
愚陀・亂耽共に新感覺に生きる新興柳壇の異彩。敢て一讀を薦む。

價七〇錢　送費六錢

大阪市西成區玉出本通三
發行所　不朽洞
振替大阪三〇三九二
（麻生幸二郎）

雜筆春秋

來る十五日

安川久流美

十月十五日には川柳雜誌社の東京句會があるといふ、菊薫る秋冷を關西からの遠征即ち全國を網羅して集る句筵となる譯である、何ををいても出席したいと思ふが、果してこの樂しき句會に列席出來るか否、今のところ何とも確乎した事がいへない。金のある時はひまがなくひまのある時は金の無いヂレンマで或は又このチャンスを逸してしまうかも知れない作句するといふよりも東京で路郎氏にあふたり、三太郎氏の朗かさに接することはとてもいゝ氣持ちだらうと想像するのである。

× ×

川柳人が百人近くも集まつて默々として作句のみに餘念なく碌々親しみを交さず別れるといふ事は、從來の經驗によつて飽氣ないことであらう、たとへ喫茶位の程度でも、席を改めてテーブルスピーチをやるのも柳友親交としてよい事ではあるまいか——。私は小松の「ねこ柳」七週年會には都合で出席せず祝電のみ打つて置いたが、その受取りとして「あとの會」の寄せ書を貰つた無論酒宴の席からである。此あとの會が最も胸襟を展いて嬉しく紀念會を有意義あらしめたをと思ふと、旺んに飲んだ時代が戀しくなる

× ×

芋狩に紅葉に秋はいよ〳〵深くならうとする神無月の十五日には東京へ柳友が集まつて一日をみやび心と珍し心に交錯する「川柳雜誌」の試み、路郎氏の奮闘の卷である。中央に集る川柳權へ關西よりの出馬、汽車の便利は遂に柳友の親睦をあたゝめて吳れる、行け全國の柳士よそして日頃もつ意見を交換し、大に作れ而して後大に樂しめ、川柳の社會的進出は今ぞみとめらるゝのである。

（九月十四日）

大阪なまり

曾矢左海

「只今急行車通過で御座います、暫く御待ちを願ひます」

車掌君の發聲と同時に必ず「チェッ」と云ふ乘客の舌打ちがさもいま〳〵しそうに少くとも一つや二つは洩れるものであります。急行車に追ひ越される普通車の不平は時間的意味と競爭的意味を含んで相當熾烈なものであります。殊にそれが夏の暑いラッシュアワーに於て然りであります。先日私は野球の甲子園からの歸途、狂的雜沓を潜り拔けてやつと乘り込んだのが普通車でありました。どこの停留所でありましたか例に依つて「只今急行車……」と來たのであります。そして型の如く「チェッ」と云ふ舌音が超滿員のそこゝに起つたのは云ふまでもありません。併しこの場合乘客の九十パーセントは甲子園の熱砂の反射で赤黑く彩色された野球のオッサン達でありました

そして一様に未だ醒めやらぬ熱戰の興奮を窓から吹き込む凉風によつて癒やしつゝあつたのであります。だからたまりません。何時もなら舌打だけで濟ませたでありませうが時が時、人が人です。喧燥耳を聾するばかり車内に立ちこめたものであります。

「急行のやつ盜壘しよつた」

「こつちが封殺とはひきあはんな」

「何時まで殘壘さすんや」

「形勢逆轉やさかいしようがないがな」等々々。最後に私の前に坐つて初めから今日の試合講評をやつてゐたシャツ一のオツサンが大きな聲で叫びました。

「暑うてかなはん、出したれ〳〵、衝突したかてかまへんがな」

そして隣席のカンカンのワカイシに小さな聲で附け足しました。

「第二輛車やさかいに大丈夫だつせ」

見た話・聞いた話

辻　いの助

レヴュー、劍戟、歌舞伎等々盛澤山な場末のS劇場、安價な感興と娯樂を求むる觀客に依つて滿員、滿員の盛況——。

舞臺はいま「幡隨院長兵衛」の劇中劇森田座の場面、二階西棧敷のとつつきに陣取つたK俳優扮するところの水野十郎左衛門、その端然と濟した背後に、これはまたどうしたことか、太く、ハツキリとWCの文字！

× ×

大阪驛に着いた田舍者らしい老婆、驛の俥夫を捉へて曰く「大阪のビンボ町て何の邊になりますかナ」驚ろいた俥夫「婆さん、なんぼ大阪が不景氣かてまだビンボ町てあらへんで」でよく〳〵問ひ質してみればビンゴ町の誤りに、俥夫「よう云はんわ」……。

武玉川輪講補說

森　東魚

○加多の句

「たけの揃はぬ加多の洗濯」に就て、加多は紀州の地名である事が分つたが、尙俳諧觸から左の句を拾ひ得た。

1 田植ほと並て加多の雪搔て（ケイ三）
2 女の聲して加田の豆蒔（同五）
3 前髪ひとり加田をうこかす（同五）
4 たれこめて春は吾孫子も加田に似て（同七）
5 櫂吹倒す加田の晴嵐（同七）
6 貞女わびしき加田のいとなみ（同七）
7 櫂を目あてに加田の嫁入（同八）
8 擢うちかへす加田の浦風（同十一）
9 立櫂の影か軒もる加田の月（同十八）
10 遣ひからしを加田の立艈（同廿一）
11 思ひきや加田て密夫仕やうは（同廿一）
12 艈立て淋しき加田の遠千鳥（同廿一）

ざつと此の位が目についた。これに依つて櫂を立てると云ふ句の多いのを氣付いて調べてみると、「俳諧翌檜」には

蚊田村　此浦に建櫂（タテカイ）と云ふ事あり戀の詞也。

又、「俳諧所名集」に

蚊田村　又かだの浦、ちどり、いさり火。

建艈と云ふことあり戀なり漁人の家婦なりとある。どう云ふ意味合ひで門口に

櫂を建てるのか分らぬが、錦木と同じ様な事で、たゞこれは求婚の男が其門口へ櫂を立てると云ふやうな事ではないかと想像してゐる。御高教を得たいと思ふ。

尙紀州沖で働く漁夫であるから一度沖へ乘り出すと中々戻つて來ない。其留守を加田の女達は堅固に守つてゐるとされてゐた事が以上の1261 1などの句面から想像出來る。省二氏が「加多は形見の浦の事」と說明せられたが、私は別の處ではないかと思ふ。前記の所名集にも別々に記されてある疑を存して置く。

○鷹の頭巾

「鷹の頭巾を拾ふ買出し」に就ては、明解が得られなかつたが、色々例句を集めてみて、矢張り、鷹狩に行く鷹に被せた頭巾である事が分つた。如何なる形のものであるのかは明かに出來ないが、恐らく頭巾の付いたマントのやうな式の脊の一部まで覆ふやうなものではなかつたらうかと句面から想像される。例句を擧げてみやう。

鷹の頭巾を拾ふ菌取（ケイ十四）

頭巾をとれば鷹の羽をうつ（同　十四）

（前句）風きゝく雨か霰か枯柏

頭巾着せても氣のはやる鷹（同　廿一）

隼の頭巾縫はせる妹が許（同　十七）

鷹の頭巾を落す木からし（眉　二）

終の句は眉斧日錄（湖十）二編にある。

以上の例でみると逸やる鷹を靜まらせて置く爲めに着せる頭巾のやうに思はれる尙明かに圖でも發見される日を待つものである

○腕か椀か

「腕をさすつて狸煮て居」に就て、私が原本が椀にみえる事を申添へたのであつたが、過日三面子翁から原本、腕に違ひない事の御通知を受けた。尙最近手に入れた版の良い原本を引合せてみた處、腕に疑ふ餘地はない事を確め得た。茲に岡田翁に御禮を申上げて置く。

（昭和八、九、一四）

文　通

福田山雨樓

僕は文通に或る癖を持つてゐる。出さぬ人にはどんなに親しい仲でもあまり出さない。それから一度出しかけるとあまり懇意でない人にでも（懇意なものには尙更）繁く手紙を書く。

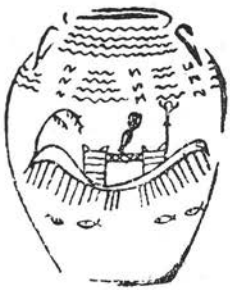
現に綠雨兄には旅の便りの外、まだ一通も手紙らしい手紙は出したことがない（貰つたこともないが）町二君や靜太君にはかなり頻繁に出してゐる。

町二君は過般久良伎翁から矢次早の手紙を貰つて、その熱情と精力に全く叩頭したと告白してゐたが、久良伎翁の手紙は餘りに有名である。

省二先生の筆まめにも大概のものは大刀打出來ぬやうだ。どうしても借金になる。

僕は返事を怠ることに或る口實を持つてゐる。これは甚だ身勝手な口實だが眞實なのだから謝る場合に時々使ふ。

それは「返事を直ぐ出すと、すぐ肩の荷をおろしたやうな氣になつて手紙の主を忘れ易い。ところが返事を怠つてゐると、いつもその手紙をくれた人に借り勘定を感じて、返濟する迄忘れられない。毎日その手紙を見て濟まないと思ふ。この心持ちが人間の純なものを培ふ」と。



川柳塔

路郎選

住田亂耽

凡愚列傳のいが栗頭かな

ビフテキの味覺拳闘家を思ひ

情熱の滓ひげがのび髭がのび

ポインタをもらひらけたる刀圭家

重役がひとり殘つてゐる机

活字をきつたり貼つたりしてゐる一日

象牙の箸をやはらかな夜が包む

將棋にまけてぼそ〳〵と歸りゆく

ある人に

酒のめば例の人口過剰論

天眼鏡で爲替相場をみてゐるよ

税務官吏の頭の緻密さをおそれ

大漁圖あさひへ船が出揃ひて

完全な愚夫愚婦となり汽車を待ち

山本丹路

あゝ太陽に手をさし伸べしたわけ

朝のあいさつの正確をうしなはず

恐れ入つて候ぞ風すでに秋

どうする氣かと本箱に問はれ

バスの車掌さんに

白粉の匂ひにたじろぐ日もあらむ

つながれる血を何となく惧れ
涙撒きつゝ少女的な夜をもてり
嫁入といふ結末を彼女もち
就職の祝ひしたゝめかるきしつと
お嬢さんあなた自身が神祕です

吉田水車

電氣局見本にしても明る過ぎ
支那外交
借り倒す氣は親日とやらになり
ブルースがどうのと疊蹴つてゐる
選りかすのやうな緣談もち込まれ
はる〳〵と來たへ掃除を手傳はせ
キツチリと足袋もだゝむで女氣の

震災十週年

大臣も福神漬の味を知り
金溜めるやうではいかぬとも言はれ
賑かなとこはと問へば車夫笑ひ

福田山雨樓

兒の頭漬物ほどのにほひする
耳搔きへしばし浮世を忘れたり

うんこさす父の朝々イタにつく
あてのない見合ひの寫眞撮つてゐる

松丘町二

心死して昨日今日なし明日さへも
ひとつの我を秋かぜにおく
八階の隅に晩夏の日を見つけ
口笛ふけば口笛が日のいろに似て
高壓線が秋を裁斷して鳴れり
風の雩日の雩帽子掛の帽子の雩
鋭ごゝろの哀しくつのる秋の酒
心耳漂渺光の走る音聽けり

橋本綠雨

朝顏を蚊帳ごしにみる町端れ
屋臺店夜のあけたのを知らぬやう
滯りがないかと村をはなれ行く
取落すコツプも秋の臺所
行水のすてた所に櫛が落ち
病んでゐて預金がどうのこうのと云ふ
魚籠の中へ電車賃だけ入れる

鼻の穴ガラス越しなるオットセイ　朝田新水

生き殘る金魚と俺の無一物

糸屑の沈むも晝の金盥

頃もよし肴の味の靜けさよ

舊ばかりいつてる母と月を見る

コスモスは到る所に見る秋よ　西田艸樂

待合所檻のけものに似たるかな

お馬鹿さんねとゆとりのある拒絶

ちつぽけな慾ぢやないかと月が澄み

夕立が汽車串ざしにしてしまひ　岩崎柳路

熱河にて（三句）

アンペラに細紐一つ熱河なり

暑い事熱河阿片の花咲けり

驢馬のいなき熱河に居るを意識する　關本雅幽

學校が嫌い子守りが上手なり

乞食ツンとして去りしまゝ誰も來ず

巨船動かぬ水平線が伸びてゐる

○　喜多春秋

目かさめて蚊帳の天井を蹴つてみる

心だけもらつておくとうつくしい

一と盛りの茄子を買ひます文化帶

下駄箱も机も琴も新家庭

朝の茶におちぶれた友死んだ友

子を膝にこの子の親は惡い奴

口止めに來てもう一つしやべるなり

校名へ第一球はストライキ

御奇特な事じやと坊主遠慮せず

妻若し袂くはへて水を提げ

觸感の秋教會の大理石　西村明珠

大黑柱が不足いひそな脊の骨

帶の芯女をしやんと座らせる

叱られた子の讀方に節がつき

嘘を聞く爲めの耳とは母さびし

働いてゐる鉛筆に無理がなし

別染が出來た女のやかましさ

七輪の下をあほぎて秋樂し
債券がたつた一枚氣にかゝり　水谷鮎美

露ころりひやけなすびにぎんの秋
眞裸の父を指さす裸の子
にんげんの自由が闇にひらけゐる
後範を示すに走らねばならず
吾をはなれぬさびしき雲よ
妓の嘘に鬼灯がなる
頭髪の伸びる氣配を手で掴む
猫の仔をあげます秋のさびしさよ　中澤濁水

初戀の二十年目に交す猪口
呆氣なく拂つて歸るレントゲン
君もかとばかり參詣混みかへし
小使の兒が廻したな金庫の字
無遠慮に見られた易に腹だゝず
趣味の友訊けば我が子とおない年
夕刊の目に御飯です〳〵　妹尾變人

圓タクのそれから先は言へぬなり
酒の威の無茶が通つて夜が明ける
表面は笑ふて馘首の話なり
手土産のないのへかしこい子のおじぎ
あり餘る人はつき合ひしてくれず　奥野禿山

塗り替へた今日喫茶店三代目
口紅の貸借女給仲のよさ
半琴を抱へて聲を賣りに來る
やつと買つた老舗の外に資本要り
獨り身の女給クキンの夢を逐ひ　渡邊曉童

蹴をかついで道あけてやる
めしかごがかぜにゆれてるさみしさだ
ある時の雫の姿聖者めき
雨勢はげしく時計みつめる
一つ汽車ですとは女闘々し　生田翠夢

おはぐろトンボ京のあの娘を思ひます
スタンドも消して女の大膽な

丸髪で來たがボーイは知つてゐる
欠伸からまたも女がすねはじめ　春元紀太

酒好きの和尚へ派手なトマトの膳
其の若さ歸るきつかけ見付けかね
パンと鳴るストロー女給もの靜　義兄轉勤す

榮轉へ後二ケ月の定期捨て　宮岡白峯

藥局で冷し飴屋を惡く云ひ
ブルジュワジー軒の朝顏二寸五分
それそこが百萬圓の思案也
勳一等功三級の感謝狀　市塲沒食子

涼み臺死線を越えて來た話
恩師とや云はんも餘り依怙な沙汰
テリヤの尾切りに朝から夫婦連れ
甘たるい話階下は聞いとれず　竹內機見女

義理は淋しき溢れる水へつぎ足して
ことぐにおもしをおけど秋の風
月が動いた机も位置を變へませう
度し難しと思ふ巡査に秋晴れて　尼綠之助

こんど言ふたらなぐる氣になり吸ひつける
煙突のゆがみに遠く秋の雲　新婚の冬木立君へ

新生の意氣の二人に明けし日よ　熊谷紅

溫泉の街の便り屋號が古くさし
金を惜んだ銀行の板圍
佛敎阿彌陀經母小ぢんまり　石森靜太

秋の窓ロイド目鏡の男ゐる　入院八百日

六度二分の靜太へ秋がさわるなり
病葉おちてかなしみの掌のひらや
ひとり居の鉛筆ばかり折れるなり　荒井英賀夫

酒の部屋へ來て相談は弱くなり

一人息子であり長男でありもてあまし
寢てゐる間だけでも振子留めたろか　岸上錦石

失業へ蚊帳の釣手の音淋し
イチヾクの甘さに似たる港の娘　中島鐵洲

小玉氏の愛兒を悼みて

思ひ出は哀し坊やの江戸言葉
家内中籐椅子に掛りや月の出て　石曾根民郎

下剃がだまつて秋の水注ぐ
既に〳〵督促狀が刷つてあり　川島芳子座談

いたづらに鄉土を守れとの秋か
人間はば生きてゐる見榮ありとせむ　松下小柳子

男裝の妖しき功もねぎらはむ
貧乏の時計くるわずうごいてゐ　首藤竹楓

落日の海にすわつてゐる女
いつぞやの彼女だつたと思ふ空　河合紫石

寢るだけの化粧へ妾念を入れ
自尊心此處も二十日で又出され　姫田夕鐘

淋しさよ雨は八ツ手の葉をすべり
童貞の皮膚の艶には負けました　龜井愚寵

酔ふた妓へ肥屋のほうが除けてゆき
秋風に島田の髷をのせて來る　大西八歩

秋が來たんだなあ釦をかけて坐る
一日山に寢る草履が枕なり　奈良井柳人

空想を護つてくれる母があり
札持てば夜店さげすむ氣にもなり　首藤竹楓

此頃の私は

子供等と繪をかいてなぐさむ
部屋がうつろな秋風に鳴る　首藤竹楓

頰つぺたを撫でるくせあり生活苦
試す氣の女は涙ためてゐる

危惧ひとつ

山本丹路

作品の批評を方法論から規定して、大ざつぱに印象批評と科學的批評とに分つ時、今日川柳界に最も易々と行はれてゐるのは、印象批評なのである。もつとも評者自身は、純粋なる印象批評でなく、潜在する科學的批評に立脚する印象批評なのであらうが、潜在する科學的批評が「潜在」する限り、科學的批評の本質から、左様な言葉は通用しないのである。私がこゝに問題を提出した所以は、斯かる印象批評が、批評さるゝ者として或は第三者としての讀者として何となく物足りないと云ふ餘りに自然發生的な不滿と疑問に出發する。

印象批評は一つの個と他の一つの個との交渉によつて生じる私達が通常經驗する最も初歩的な印象批評は、一冊の柳誌に羅列した句の一つ〳〵に對して、最も好感と共鳴と羨望とを、至極直感的に感じた句の頭に、一つの記號を與へるのであるが、この場合句主の個性と、それを受けとらうとする他の個性との交渉が存在し、その交渉の所産が言葉を有した時、彼は印象批評家としてあるのだ。彼が語る印象批評を聽かう。彼は例外なしに、他の個性を己が個性を通じて語る。他の個性を己が個性に包擁して語る。而して己が個性の強度化があり擴大がある。

之は明らかに批評家自身が、己が個性に立脚して、己が主觀を、かりに他の個性をかりて表白するのだ。批評と云ふより感想を。故に印象批評を讀む者の位置に立てば、問題となるのは對象であるべき筈の作品の存在と云ふよりは、往々にして批評家としての彼の「感じ方」「立

柳風スポーツ

森東魚

瀨淵に躍るターンの姿也

蝙蝠のていで背泳位置につき

浮いて出た時胸泳に鯉の口

場」「主觀」が如何にあるか、に興味が轉換集注するのだ。之は正當か。

もう一つは、印象批評家としてのより優秀なる彼は、印象批評それ自體の意義から、批評家としてより以前に、より優秀なる作家であらねばならない點に發生する。私等の體驗は、彼の印象批評家の妥當性を、彼が所有する批評的分子より、作家的分子のより豐富に求める。極言すれば、優秀な印象批評家と、優秀なる作家とは一つのものである。この事實は、卽ち、印象批評が、より優秀なる作家的見地より行はれる云ふ事實は、それ自體は正しいのであるが、その事實のために、屢々、句のもつ素材、素材の主觀的な取扱ひ方（或は解釋）技巧、形式等々の及びそれ等の相互作用の、如何にあるかを分析、檢討をおろそかにして、一足とびに彼の對象を、「句が放散する空氣」に求め勝ちなのだ。「句が放散する空氣」と言つたが、それは手品師がシルクハットから兎をとり出す如くとり出せるものではない。また左樣に遊離的、神秘的、品物ではない。にも拘らず「句が放散する空氣」を遊離させ、或はその香氣に陶醉することは、恰もプロペラなき飛行船に對して、風を吹きつけるが如く至つて安定がない。

敗けた夜の投手の夢にフォアボール
空振りのあとの兩手は砂をつけ
キャツチヤーの未練ボールをまだ拜み
惜しからぬ命はナツトアウトで出
泣き切れぬ外野の名手水が漏り
フイールドにまだ〳〵と云ふ旗があり
砲丸の構へ西瓜を持つて來る

ひるがへつて、私達は、新らしい、正當な川柳詩を標榜しながら、相變らず同じ處をうろついてやしないか、或は詩に似て詩に非ざる詩みたいなものを製造してやしないか、等々の不安にかられるのだが、之等一切の不安を解決し、一掃し、而してよりよき、より正當な詩への發展を期するのには、正直に言へば、この印象批評ではあきたらぬのだ。

「句が放散する空氣」そこには必ずや選擇された素材がある。素材への主觀的な取扱ひがあるふさはしき技巧がある。緊密なる形式があり、韻律がある。之等句が如何に構成されてゐるかを檢討する時、始めて正當な批判を生み、發展への指針が與へられる。

——人は建築の足場なんかに用のないことをよく知つてゐるそれなのに僕たち建築家は足場なしに何も作れない。（北園克衛）

そこに冷靜な飽くまで客觀的な科學的批評の必要性が存在するのだ。印象批評の批評の基準性（好惡の感情）は、よりよき詩への、より正當な詩への發展、進歩と云ふ大道に往々にして非時代的非進歩性なることがあり得る危險性を孕む。

科學的批評を甘受しなくて何の進歩があらう。

川柳パイロット欄

自信の句を得るまで

福田山雨樓

九月號の續き「夏休み」の句を拜見する。評のあとは添削句である。

○盲目の子に感激もない夏休。（今治　十靜）

夏休みに盲目の子をもつて來たのは いゝが感激もないと説明してしまつては 生きない。

夏休みの日が永過ぎる盲目の子

○夏休み車窓に母を蕭きつゝ（橋本　紫玉）

純情はあるが云ひ足りない。

夏休み母ひぢ待つ國へ發ち

○あの山も此の山も夏休み（大阪　安津坊）

無駄な言葉が多い。焦點をはつきりさして、句を引緊めることが肝要である。

故郷の山見え出した夏休み

○避暑地で六尺男蚊に喰はれ（同　陽明）

ユーモアはある。六尺男をノッポと讀ませるのも面白い。しかし叙法が練れてゐない。

避暑に來て六尺男は脛を蚊に喰はれ

○水掻きをヤット覺えた夏休み（同　天馬）

人物がはつきりしない。凡想を脱してゐぬ。

この夏は五間泳ぎて來た二男

○夏休み住んで濟んでなれ娘に別れ（同　陽月）

これは狂句だ。住んでを濟んでに効かせて面白がるやうな事は川柳では絶對に取らない

○夏休み濟んで黑い娘登校し（同　素人）

○甲子園と海と暮す夏休み（尼崎　直流子）

○だんだんと不規律になる夏休み（今治　流汀）

○先生と海で出會ふた夏休み（同　紫陽）

是等の句は事實の報告に終つてゐる。しかもその事實そのものが當り前の事ばかりである。それでは誰が見ても感心しない。第一自分自身でも快心の笑みをもらすわけには行くまいと思ふ。句作する前に先づ己れが異常の句作熱意を（衝動を）感じる事だ。この想ならと自信がつく迄着想と素材を選り且つ練ることだ。この中でも紫陽君の句はも少し練ると面白いものになる。

○詩に四苦八苦の夏休み（尼崎　九連坊）

作者の覗ひ所が出てゐない。多分子供が日課を怠つたやうな場合と思ふが、それにしてもありふれてゐる。前月號の「ごろねした」の句の方がまだ内容がある。

○夏休みプラン幾つも立て見る（尼崎　星谷）

この句も前月號の「夏休み計畫だけは出來て居る」の方に押されてゐる。

○夏休み制服處女の女店員（大阪　隆令）

題がこなされてゐない。前月號の「デパートで夏を働く女學生」のやうな句想を表はしたつもりならこれが負けだ。

○夏季請暇君チト待て課長云ふ（高松　柳夢）

これは何でもない一問答を捉へたものゝやうであるが、ピクリと刺すものがある。これは作者自らが實感に根ざした句作衝動を感じたからであらう。叙法は稚拙なところがあるが、この場合それでいゝ。

○上役になり夏休みも出來ない（京都　一雄）

この作者はまだ十七歳だとの事。平凡の事のやうだが相當に突込んだ見方をしてゐる。そして川柳のコツがわかつてゐる點頼母もしい。將來鋭いものを吐く素質がある。

題「小　說」

川柳の形は小さいが、名句は優に一篇の小說にも匹敵するほどの內容を盛る、と云はれる位で、形の小さい事が決して小規模な、せゝこましいものではないのである。ちつぽけな、玩具のやうなものになつたらそれはつまらぬ川柳である。そこで想は廣く大きく深くそして細かく生きたものを選び、叙法は强く鋭く響くやうに心懸けることが必要である勿論輕味の句にもいゝものはあるが、それはユーモアをしつかり摑んだものでなくてはならぬ。

○病床に母へ小說讀んでやる　（蓋ヶ池　蝶々）
病床にある母へでなくて、自分が病床にあるのであらう。かなり複雜な心境を詠んでゐるがそゝだけ昏迷なところがある。もつと想をつきつめること。

○小說の人になりたい十八九　（神戸　磯千鳥）
小說の人と云ふのがはつきりせぬ。

小說の戀に戀する十八九

○小說の樣に行かぬで面白し　（愛媛　蛙堂）
作者の思つてゐるところが肯かれぬ。

小說の樣に死なぬで面白し

○終り迄書き綴りたや僕の戀　（大阪　清雄）
これでは獨りよがりになつてゐる。

小說へ破局に近し僕の戀

○小說へ三石隧道越ゆる音　（同　春陽）
三石隧道と特に固有名詞を持つて來ぬでもよい。

隧道へかゝり小說我に歸り

○圓本を脇に体裁心ブラし　（同　天馬）
圓本必ずしも小說ではなく題意に遠い。体裁心ブラと云ふ言葉も俗過ぎる。

小說を脇に心ブラ連れがなし

○小說にすれば亡き君浮ぶ　（今治　失名）
亡き君とだけでは誰の事かわかつぬ。弔句の場合は前書とする方がよい。

生涯は小說としてありあまり

○小說のやうに書くは〳〵三面子　（高松　柳夢）
書くは〳〵が拙い。それより取材そのものが平凡。これは出直さねばならぬ。

○小說は佳境に入つて雨しとゞ　（今治　紫陽）
說明になつてゐる。ピンと感じられるものがない。「雨しとゞ」が添え物のやうでしつくりしてゐない。再考を望む。

○小說へ震へる女が處女　（大阪　藤九郎）
作者の言はうとする焦點が不明瞭である。震へると云ふのも誇張がある。

小說へ處女の秘える宵となり

○小說を讀み終へて大欠伸　（同　天八）
これでは滑稽にならない。句意も動く。まだ「講談を讀み切つてから大欠伸」だつたら救はれる。もつと題材生かす工夫が必要である

○小說の漁村に大根干して　（兵庫　九天）
も一つ題意が生きてゐない。小說の一節にさう云ふ場面があつても、その小說の內容に觸れるものがない。

○境遇の似た小說に讀み疲れ　（今治　流汀）
下五「讀み疲れ」は「つい「讀み更り」とするところであるが、原句の方がいゝ。但し類句であることは慎れねばならぬ。

○小說の通り口說いてみたくなる　（大阪　寒草）
これは佳句に近い。ユーモラスな氣分がよく出てゐる。

○失職の小說までが草臥れる　（今治　小松）
觀點が比較的深い。小說を通じて失業者の心持ちをよく捉えてゐる。課題吟でもこう云ふ程度迄詠めるやうになれば雜吟と變りはない。

本欄投句者は辛棒强く續けられたい。そして尠くも十句位作つて、その中から自信の一句を投句するやうにして頂きたい。

次號課題「隣」　〆切十月十日

是空庵より

長野吉高

明の祝允明に「猥談」なる一著がある定めしエロ〳〵なエロ談が書いてあるのだらうと言つた人があるが、これはもつてのほかの誤り。この書は演劇研究、分けて劇文學者にとつては無二の好文献書。

○

さりながら、猥とし言へばエロとぞ思ふ。その聯想つゆさら無理と思はぬ。秋の夜長のつれ〴〵の雑談も男三人集まれば落着く先はエロ談なるべく、猥といふも雑といふも所詮は一と知るべし。

○

女の美は、時代精神の好みの變異にありとみるはヒガ目か。女の美を、瓜實顔細腰、痩軀、なで肩などにあるとしたのは何も我國とのみ限らず、支那もさうだつた。支那では兩晉から南北朝を經て、初唐頃までこの風があつた。盛唐以後は下ぶくれ顔の豐頰、豊腰の肥えた女が讃美されたものである。そこで、問題になるのは例の楊貴妃だ。普通一般には瓜實顔の細腰痩軀の美人と思はれてゐるが、これはさうではなく豐頰豐軀の所謂肥滿した型の人だつたらしい。「舊唐書」やその他の文献、繪畫を調ぶれば相當信ずべき結論と思ふ。

○

時代精神の好みは、その國の如何を問はず時に變異する。そも女は、一體痩せるべきか肥ゆべきか、それは疑問。

○

健康美が、女性美の重要素であるは言ふまでもない。これを浮世繪に例へば、さしづ

粒々集

御影　長崎柳秀

格言へ年甲斐もなきかたくなさ
同じに役立つべきに右手と左手
かね少し出來て度胸が小さくなり
表彰のやうに燒香呼び出され
いつとなく女よりそふローブウエ
地下足袋の郷へは遠くよく稼ぎ

大阪　長谷川一徹

夕立を馳け拔けて來て大阪の灯
呉れるのも良けれど銀のしぼり籠
かたくなを讓られて子の佗しく居
非常時と云ふ事にして箸をとり

め、清長あたりの描く女を格好とする。北齋あたりの描く女は總じて變態的な美でしかなく歌麿のものは病的でデカダン味がある。この種の女は好ましくない。

○

とはいふものゝ近頃の女ほど世にすさまじきはない雨夜の品定めなどちよこざいと見るべく、男はめでたく女どものケツの下に敷かれてよろしく隨喜すべきか。

○

女も隨喜も糸瓜も、さて元氣であつてのこと。この春以來の病氣が、六月中旬頃から遽かに惡化して終に危篤となり、大阪より駈けつけた愚弟に後事を訓言するなど一騒ぎ、死を覺悟して死なず、八月初旬より奇蹟的に快方に向いたが、全く今度はヒドイ目にあつた。臥床こゝに半歳餘り。一句あり。

生死一如さとつた顔でかゆすゝる

○

病中に松居松翁氏の訃を聞つて愕然たり、悲しいかな、明治、大正、昭和と氏が日本劇壇に殘されし功績は實に至大で正に史上に特筆さるべきの人、氏を失つた劇壇は洵に寂しい。惜しい人だ。さりながら息に桃太郎君あり父子二代の劇壇精進は悦ぶべく、その才氣は夙に私の感ずるところたゞ亡父の名を汚すこと無きを桃太郎君に望むや切實。あゝ無名院松翁高風居士

大詰はこゞとも
言はず黑い幕

○

アリストファネスの「平和」の一篇に就てはさる劇文誌にそれを述べた。これは曾つて本誌に連載した「柳の絮」の中にも一端を紹介したと思ふ。この「平和」の一篇は先頃パリのラトリエで、ルネ・ロシエのアレンヂ、シヤルル・デュランの演出で上演され、フランス演劇史上空前の成功をおさめたさうである。それがどうあらうと別に諸君には直接關係はないが、袖ふれ合ふも何んとやら、でお知らせだけして置くことかくの通り。

採藥の烏頭を飲まばや富士裾野　松山前田五健

見解の相違默つて卷煙草

馬鹿らしい意見が通る金を持ち

天守閣空の色から秋となり

稻妻へヨウ歸つたと子の使ひ

父親に任すトンボを取り逃し

あつさりと慰め赤の他人酌ぎ

正信經俺の後ろへ子と子と子

東京　富士野鞍馬

未亡人浴衣の柄も批評され

後家育ち浴衣の糊が立ちすぎる

新任の夫人も共に撮される

募集句

坑夫

松丘町二選

鶴嘴は坑夫の心知つて居り　曉
坑を出た坑夫へ天氣變つてゐ　鴉天
負けぬ氣の女坑夫に乳房淋し　明珠
獨り者ばかりのやうな坑夫なり　紫陽
太陽と別に坑夫の日が暮れる　利生
坑口でせめて子供を抱きませう　いわを
朝顏も咲いて居る坑夫の家　高雄
八月の水が坑夫の足にしみ　錦城子
サイレンへ坑夫大きな手を洗ひ　幸捐
算術の出來ぬ坑夫となつて生き　新水
降りて行く坑夫は明日を知らぬなり　おさむ
胸巾の廣さを信じきる坑夫　同

風

未來派の風はすかひに吹いてゐる　おさむ
ひやゝかな風へ障子を閉ぢ立ち　幸捐
極樂の風物干を越えてくる　白柳子
風通し良い部屋に居るくつわ虫　いわを
梳る髪へ春風戯れる　青兒
出る坑夫はいる坑夫に晝の月　春秋
荒つぼく坑夫の夫婦仲續き　同
すれちがふカンテラばかり足ぶつ　司郎
その中の若い坑夫をみつめてた　同
坑口に運ばれた死へ陽は默り　同
坑夫の死へ結婚解消の記事が大きく　貧兒
情痴の果へ氏夫はだまつてゐた　同
カツトされた・坑夫なるが故に　同

選者吟

朝鴉坑夫さつさと坑に入る　町二
汗の外に失ふものは何もなく坑夫　同
地殼の肌が匂つて坑夫に親し　闇同

松盛琴人選

秋風にフト父親の咳を聞く　春水
立話するお互へ撫づる風　銀波
扇風機百圓札を吹きとばし　白峯
噴水は風が變つた音になり　白扇
風吹けば夜のしじまが答へたり　磨須雄

Nishi No Cho MEMO

雨緑

▼本社東京句會もいよ〳〵近づいて來ました。同人社友諸君が多數行く事になりましたので一般川柳家も奮つて御參加を願ひます。大阪の出發は十月十四日夜地方の川柳七時二十分の急行列車で上京、家の途中同乘を歡迎致します。

▼庄萬よし君は九月二日大和談山神社へ松阪屋の井戸爭議が濟んだので參詣されました「ふくろ鳴く杉の葉ごしに月明り」萬よし

▼九月の豫定の植物句會は植物園の增築工事と茶臼山の公園が完成しなかつたので延期してゐましたが近く完成につき十一月例會を廢して十一月三日午後一時より茶臼山の「雲水寺」で晝の句會を開催して秋の一日を植物のみの句を作ることに致しました。

▼本社の支部が四國に高知、松山、西條、今治の四ヶ所も出來全四國を川柳園たらしめんとする勢であります。尙本社の須崎豆秋君は多度津、姫田夕鐘君は德島、竹內機見女君は高知、川柳に復活しつゝある舊同人竹田芦穗君は德島と何れも四國出身であるのを幸ひ連鎖的に協力して大發展を望みます。

▼日野華水君は神戸支部の幹事として多年盡力されましたが今回西村明珠君と幹事を交替される事になりました。

扇風機儲けてくれるうちの人　春秋
スネークのステツキ春の風切　利生
自動車の後から風も突走り　春峰
風がよく通りますよとまねかれるウエトレス風吹くまゝにひるがへり　美津女
干飄むく手へ土用の朝の風　一柴
秋は洋裝の脇の下を吹き　多郎
枝をゆる風あり鳴かぬ蟬が飛ぶ　勝二
改心のたちすくみたる娑婆の風　陸平
滿鑑飾大日本の風があり　錦石
春風に乳房夢を孕みたり　宵明
坑口へ出れば浮世の風があり　貧兒
打水へ風があるなり八ツ手の葉　孤鶴
風になりそうな夜なり父は留守　十静
靜脈に影のさす見ゆ秋の風　紫陽
順風に畫餉してゐる夫婦船　葉光
强風を押し切つて來る君の聲　笛秀
風がある上つてこいと火の見　岩石
いゝ風をほめて浴衣は腰をかけ　富美三
日の丸が靡き双眼鏡の笑み　白菊
萩だけが風をうけてる宵の庭　山月
アスファルト道一筋の風となり　鴉天
風のない愚痴を知らずアツパツパ　八歩
鬢を吹く鐘の風へ舌を打ち　今雨
拗ねて出る娘のセルの袖の風　禿山
興奮の頰へ街角風があり　紅玉
じゆん情をすてにし風にある女　新市街
あきらめて居ればカーテンを風　美保子
電柱が風に泣いてる十二月　芳一
メ切つた硝子へ雲が飛んでゐる　ライト
爽かな風へ打診を受けて出る　氷炭
風だより吉林省に友が居る　曉
風の音妻は一人で縫いつゞけ　百文
薄給を抱いて晝寢の風通し　吼城
雨蛙ピヨンと跳ね東風が吹く　九天
風向は惡し鉾先俺へ來る　寒草
破れそなとこで止めとく風船屋　たけを
支那からの風にしておく測候所　春光
聖靈の風の向ふの盆踊　錦城子
風向が變つて近火ほつとする　菊路
赤屋根の並んだポプラ風があり　三都
堂島は二百十日の空模様　正甫
ロケーションの庭だけ風が出來　喜由

七　星

秋風が吹けば千の手を握りしめ　明珠
散る紙と心吹かれて一人路　司郎
秋風やなんと吾が手の苦勞性　三汀
まつすぐに進めば風にすきが　義風
秋の風そよ〳〵二人死ぬ氣にて　元山
風の音・うどん咽喉を通る　貧兒
ほと〳〵と故郷の夜は風の音　高雄
(軸)出稼の歸る氣になる秋の風　琴人
(同)天下無敵が風によろける　同

▼螢ヶ池支部の幹事石森靜太君は都合で奮幹事龜井愚籠君と交替する事になりました
▼江戸みつる君は九月一日大連滿洲大博覽會の見物に行かれました、大島澤明君が歡迎會を催されたとのこと、私からも厚くお禮申し上げます。
▼生田翠夢君(大阪)が川柳野球チームを作られるそうです希望者は同君宛に申込んで下さい。
▼熊谷紅君は九月十四日三保へ行かれた。川柳交歡會を偲んで左の句を寄せられました。「足跡の偉大さ三保の晴れた富士」紅
▼芦城川柳社の七週年記念大會を九月十二日石川縣小松町で催されたそうで金澤から一瓢、白雨、旭紅の諸君が出席されなか〳〵の盛會でしたそうです。「盛り場へ氣輕るく流す貸浴衣」美松の句。
▼本社客員龜井花童子君は晟修と改號されました。
▼本社客員長野吉高君は六月以來病臥され一時は死線に立たれたそうですが、昨今やゝ快復に近づいて本號へ執筆される程になられたそうです、一日も早く全快を祈ります。
▼吉川啞人君(舊同人)八月五日商用で來阪され一寸某喫茶店へ友人と入つたのはよいが二次會三次會とに渡つて脫線振りと大失敗をしたと啞人君らしい告白の手紙を寄せられました。
▼北信新報社の主催で第一回川柳短册展覽會を十月一日より長野縣中野町翠山亭(幹事金井有爲郎)で開催されます。
▼野本喜峰君は八月廿三日永眠されました哀悼の意を表します。
▼本號の編輯は町二、機見女の諸君と私とで本社事務所致しました。

肱・枕・艸・紙（一〇）

梅本塵山

（九十五）

明治十一二年の頃、新吉原江戸町一丁目に、大黒屋金兵衛といふ妓樓ありて、此樓の花魁今紫が、今様男舞と稱して、金烏帽子に水干を着し、脊後に金幣を負ひ、腰に太刀を佩き、昔の白拍子の姿に扮して、朱塗り高欄附の舞臺に上り、舞をまひて嫖客の觀覽に供し、一時世間の評判となりたり。此今紫に、就いて一話あり。予の親友村松秀茂といふ人は、當時、下谷南稲荷町に住みたるが、一夜友人に誘はれて、大黒屋に遊び、友人は馴染の今紫を相方となし、自分は他の花魁を相方となして、酒宴の後寢に就きたるに、忽に失火の警鐘の音聽えて、人々の立騒ぐ聲するに由り、秀茂は起出て、失火は何處ぞと問へば、下谷稲荷町邊なりと答ふるに、大いに周章して歸宅せむとしたるも、火事裝束の無きに困却し、同行の友人を起して、如何になさむと相談するを、傍に聽き居たる今紫は、火事裝束は豫め準備しあれば、御心配に及ばずと、新造に命じて部屋の内の箪笥より、剃子の半纏、頭巾、股引、手鍵まで取揃へて出し、其れを秀茂に貸與へたれば、直にそれを着用して、自宅に歸る事を得たるが、其頃までは、まだ昔の吉原の俤は殘りゐたりと、予に物語りたり。此大黒屋金兵衛は、江戸時代よりの店にて、樓名を金瓶樓と稱し、金瓶大黒とも稱されたるが、近頃、田中某著作の小説中に特に金瓶の二字に、「こんぺい」と傍訓されたるは誤謬にて、「きんぺい」を正しとす。

（九十六）

寛文、延寶の頃、櫻井丹波少掾の、金平節といふ淨瑠璃の世に行はれし由り、金平足袋、金平糊、金平牛蒡などといふ名稱の起りし事は、古書にも記されたるが、金平足袋は疾く廢り、金平糊は江戸の末期まで、僅かに其名殘り、金平牛蒡の名は、今多く知る者尠し。

（九十七）

明治の初年、外國の貴賓の末朝さるる毎に、宮内省主馬寮に於て、打球を觀覽せしめられしが、近頃それを廢せられたる歟、更に其噂を聽かず。此打球といふものは、騎馬にて行はるる故、野球、庭球よりも勇壯の競技なれば、我が國技として保存したしと思ふ。

（九十八）

女相撲といふものは、既に「日本紀」の雄略天皇紀に有りて、甚古きものなるが江戸時代に於ても、最旺に興行されて、文化の末頃より、始めて女と盲人との相撲が行はれしが、慶應の頃に到りては、特に猥褻の行爲をなし、看客の喝采を博して、大いに繁昌したるが如し。明治の初年には、女と熊との相撲を、淺草奥山に於て興行したるが、殊更に女が顚倒して、醜態を顯はすに由り、風俗壞亂なりとて、遂に禁止さるゝに到れり。

（九十九）

明治六年の夏なりしが、或る日大驟雨中に、東京の北方に當りて、遠雷の如き大音響聽えたるが、これは道灌山の東面

の斷崖の崩壞したるにて、世人は法螺貝の拔出したりと噂し、其翌日、法螺貝の黑雲に乘りて飛去る圖を、瓦版に印刷して、市中を賣歩きたり。此れより後は、新聞の多く發行されしに由りて、瓦版の讀賣といふものは、全く廢れたるが如し恐らくこれが瓦版の最後なりしならむ。

（百）

ほにほろと稱する飴賣は、寛政の初年に流行したるものと聽くが、其れは唐人笠を被り、唐衣裝を着て、手に唐人笛と鞭を把り、張子の馬を腰に附けて、それに乘りたる態をなし、飴を買ふ小童に、一つの物の七つに看ゆる目鏡を持たせて「昇るは〳〵、いかづちまなこで天に昇ろ、ほにほろ〳〵」と呼びながら、笛を吹き鞭を揮ひ、幾回か右往左往して、小童に看せたるものなるが、此れは明治五年頃まで存在し、予は上野公園に於て看たり。

（百〇一）

神社佛閣に捧ぐる額には、昔より珍奇のもの多くあれど、水天宮の錨の額、蛸藥師の蛸の額などは珍らしからず、心の字に錠を卸したるもの、酒樽と盃に錠を卸したるもの、賭博の賽錠を卸したるものは、屢々看受くる所なるが、女の字に錠を卸したるも稀に有り。近頃是等の額は、何處の社寺にも、新に捧ぐる者尠くなりし。亦、寛永錢の通用せざる今日は錢塔とて文錢を以て、平面に三重五重の塔の形を造り、これを額になしたるものは、甚稀になりたり。

（百〇二）

江戸時代には、市内各家の糞尿を、近村の農家と特約して、賣買されたるもの也これは豫め一家に居住する、人員を計へ一人の一ケ年間の糞尿代金若干と定め毎年々末に明年分の代金を前納したり。此糞尿代は大屋の所得となるものなれば多數の貸屋を差配する大屋は、その所得莫大に及ぶなり。明治初年には一人一ケ年の糞尿代凡金一朱なりしが、同三十四五年頃には、金一圓四五十錢となれり。然るに大正の初年頃より、東京附近の農家にては、糞尿を買取らざる故に、各家にて料金を出し、而して汲取らする事となれり。

（百〇三）

東京に巡査を創めて置かれたるは、明治元年か二年の事ならむが、其多數は薩州人なりし。最初はこれを邏卒と稱し、民衆は「ポリス」とも呼びたるが、當時は三尺許の樫の棒を携へゐたる由り、俗間に三尺棒また棒と呼び、警察署を屯所また「たむろ」と呼びたり。明治五年の末に邏卒を巡査と改稱されたるが、同十年の西南戰役に、臨時多數の巡査を募集して戰地に送りて戰役に就かしめ、此れを徴募巡査と稱せり、巡査の棒を廢して、帶劍せしむる事となりしは、明治十五年十二月より也と云ふ。

（百〇四）

東京に於て、發行する讀賣新聞は、明治七年十一月の創刊にて、その當時の賣子は、半纏股引に饅頭笠を被り、昔の三度飛脚の使用せる箱に擬して、黑塗の箱の柄に鈴を附けたるを擔ぎ、市中を呼賣したり。近頃某雜誌に伊藤晴雨編の「明治新聞評判記」といふものに、此新聞賣子の箱の柄に、天狗の面を立てたる所を圖せるが、これは畫工の誤謬にて、三度飛脚の箱には、天狗の面を附けたれども新聞賣子の箱には、鈴を附けたるもの也今の新聞配達夫が鈴を持歩くは、昔の讀賣新聞の賣子の餘波なり。

（百〇五）

明治十年前後より、新聞雜誌の投書家といふもの輩出したり。此れは當時の小新聞、または娯樂雜誌に、諷刺的戲文、雜文等の短篇を寄稿するものにて、學術の研究、政治の論說などには筆を把らざりし。投書家の著名なる者は、中坂まとき、可愛樓晴雪、高島藍泉、南新二、幸

堂得知、高島屋塘雨、前島程橋、金井安全、琴通舎康樂、山下晴雨、通新舎等、此外に猶多し。會田某、贊々亭某の如きは、賣名の爲に戯文を他人に、代作せしめて投書したり。是等の投書は、各新聞に寄書欄といふもの有りて、其處に掲載されたるもの也。

（百〇六）

江戸時代の腐儒等は、德川幕府に諂訣して、其著書中に、姦雄家康を神祖と稱し、同人の江戸入府の時を、國初と記せるもの有り、是等は我が歴史に通曉せざる、外國人ならば知らず、邦人の著書には、有るまじき事也と思ふ。

（百〇七）

外骨著「面白半分」の中に、「支那では王昭君など士太夫の妾を君とも云つたが日本では淫賣婦（遊女）を君と云つたのである、平安朝時代に於ける淀の君、江口の君、神崎の君など云ふのは、皆淫賣婦であつて、山城の淀、河内の江口、攝津の神崎に居た船饅頭、浮れ女の事である」とあれど、此れは僻說なる可し。「落窪物語」に落窪の君、「源氏物語」に近江の君、右近の君、五節の君、小宰相の君、其外多く有れども、是等は決して淫賣婦に非らず。（完）

川柳家戸籍調（續）

係　山雨樓

（1）姓名（2）雅號及別號（3）生年月日（4）出生地（5）現住所（6）職業及又は勤務先（7）好きな句（8）自信の句（9）川柳以外の趣味（10）配偶者及子供の有無（11）嫌ひなもの（12）川柳に手を染めた年月

（345）　八十島杜若

（1）八十島松太郎（2）杜若、勇魚、孤島釣人（3）明治廿三年七月七日（4）東京日本橋區濱町（5）淺草區小島町七十一（6）きやり吟社事務と鯨鬚工藝（7）禮帳に德兵衛とこそ書かれたり。菜の花にあれ見やぬしの紋が飛ぶ。荒格子五六人ほど米の虫（8）餘りにも多數掲載を遠慮（9）猫の玩具蒐集、歌舞音曲（10）一男有り（11）川柳講師なる稱號と蒸返し柳論（12）大正四五年の頃、村田周魚氏に師事今日に至り尙然り。

（346）　竹田花川洞

（1）竹田信三（2）花川洞、佳葉子（3）明治三十四年一月十五日（4）東京市淺草區花川戸町（5）同葛飾區金町四丁目（6）畵工人形も作る（7）女湯を覗けば婆ア凉んでる（三太夫）佛の姑口開いて寢る（雀郎）（8）世の中は厭だと飯を三度喰ひ、秋の雨はがき一枚來ずに暮れ（9）五郎劇（10）妻、男子一、女子二（11）蟹（12）大正五年七月。

（347）　石原青龍刀

（1）石原秋朗（2）青龍刀、沙人、巖徹寺（3）明治三十一年十一月七日（4）廣島縣山縣郡大朝町（5）奉天藤浪町卅二（6）滿鐵社員（鐵路總局）（7）金の番とろ〳〵としてうなされる（古句）一と雨のあとを天上臍でのみ（若八）（8）人慾の最後虛空を掴むなり、俠客のイデオロギーに義賊勝ち（9）俳句、野球、映畵、劇等々（10）妻あり子無し（11）西洋かぶれ、ダンス等々（12）大正十年。

（348）　中西おさむ

（1）中西脩（2）おさむ（3）明治四十一年十月九日（4）名古屋市（5）大阪市住吉區駒川町八丁目二二（6）大都映畵關西支社（7）路郎師の「君見たまへ菠薐草が伸びてゐる」（8）かけ出し野郎ですから自信の句とてまだありません、が私が自分で好きな句。鈴虫の聲戀人の足をふみ（9）音樂、文藝、蒐集（10）ありません（11）油虫、白粉を塗りすぎる女（12）昭和五年秋頃。

各地柳壇

いのちあるる句を創れ

理整南二・雨緑・路郎

本社柳翁忌

十月六日　於道頓堀倶樂部

殺人的酷熱も二百十日の烈風に吹き飛ばされて涼氣爽々秋は漸く酣境に近づく。柳翁逝いて一四四年柳界年と共に隆盛に向ふ喜びあり、こゝに本社は例の如く柳翁忌を催し我等の初代始祖を偲ぶのよすがとする。溪花坊氏は柳翁忌を各社別々に催す煩を避け擧つて聯合會を二十三日の忌當日に開く事の最も妥當なる事を力説勸説せられ、更に柳翁の遺德の數々を語り柳樽研究の柳人一とり必須欠ぐ可からざる事を唱論された。雞牛子氏は先づ初代川柳の辭世句の眞僞に就きその造詣を述べられ次いで柳樽の編者たる木綿忌も亦柳翁忌と並び營まるべきことを提唱されて喝采を博された。共に得る所多々。

當夜主幹路郎先生は葭乃夫人病臥の爲欠席を餘儀なくされたのは遺憾の極みであつた。

（二南記）

出席者――綠雨、弘之典、豆秋、一久、素月、無鬼、紫石、柏茂、遊舟、遊帆、紅、鶴峯、雅道、草果、變人、實壽、友帆、八步、二南、白峯、雅幽、かほる、鮎美、葉平、沐天、末廣、鐘生、艸樂、夢裡、青兒、いわを機見女、琴人、朴甫、溪花坊、あや美、靜太白柳子、踏幸水車、丹路、雞牛子、破竹、麥魚、水咲、文久、明暗子、夕鐘、舟々、禿山

席題　紙　細　工　　互　選

紙細工一べん伸びをして續け　失名
紙細工指の細さへ灯がともり　一久
角帽の叔父さん鶴を折つてくれ　友帆
紙細工親の手つきと子の手つき　變人
紙細工展覽會の巾をとり　水車
紙細工父の頭はまんまるい　豆秋
紙細工蓋が歪んで乙の上　青兒
幼稚園一つ覺えた紙細工　眞柳
天井に鶴吊たまゝ一週忌　末廣
病弱の姉にさびしき紙細工　鮎美
紙　細　工母なき家の彩よ　機見女
紙細工して金持の子と遊び　友帆
紙細工敎えて後家の日が長し　柏茂
紙細工ふと幼少の頃の事　雅道
紙細工小供の智惠を笑ふまい　無鬼
紙細工吸殼の樣に捨てられる　弘之典
紙細工みんな御飯に歸つてゐ　雅幽

席題　前　借　　溪花坊選

ハンスト實行前借の氣が揃ひ　紅
前　借に秋七草の繪行燈　文久
深酒にせめて前借など忘れ　麥魚
前借はたゞ活動に行く若さ　鶴峯
前借の行きも歸りも吠えられる　二南
前借の女の帶が華美すぎる　いわを
前借の一層氣儘な氣にもなり　舟々
前借の先づ氣の弱さ笑はれる　鐘生
前借の鏡にうつる律義者　鮎美
前借へうたゝ淋しき月給日　水車
前借を完濟すればはや三十路　素月
前借で來て大阪の者になり　舟々
前借へ飲めば事足る親がゐる　八步
うす暗い部屋で前借渡される　同
前借の中で目藥買うて來る　柏茂
前借をいつそ笑ふて往替える　同
（人）前借はいつぱけるやら泣きぼくろ　葉平
（地）寂しさのはてに前借よく笑ひ　遊舟
（天）前借の明くれば霜の眞白にて　明暗子

(軸)前借の自我に胃の腑はおどつて　溪花坊

席題　工　場　艸　樂選

工場の受付胡散さうに見る　無鬼
工場街營養不良の兒が笑ひ　靜太
偉らそうな奴が女工の方へくる　弘之典
自家用へ工場の人の眼がうごき　夕鐘
退職に工場を恨む不具者にて　雅道
工　場法男一匹笑ふなり　白峯
さるほどに工場の溝のこほろぎよ　文久
表札を見ると工場は市内なり　かほる
黄金ひく音にもなりて製材所　機日女
工場に通ふ鼻緒のゆるい下駄　水咲
片腕の相場も決まる工場法　八歩
能率へ工場長の眼の動き　夢裡
工場は日まわりだけが高ふのび　麥魚
貴休み痩せた女工に陽がまぶし　琴人
工場煙吐かで秋の日くるゝ　葉平
失業は工場の塀に觸れてみる　紫石
工場の身賣話へ手を休め　同
日給と競べ工場の廣い事　紅
田を埋めて又鑵紡の敷地なり　同
工場からスラムへ細い月が出る　柏茂
泡盛に工場の愚痴をぶちまけて　同
怪物のやうなベルトと夜業する　明暗子
旋盤の音へ聾になり切つて　同
赤靴をはいて工場を歩く役　同
(軸)工場をよい娘さんになって去に　艸樂

席題　食　慾　文久選

食慾の暮るゝを待つてゐる如し　舟々
食慾がないなあ蟬がないてゐる　靜太
食慾はあれ共秋の夜に獨り　沐天
食慾をイースト劑に頼り切り　柏茂
食慾は頃合と云ふ蒸タカル　二南
食慾のおさへ切れない出來心　遊帆
食慾はトマトの色に逆うて　麥魚
きりぎりす鳴けば慾が二つ出來　弘之典
食慾の話へ痩せた女同志　琴人
食慾をじつと抑へて應接間　紫石
食慾のない日宵寢をしてしまひ　あや美
食慾は飢餓線上をさすらひて　いわを
食慾は厚い硝子の向ふから　夕鐘
食慾の無い日の空は曇つてゐ　青兒
食慾はすゝまず年俸五千圓　水咲
食慾へ俺の胃の腑を疑ひぬ　無鬼
よく食ふと云はれて娘おさまらず　鐘生
慾のない女と默す支那料理　破竹
食　慾へ漸く粥の一二杯　夢裡
食　慾の進まぬ君の診斷書　白峯
食慾をそゝらす樣に葱を切り　かほる
食慾に月と歩いて深呼吸　鮎美
食慾の中から秋の氣が生れ　白柳子
食慾を喜こばれてる子の育ち　八歩
食慾のないまゝ秋の空となり　變人
ガンヂーの絶食をきく秋暑く　葉平
食慾も性慾もない秋寂し　同
秋そゞろふと食慾に宵を出る　雅道
病める身の友に食慾みる憎惡　同
もう秋の風正眞に腹が減り　紅
食慾のうなづく秋の夕烟り　同

(軸)醬油をこがし食慾ある若さ　文久

席題　物　置　溪花坊選

寂寥の灯よ物置の吊し柿　紅
物置に生活したる時もあり　朴甫
物置へ主婦が入ると何か提げ　八歩
物置に子供をやれば戻つて來　緑雨
物　置の心覺えへ薄明り　艸樂
竹馬のある物置を親しまれ　雅道
物置に父のかたみの釣道具　紫石
物置へ男にされて取りに行き　水車
物置へ二百十日の風があり　白峯
物置を包む暮色のひろごりて　葉平
れずみみたいな戀を物置ぐする　同
(五)二〻目に行く物置へ頻かむり　麥魚
(同)物置の腐つた藁が役にたち　鮎美
(同)物置の物も哀れに破産の日　沐天
(同)カフェーの朝物置のやうに積み　水車
(同)物置の奥は世代からのもの　舟々
(人)物置の戸は手ごたへもなく開き　水車
(地)人間の慾物置の渦高し　素月
(天)反抗のまゝ物置を出てゆない　二南

席題　栞　琴人選

栞そのまゝ行く古本屋　禿山
女學生栞を買ふに氣がそろひ　靜太
栞いぢつて初戀の宵　紫石
戀歌を書いた栞でてくる古日記　葉平
思ひ出の栞のあせたピンク色　鐘生
妻の若さが栞の房にある　破竹
決心がついて栞をたゝみこみ　變人
想ひ出の栞へ秋がおとづれる　踏幸
花栞古びて姉の三回忌　紅
幻想の母の栞のひからびし　鮎美
栞あつめて戀のなきがら　同
感激の栞に青春のうづもれる　同

阪大川柳會（大阪）

八月二十五日　丸島利生報

兼題　初秋　路郎選

初秋を浴衣に知つた出養生　柳秀
てつぺんの朝顔小さく咲いてゐる　きよし
秋の風庄几空しくほつとかれ　芳一
襟替もせずに初秋の虫を聞く　方正
（秀）魂祭せめては好きであつた酒　正甫

兼題　舞妓　路郎選

連れ明し舞妓あつさり寢てしまひ　正甫
姐ちやんの苦勞すなほに舞妓きゝ　栞
首筋から風邪ひきそうに舞妓居る　同
腹違ひ舞妓になつてゐるといふ　同
根をつけたやうに舞妓はへばりぬ　湧三
養父あり育て育て舞妓にし　同
借金は舞子の秋から返し　芳一
タクシーへ舞妓の袖は丸められ　柳秀
十三と舞妓すなほに歳を云ひ　利生
（人）お母アさんに云ふ淋しさを舞妓持ち　氷炭
（地）デカンショになつて舞子ら顧みず　路生
（天）あけそけに舞子閣下にもの訊き　同

雜　吟　路郎選

其通り言ふて事件の種を蒔き　芳一
ワテが通つてまつせと歩きをり　栞
席題　ホテル　路郎選
ホテルへはアミーと云つて訪れて來　筑川
週末をホテルに避ける朗かさ　同
これがホテルかい洋間何處にある　芳一
表だけ洋式でホテルなり　同
妻も子もあつてホテルのボーイさん　きよし
鍵穴をのぞかれそうなホテルなり　同
一人ゆけばホテルのボーイ連れさき　利生
インチキなホテルベツトがろばかり　路生
カーテンを下されホテル灯つてる　氷炭
安ホテルネオンサインで廣告し　正甫
（人）新婚の山陽ホテル雨なりし　同
（地）青い灯のホテル夜霧に息をつき　栞
（天）インチキなホテル表に棕梠置き　路生
（軸）戯れに捕へた蟹もホテルまで　路郎
（同）麗人へホテルは山の中にあり　同

席題　天井　路郎選

天井の鶴むき〳〵にならんでゐ　路生
天井のない部屋に寢て人となり　同
フツ〳〵と天井を見て返事する　同
天井に鶴を下げてるいゝ暮し　同
天井の板が自慢の親父です　正甫
恩給をとつて天井高ふ寢る　同
手術後の天井ばかりの日の永さ　同
痴態の限りを知つた天井なり　利生
徒然にもう天井も見てしまい　筑川
鉢先が悪く天井へ眼をつかひ　氷炭
歸朝者は天井裏で生きてゐた　栞
（人）借金へ天井落ちるやうに寢る　正甫
（地）女房のひる寢天井へ臍を向け　柳秀
（天）嘘言ふて戻る天井は高過ぎる　芳一
（軸）天井へ聞かす講義と知らざりき　路郎
（同）天井があつて女にあつかはれ　同

雜誌社　川柳　**高知句會**（高知）

八月二十一日　於ブラジル樓上小松蟬風報

席題　高下駄　蟬風選

高下駄　規律正しく女來る　柳風
高下駄の朝はお日和らしい音　青雨
高下駄が似つく女も春の雨　映珠
青空に足駄と傘がからかはれ　柳風
高下駄の花緒がゆるいアスハルト　春水
（五）晴天も高下駄をはく散髪屋　梨生
（同）遲刻してゐるのが一人足駄履く　柳風
（同）高下駄の方からしやがむ立話　濁水
（同）雨下駄の音冴えた夜の哀愁　柱風
（同）高下駄の油斷をレール喰ひ込ませ　映珠
（人）高下駄を提げて驛まで無事な妻　珍景
（地）棧橋へ高下駄注意せよと云ふ　映珠
（天）高下駄の祖母の手を持つ交叉點　濁水
（軸）高下駄が學校へ來る午後の雨　蟬風

席題　病院　映珠選

病院の空氣に馴れた抱へ俥夫　春水
いやな音たゝ病院のレントゲン　蟬風
病院を出た繃帶へ陽が白し　青雨
藥局はたゝ壜の音足の音　濁水
（五）腦病院とつても景のいゝ所　柳風
（同）病院は風を入れたい窓を開け　蟬風
（同）隣室を覗く看護の重い息　柱風
（同）ほつとして見る病院に鯉が浮き　春水
（同）集金に來て病院のごうもなし　同
（人）病院の隣に棲んで達者なり　青雨
（地）病院のポプラはゆれて輕いベッド　草路
（天）退院をして看護婦を撮りに來る　青雨
（軸）重患にまた叱られてゐる廊下　映珠

席題　幹事　春水選

（佳）自己紹介幹事は洒落を一つ入れ　珍景
（同）自轉車で來て幹事の椅子があり　草路

(同)無禮講どころか幹事氣が疲れ　映珠
(同)重役のあらが幹事の目に止り　青雨
(同)ぐうたらと幹事ん醉はす大廣間　濁水
(人)汗びしよりなつて幹事は儲けな　柳風
(地)間違つた帽を冠つて幹事去に　映珠
(天)新幹事馴れぬ任務の面白さ　蟬風
(軸)押ピンか使ふ幹事の役目なり　春水
(同)盛會の後を幹事と云ふ氣持　同

兼題　艾　濁水選

油手の指を艾は少しすれ　梨生
爪彈きのまゝやヤイトへ陽が斜め　柱風
御隱居の足と艾に日が當り　春水
出して來る艾へ舌ん出して逃げ　柳風
長病ひこゝも艾で燒いた跡　映珠
灸のあとある手で艾ひれる祖母　青雨
(人)許されぬ瞳を感じ艾煙る　草路
(地)母の顏ふつと淋しい灸の跡　柱風
(天)孝心が今日母の背に爐り　同
(軸)賞められてはにかむ肌を落つ艾　濁水

川柳雜誌社　**塗青句會**（大阪）

七月二十二日　於淺謙公居　熊谷紅報

題　塗り替え　互選

塗り替えた車体車掌の朗らかさ　親一路
塗り替えて合資會社に更生し　謙公
塗り替えてまだ儲からぬ喫茶店　潮人
塗り替えた壁に今夜は氣が揃ひ　變人
塗り替えて一と儲けする心なり　光
塗り替えてゐる白粉は宵の口　紅
塗り替えるペンチへ秋の空の色　同

席題　紅　吾水選

自信ありげに口紅をつける　岩石
紅提灯もう約束が出來上り　變人
注射針紅の鼻緒の上草履　紅
ほんとうの戀へ口紅落して見　潮人
制服の兄の机の紅ダイヤ　紅

席題　變　白峯選

氣やすさに變つた下駄を履いてでる　潮人
お互に變つた姿戎橋　同
(佳)變屈でよし名人は無口なり　岩石
(同)變心を恨むボヅラへ黃昏れる　紅
(同)變屈にされて無口者の戀　變人
(軸)變人の腰から動く終電車　岩石

席題　人　紅　白峯選

神樣の前人間のあからさま　變人
親切な人へ氷がとけかゝり　同
人と云ふ意識座布團裏返し　潮人
(佳)人間の弱さに仁丹など持つて　靜歌
(同)同郷の訛り嬉しい人に會ひ　謙公
(同)誠ある人の力を信じ切り　變人

兼題　ロケーション　靜歌選

ロケーションもう此れ切りの斬られ方　親一路
ロケーション素顏の儘の敵役　潮人
ロケーション今日面會謝絶なり　白峯
ロケーション不思議がられて引揚げる　變人
ロケーション中の和服が助監督　潮人
ロケーション死んだ者から飯にする　親一路

兼題　蚊帳　紅　靜歌選

轉寢の顏へ着せとく枕蚊帳　潮人
強意見蚊帳の中迄續くなり　岩石
蚊帳吊つて今日母親と寢つかれず　白峯
蚊帳を吊る宿の女よく喋り　謙公
(人)蚊帳の中自分の事と知つてゐる　岩石
(地)獨身者ゆうべの儘の蚊帳へ入り　謙公
(天)枕蚊帳跳上げて夏の子の達者　白峯
(軸)看護婦の非番今夜は蚊帳に寢ゝ　紅

川柳雜誌社　**今治創立句會**（今治）

九月五日　伊豫相互貯蓄銀行樓上曉童報

待望の秋は遂に來たる開會、祝電祝辭朗讀、披講、閉會萬歲三唱に至るまで實に歡喜の一夜であつた、しかして吾等に川柳の明日ただ60の一路あるのみ。

因に當夜緣雨、紫石、耕朗、豆秋諸氏より祝電、紫石、大樓、靈子諸氏より祝文及祝吟を戴きました。

兼題　柿　英賀夫選

色づいた柿を子供は見のがさず　無聲
柿一つ父の歸りを待つてゐる　靈子
澁柿へ思ひ出された友があり　小松
落ち柿へ二百十日の朝の風　紫陽
柿一つ取り殘された曲雲宵　明
(五)熟柿へ聲が尖つた百舌鳥の聲　矢舟
(同)柿の澁さをかこち吐く唾　大樓
(同)つるし柿造つた母の今はゐず　史朗
(同)命日へあの子は柿が好きだつた　虹子
(同)熟柿ぽたりと秋の眞晝間　曉童
(人)澁柿が秋の殘りの風を知り　村雨
(地)小春日に影を寫したつるし柿　逸居

父親がたゝめば蚊帳の蓆高く　潮人

(天)病床へ秋を知らした柿一つ　義郎
(軸)串柿の甘さも嬉しい春のもの　英賀夫

今治支部創立記念句會(寫眞說明)
前列右ヨリ義郎、矢舟、虹子、曉童、英賀夫、小樓
後列右　リ村爾、羊童人、紫陽、十靜、宵明、小松、史朗、柳雨
心府、無聲、(九月五日夜撮影)

兼題　乾杯　虹子選

乾杯に眼鏡が曇る父と母　英賀夫
乾杯の後で幹事は呑むときめ　松葉
乾杯へ今日は祝ひの客で居る　逸居
乾杯の手へ爆音の響くなり　曉童
(五)乾杯へ今出征の意氣を見せ　小樓
(同)乾杯を終へてへト〳〵に疲れ　大樓
(同)牛玉も乾杯といふ聲を上げ　矢舟
(同)乾杯の人數へ女給はいつてゐ　義郎
(同)乾杯を女に支へられてする　宵明
(人)乾杯へ幹事は下戸を起して來　矢舟
(地)乾杯を失意は苦く飲んで居る　史朗
(天)喜びと酒があふれてゐるカップ　英賀夫
(軸)乾杯の一人は邪心持つてゐる　虹子

兼題　青空　曉童選

青空に記錄を作る航空機　松葉
青空を金魚池から見つけ出し　小樓
青空を遠慮してくる碁の師匠　紫石
飛ぶ鳩へ五重の塔と青い空　逸居
青空へ若い日の戀うつるなり　文子
(五)いざ青空へ双手のばさん　紫陽
(同)煙のけ〳〵空は青空　心府
(同)青空の果へ憾みを追ひつゞけ　義郎
(同)青春の夢の續きの青空よ　宵明
(同)青空へ俺の理想の鷹が輪をかく　虹子
(人)青空の果を想へば雲が浮き　大樓
(地)憂鬱が恥かしくなる青空よ　心府
(天)草に寢てたゞ青空のあるばかり　曉童
(軸)青空へ幸福ですと答へよう

席題　發展　小樓選

發展を見越し養子にやるときめ　矢舟
發展へ益々神の有難く　羊童人
發展のつもり酒場は增築し　虹子
發展の今日をはためく日章旗　紫陽
(五)發展は洋館建にすると云ふ　同
(同)町の發展(古跡は姿を消して行き)　義郎
(同)發展へ朝日は笑ふヨイトマケ　心府
(同)發展の陰の犧牲は泣いてゐる　義郎
(同)煙むく〳〵女工募集　英賀夫
(人)發展のおのが努力と思はれず　曉童
(地)產業の發展を負ふナップ服　心府
(天)發展の土地に泌み入る血の涙　史朗
(軸)發展に故郷の母の涙あり　小樓

席題　灯　矢舟選

緣者みな集めた中に佛の灯　宵明
五色の灯五色の酒に醉ひつぶれ　英賀夫
春の雨電氣治療の灯が赤い　心府
(五)聯想のしぼし故郷の灯を思ひ　虹子
(同)淋しさが捨てて行くネオンの灯　小松
(同)鍬を擔げば街に灯が浮く　宵明
(同)ネオン灯あつて世の道踏み迷ひ　史朗
(同)灯は戀しツンカに似たる青春よ　英賀夫
(人)シグナルを不氣味に包む春の雨　紫陽
(地)灯を消せば嬉しい秋の肌さはり　英賀夫
(天)一點が闇の航路を照すなり　心府

席題　非常時　紫陽選

非常時に日本刀を拔いて見る　英賀夫
非常時へ麥スク〳〵と伸んでゐる　心府
非常時へこの一錢は國防費　逸居
(人)非常時へ力有りたけハンマふる　十靜
(地)非常時マイクを通す大獅々吼　宵明
(天)工廠の夜業の明りが洩れ非常時　同

(軸)非常時の月々拂ふ藥代　紫陽
角力吟
ジャズバンド母はラヂオを止め立ち　英賀夫
額掛け替へて近き吉日　曉童
また一人女給が殖える凶作地　宵明

川柳雜誌社 **加茂川研句會**（京都）

九月十日(日)　於仲源寺　司郎報

兼題　出張　朝田新水選

出張で拾つた話面白し　進示朗
敢獲があつて出張繰り上げる　同
出張のうつかりしてた秋の月　豊次
出張費殖やしたゞけの打開策　木羊
(五)都合よく出張先は祭りなり　同
(同)出張の内地ばかりで儲からず　翠夢
(同)出張の日記或日は唄と酒　迷兆
(同)出張のせいせい一本よりい飯み　豊次
(同)出張費ちがたして來た土産もの　緑雨
(人)妻病んでゐるに出張命ぜられ　木羊
(地)出張員自由の風にふれて朝　迷兆
(天)ありがたものしが食へぬ出張費　木羊
(軸)風邪ひいたことに出張宵寢　新水

席題　秋を迎へて(雜吟)　清記互選

(六)とんぼどこで死ぬ秋風の中　冠岐
(同)うしろから又後から秋の風　陸平
(五)秋風におのれの若さ抱き寄せ　迷兆
(同)帶しめてやゝ重たげな秋の裾　榮壽坊
(二)秋風のよどみし部屋に帶をさく　機見女
(同)黑枠が秋に入る日に投げこまれ　峰郎

席題　父　親　清記互選

(八)父親と言ふ強いもの弱いもの　輝扇
(五)父親のない子ぞ積木雨降る日　昌一
(四)まちくたびれて父の手の固し　六祥
(三)父親の目からのがまで逃げんとす　陸平
(同)父親がわかつてくれぬのが淋し　豊次
(二)失職の父にすまない金釘　木羊
(同)父と來て京極の手をはなすまい　緑雨
(同)非常ぶを口癖にして父の醉ひ　翠夢
(同)青春がなかつた父のかたくなゝ　同
(同)ふところの廣さ父はしまひ込み　機見女
(同)兒の笑顔汗くさき父に抱かれて　富美三
(同)約束を忘れて父親まだ起きず　進示朗
(同)父と呼ぶ墓標の新しさよ　冠岐

川柳雜誌社 **天王寺句會**（大阪）

九月十二日　於内藤製作所　須崎豆秋報

兼題　後　悔　緑　雨　選

忠告が思ひ出さるゝ不仕合せ　革又
後悔もして働ける身の若さ　遊舟
後悔を悟つた頃は虫が鳴き　弘之典
後悔へ父だけ笑ろうてくれるなり　豆秋
後悔の文字を日記へ太く書き　同
後悔に似たる心に晝の月　機見女
後悔の歩みへ風のまつはりて　同
(軸)後悔をなぐさめてゐるさしひか　緑雨

席題　胸　鶴峰選

こつぼりに乘つた娘の帶胸の邊　遊帆
寂しさに嬉しさに抱く胸の幅　遊舟
胸に蝿止まらせたまゝ晝寢　弘之典
子の行末を考へてゐる胸の中　同
胸一つぽんゝたゝいて俺にまかせ　緑雨
汗かいてひろげた胸へ風をうけ　鶴峰
(軸)たありは胸かむれが讀めて居る　豆秋選

席題　苦　學

デパートへ狹う這つた苦學生　遊帆
盛り場を小走りに行く苦學生　遊舟
苦學生赤い電車で歸つて來　弘之典
夜學への辻で組惣の水をうけ　機見女
出世へ苦學の事も書き添へる　緑雨
朝めしにちと疲れてる苦學生　同

席題　舊友、善人　豆選

こと切れてもう善人になつて臥し　鶴峰
善人の留守がつかへぬ電話口　豆秋
母となりぬて舊友のやつれて居　機見女
善人の背のまるさを親しまれ　同
恩給の父はだまつて居るばかり　緑雨

川柳雜誌社 **鶴町・塗害聯合會**（大阪）

八月十四日夜　於鶴町衛生組合樓上熊谷紅報

席題　天　井　互選

笑顔の瞳が天井にある　小柳子
こはつた夢天井を見直しぬ　變人
天井がかぶさつて來る獨り者　豆秋
天井の鶴新築の風透し　紅

席題　寢　息　八歩選

神樣を信じて輕く眠るなり　變人
冗談をされる寢息に成つてゐる　同
子の寢息賢こく成れと灯を献し　紅
しみ〴〵と祈らるゝ夜なり兒の寢息　邪宗門

席題　煙　邪宗門選

煙り動かず巨船の行衛　雅幽
藥屋根へ細い煙と今日も居る　變人
春の海煙一線流れて居　謙公

（軸）秋を孕みてかまどの煙立つ哀し　邪宗門
席題　格　子　變
悪友は格子の外で誘ふなり　寛柳
金貯めて格子の奥の笑ひ聲　八歩
月がないので格子きつく閉め　岩石
格子から名刺を出して汗を拭き　豆秋
席題　平假名　雅
伊達卷し書く平假名が上手なり　幽選
見せられぬ手紙平假名ばかりなり　紅
平假名も忘れ他人に使われる　變人
啞の子の平假名で書く父の名　同
平假名のおどし文句へうろたへぬ　邪宗門
兼題　行　水　豆　豆秋
秋選
手　燈をつけて母の行水　紅
行水へ夕立らしい風が吹き　一笑
行水の終のお湯が熱く沸き　寛柳
行水の空には灼けた雲があり　雅幽
（佳）行水に日本の夜の空となり　邪宗門
（同）行水へ明日の慾など考へず　八歩
（同）行水の子へ次ぎ〳〵と天瓜粉　謙公
（同）行水へ半分屈く座敷の灯　雅幽
（軸）行水を揚つた乳房ふくませる　豆秋
兼題　傳　言　紅
選
傳言を輕む手紙の走りがき　山月
そう言へば向ふで分ると輕まれる　雅幽
傳言を二階で聞いてやつと起き　葉光
傳言の聲が大きい船と船　豆秋
傳言はないかと雨の軒に立ち　變人
（佳）傳言の輕い不足を聞かされる　八歩
（同）傳言で土産の紐が締りすぎ　山月
（同）傳言へ女は赤い帶で來る　八歩
（人）ふるさとの柿の甘さをたずけ　邪宗門
（地）傳言は忘れられずに間違はれ　葉光
（天）傳言を聞いて机を片ずける　變人
（軸）言傳てを無口は書でほしいなり　紅

川柳雜誌社　**松江句會**（松江）

九月五日夜　湖畔みどり茶店　柳人報
題　いびき　廣江天痴人選
寢姿が起きて來そうないびきする　柳人
桃色の夢かいびきが小さいよ　莞路
和かな風景のいびきころがる　都之介
親子五人まろいいびきに御座候　同
苦しまぎれに寢たいびきだらうか　同
題　天　才　奈良井柳人選
天才に惠まれながら淋しいよ　赤陽
天才の横顔白く秋となる　菩二
天才無用資本主義第三期　天痴人
題　支　那　服　田中都之介選
支那服でスパイ日本へ戻つて來　天痴人
支那服の女の肩は糸のやう　菩二
ローソクはゆれる支那服の戀　莞路
支那服を捨てゝ滿洲住むところ　柳人
題　輕　石　岡崎祥月選
輕石に子供の元氣困らされ　菩二
輕石に野良の疲れを慰める　天痴人
輕石にフト神經のとがる日だ　赤陽
中年のかゝとだ輕石淋しいぞ　天痴人
風呂がすめば逢ふ輕石に餘念なし　都之介
輕石に似て湯女の感觸や　同
題　人　妻　大石赤陽選
人妻と知つたる朝の折れ桔梗　夢迷
人妻と知れど邪心のおこる　部屋
人妻の鏡臺くもる日が續き　菩二
巴里での噂が人妻にさせた　天痴人

同人、社友の夕

九月十六日夜　於心齋橋筋心交社

東京句會もあと一ヶ月に近づいたので、久し振りの同人、社友會を開いた。心齋橋筋の宵の雜踏を聞き乍ら東京句會の話を中心に諸種の協議を遂げた。兼題の披講が終つて「たぐらやビル」を下りたのは十時であつた。

（出席者）路郎、機見女、綠雨、水車、鶴峯、夢裡、亂耽、萬よし、艸樂、里十九、かほる、山雨樓、新水、變人。

兼題　勢　路　郎選
肱　枕　これも自然の勢さ　亂耽
葉卷爛らし攻勢の禿頭　同
勢と別に相談まとまらず　水車
五二一五事件
勢は勢、判決は鋭し　同
松岡の語勢に青い眼の動き　艸樂
逃げて來たその勢のまゝ吃　同
一日の勢ひ市場からはじめ　里十九
たゞあるくだけで親分らしいなり　同
昇天の勢ひ三號までを出し　萬よし
勢ひでなぐつた上に詫をさせ　同
永患ひにのびる朝顔　山雨樓
勢もなくしんがりでやつと着く　綠雨
虛勢とも見られて金のなき日なり　機見女
勢力へ抗しきれない年をとり　夢裡
勢を鼻の高さに見せて去に　かほる

(軸)騎虎の勢ひ　島原にゐる　路郎
(同)勢ひにせて借りたビルディング　同
(同)勢ひに乗じ東京近しとす　同
(同)さうだらうあの勢ひの悠氣なら　同

川柳雜誌　**螢ケ池句會**（大阪）

九月十日　亀井愚寵報

久方ぶりの絲雨、機見女さんそれに青踏氏の來援を得て開催、絲雨氏の海拔三〇〇〇餘米、立山登山のお話を聞く。鮎美氏、小松の革刄氏より御投句あり、稀にみるこゝろよい會であつた。

兼題　夜の空（夜）　絲雨選

神經を澄まして秋の夜を行く　雨
聞き上手話し上手へ夜の空　松雨
ふと星〻落ちて夜のしじま　一沐
夜の空見つめて明日の覺悟する　岸岩
草に寢て星への距離を思ふなり　一馬
星一つ廣告塔の上に更け　綠紅
涙ぐむ蟬で病んでる秋の夜　革刄
病弱の夜空を鳴いた渡り鳥　鮎美
思ひ出をたどる夜空に星一つ　紅蔦
ふとそらす視線のはしの夜の空　靜太
（軸）淋しさに星を數へた獨り者　絲雨

兼題　心　青踏選

煤煙にまみれし心とりもどし　鮎美
眞直な心を馬鹿と見られたり　青鬼
心にもない嘘青い空を見る　公平
出來心明るい街をたづねあて　革刄
死ぬかも知れぬこゝろがあそんできたら　愚寵
だましてから暗い心に惱まされ　絲雨
金錢の事で心をみすかされ　同
わが心嘲ふ烏の啼いてゐる　靜太
心はさみし目鏡をはづすなり　同
（佳）はてしなき心抱きて雲とゐる　一沐
（同）こほろぎよ晝の怒りを嗤ふまじ　機見女
（同）讃美歌ごゝろだれてゐたりけり　松雨
（同）あゝ父のこゝろの星空となる　逸夫
（同）山に寢て鳥の心に忍び寄る　青鬼
（軸）向日葵に抱かれありしわがこゝろ　青踏

席題　出世　愚寵選

洋服で歸れば出世したといふ　一馬
出世せずとも母親の居てくれる　青踏
昇給を出世のうちに入れて置き　青鬼
出世をしたなと手を握りに來る　絲雨
出世する話を蚊の帳中でする　靜太
（佳）むかし〳〵兵隊さんになる僕よ　逸夫
（同）出世したたて座蒲團の巾なりし　機見女

席題　空瓶　靜太選

空瓶を蹴ると夕暮の音がする　逸夫
空瓶を並べて値段もめてゐる　絲雨
空瓶を綺麗に洗つて用がなし　青鬼
こほろぎの戀に空瓶うづたかく　機見女
（佳）空瓶のかげらが秋の陽にまぶし　松雨
（れ）空瓶家藥瓶だけ除けるなり　同
（同）空瓶にちと呑ってやなあと思ひ　絲雨
（同）空瓶をふてその日の暮し也　同

川柳雜誌社　**御旅句會**（大阪）

八月廿七日夜　於心交社小室　生田翠夢報

殘暑にもめげぬ熱心な吟社同人の集ひ、とても眞劍味のあふれた句會だつた。句會をして作句研究の道場への精進御旅句會の獨壇として今後とも益々盛んにしたいものである。路郎先生の講評を得て素晴らしい收穫を得た事は言語の外であつた。

席題　食堂　多耶選

食堂の晝の造花の色も夏　葉平
でれ〳〵と食堂へ女を連れて來る　翠夢
食堂がらあきと云ふ夕陽さし　あや美
食堂で逢ふ約束へ勘定書　同
デパートで食ふ事にして子供連れ　紀太
旅なれて食堂にゐる赤切符　同
ライスカレー、ズツを這入た甲斐なし　路郎
サンプルで迷ひ一ト先づコーヒにし　同
食堂は妻子のために寄つたらし　同

席題　醫者　翠夢選

酒臭いお醫者の息が氣にかゝり　紫石
醫者と云ふタイプになつて儲けてゐる　あや美
全快へ醫者人間らしい口をきゝ　紀太
案外に小さい家に獸醫住み　同
小兒科の扉を足の先きであけ　葉平
（佳）醫者樣でも有馬の湯でゝ錢かいり　同
（軸）沈默の醫者へ家族は息をひめ　翠夢

兼題　人情　路耶選

感情を押さへるビールでなりけり　紫石
せしめるに人情論も一つの手　四葉
人情が有ればとつくに死んでるさ　あや美
エゴイストの目にがつりと秋の空　葉平
貴耶の愛を拒絶しますと云ふ手紙　同
雪やしん〳〵遊びが語る人情味　同
陪審に人情をかけた顏である　多耶
ろかさを言はず寢返り悔しがり　同

人情くさいけだものゝ呼吸　同
(人)人情論はおよしなさい裁判長　翠夢
(地)事なかれ主義人情へたぢろぎぬ　紫石
(天)もたれ來る話へ冷めたく〜居　紀太
(軸)連れたのをくさんとしてよも々し　路郎
兼題　雑　吟　路郎選

これやこの蟹が拾つた握めし　葉平
象牙箸あかく夫婦のさしむかひ　紀太

川柳雑誌社　**簸川句會**（出雲）

九月二日夜　於第十四夜倶樂部尼綠之助報

兼題　峠　綠之助選

愛着は盡きず峠は近くなり　鶏天
峠から見える豪家の藏の數　奈翁詠
ひつそり閑とした峠の茶屋に鶏歩む　汀雨
(人)電線が峠に連りて白し秋　羅門
(地)ふと寂しき風が吹きやがる峠　好郎
(天)晝の月が風に吹かれてゐる峠　羅門

兼題　牛　羅門選

放牧の牛肥えて秋深し　比佐緒
秋風まろき牝牛と對す夕ぐれ　田鶴緒
牛の眼に秋の愁ひをおぼえたり　鶏天
(人)牛と黄昏胃袋を持つて來る　好郎
(地)牛つかれた泡を噴き青草光る　同
(天)風と月とびてありて放れ牛の足　綠之助
(軸)母　呼ぶ桐の木の下牛啼く眞晝

席題　保　喩　田鶴緒選

(人)保險金かけて浮世を住み慣れる　羅門
(地)保險屋へ糸瓜がゆるばかりなり　同
(天)秋だ、小兒保險の兒は肥る　與詩雄
席題　與　奮　奈翁詠選

興奮へ糸瓜しきりにゆるゝなり　羅門
興奮へ男としての眼をつむり　綠之助
渦を卷く怒り男は泣かないぞ　同
(人)興奮は鬱憤をみな吐けばよし　與詩雄
(地)興奮へ又物あやしく光るなり　同
(天)興奮した父には母も子も他人です　紫光

席題　行　水　華村選

夕顔棚の闇に行水する女　綠之助
(人)行水の失意の肌に迫る秋　與詩雄
(地)行水に下女恥しい月がさし　紫光
(天)青春さびし行水へ骨が浮き　與詩雄

席題　旅の星　與詩雄選

秋の星車窓に冷えて續く夜　羅門
旅の句をつゞるさみしき流れ星　綠之助
(人)旅の星白し睫毛に來る地靄　羅門
(地)愛人の瞳に似たり旅の星　比佐緒
(天)流れ星異郷の空に湧く不安　田鶴緒

川柳雑誌社　**八束句會**（島根）

八月二十六日夜　於平塚別館

兼題　朝霧、六郎選　中年　檳榔選

席題　風　柳人、亂笑共選

燒け焦げた風が晝寢の足に縺れる　檳榔
金魚に風がまともに秋だ　卷二
風におされてハイヒールの歩並　柳人
風が寂しい九月のアスファルト　亂笑
警報は「風強し」ま晝の白さ　亂笑
何一つせず中年となりにけり　喜郎
中年の女來歴語つてゐ　青波
頬杖の癖が淋しい中年だ　卷二
中年の皺を子供に敎へられ　柳人
朝霧をチャンスに敵前渡河作業　勁一郎
出勤の帽子朝霧吸ふてゐる　青波
朝霧の丘に立つてる無緣　塚磨須雄
朝霧を奴隷となつてついて出る　卷二
朝の霧鳴子の音の端へ霽れ　天痴人

七夕川柳句會（松江）

八月七日夜　於て奈良井柳人居

席題　和多見（ローカル）　互選

人生の疲をかこつ和多見の灯　砂詩郎
五十錢タクシーのストップ和多見がけよる　天痴人
和多見では酔ふた氣になるコップ酒　柳人
私生兒の籍で和多見の子は生きる　夢迷
駒下駄の音が和多見を宵にする　正雄

兼題　星　柳人選

敎會の窓がゆがんで流れ星　卷二
純情な二人の戀に星二つ　莞路
星一つ流るゝ空の沈默よ　磨須雄
天國へ行つた人等の星でしよか　夢迷

席題　株　主　天痴人選

株券を數へる丈の餘生です　正雄
鈍重な足で株主やつて來る　柳人
ドカ落ちの日の株券は鷲づかみ　正雄
株主の顔がゆるんだ決算期　卷二

席題　異　人　正雄選

棧橋に異人の輕い靴の音　祥月
街塵に異人せわしく吸ひ込まれ　柳人
異人ニコ〜と日本刀の重み　砂詩郎

席題　踊り子　卷二選

踊り子にライト狂ひし如そゝぐ　磨須雄
踊り子の戀知りそめた夏のころ　柳人

席題　貝　　砂詩郎選

無造作に貝のむくろが轉つて　青波
倦怠の朝を貝がらつぶされる　柳人
夕燒の濱一つ一つ貝光る　卷二
潮燒の掌に貝からが鳴つてゐる　正雄
小抽斗その日を想ふ櫻貝　同

いかだ詩社例會（松江）

八月二十日夜　於事務所　岡崎祥月報

席題　船　出　岡崎祥月選

(佳)遂かれた舟出は細く雨が降り　卷二
(秀)放涙の雲を見つめて舟出する　同
(同)感激の舟出テープがもつれつゝ　同

席題　主題歌　梶谷卷二選

主題歌は彼女待つ夜の口笛よ　莞路
主題歌に身をつまされしのゞ佛　正雄
主題歌は女の文字で書いてあり　赤陽
主題歌を鼓に書かされる涼み臺　莞路

席題　鶴　嘴　大石赤陽選

監督の腮へ鶴嘴素直なり　正雄
鶴嘴の歸り燒酒のむ話　莞路
夕立に鶴嘴づらり軒にゐる　柳人
鶴嘴にきけば叛いて國を出た　卷二

席題　決　心　奈良井柳人選

兩親を捨てゝ來たと女云ふ　卷二
讃美歌へふりむいて居る決心よ　磨須雄
決心を書くにペン軸細いなり　卷二

席題　大　橋　互選

大橋を降りて船場の唄をきゝ　柳人
動くかと見える源助柱夜　正雄
大橋〻ふつと男の氣が變り　卷二
鐵骨の音から大橋明けるなり　同
大橋のネオン映して潮が込み　柳人

睦會句會（神戸）

八月二十六日　於高雄居　明珠報

兼題　水、働子供、祭、夜　清記互選

欄干にもたれて秋の水の色　高雄
ドブ水の樣になつても生きてゐる　同
醉ざめの水一杯の妻の愛　金魚
氷水せがむ子の腹たゝいてみ　花田
水煙あげて我子の健やかさ　同
一錢の請求が來ず水遊び　修次
蟇天もまかればならぬ撒水車　同
水飲めばプロレタリヤの味がする　貧兒
水打てば都會の匂ひアスファルト　同
足もとへ來てゐた夏の海の水　明珠
血は若し波の力を押しかへし　同
若者の度胸へ青い海の水　同
働らける樣になつたと腕をなで　花田
瞳かゞやかして働くものゝ朝　貧兒
働らいてゐてさへ足らぬ世に生れ　明珠
いつもの嘘で働いてゐる　同
一錢で子供も機嫌釣り込まれ　修次
素直な子の辨當箱が大きい　貧兒
ソーダ水のむ子の瞳かゞやけり　明珠
友達を一人泣かした子の瞳　同
お祭りに風船の音興をそへ　花田
村祭り太鼓結びが樂しそう　同
着ながしでくると祭の夜はあかし　明珠
招かれて祭の燈くゞらされ　同
珍客と話したりない短き夜　同
不甲斐ない夜でもエビの樣にれる　高雄
夜だけでも大の字になりれどしよう　同
冬の夜を思ひなやめば風がなる　情々
風の中のうたが悲しい夜　同

いかだ詩社例會（松江）

九月三日夜　於事務所　岡崎祥月報

席題　秘密、ヴアイオリン、素顏

素顏は太陽にそむいてた　卷二
素顏にはつきり見える苦勞じわ　祥月
秘密ころ〳〵大都會の眞晝　莞路
ヴアイオリンおれと一しに泣いてれ　赤陽
ヴアイオリン君のうなちかれて居た　卷二

光笑會

九月十四日　於カナメ喫茶店　永田里十九報

兼題　カーテン　緣雨選

カーテンを下げるに惜しい月夜　遊帆
カーテンを大きく開ける馴染客　遊舟
カーテンに風あり宵寢してるなり　鮎美
開店へまづカーテンから賞めてゆき　里十九
(佳)カーテンをり〳〵まいてしられる　同
(同)怪談の窓にカーテン謎ときゝ　寒木
(同)カーテンをしめて二人の部屋にり　豆秋
(同)カーテンのんがはれて九月なり　かほる
(同)カーテンを上げて地震の話をし　同
(軸)カーテンをあけて串ひ續くなり　緣雨

席題　眼　病　かほる選

眼病へ寂しく響くアンマ笛　遊舟
眼病と云へば伊達だと笑つてゐ　遊帆
叱られてゐるに眼病横をむき　白柳子

瀧谷へ下りると眼病かと聞かれ　里十九
眼病は柱時計をすかして見　豆秋
うつむいたまゝ眼病へ日がくれる　同　綠雨
眼病に首をかたげて話して居　同
眼病をまだ起きてるかと叱り　同
（軸）二個連れに會ふ眼病の歸り道　かほる

席題　猫　互選

あくびする猫へ隣居もあくびする　遊舟
かしや札隣は猫の子上げます　里十九
飼猫は蚊屋を一べん廻つて見　豆秋
くゝられたまゝで小猫は眠てしまひ　同
猫抱いてお隣へ來るよい女　綠雨
魚屋の荷へ小猫もついて來る　同

つどひ（第十六回）

吉田水車報

嵐

嵐の夜それから深い仲になり　夕鐘
嵐から重い空氣の日がつゞき　同
見逃してくれた嵐の記事を讀み　同
宿直の豫感嵐に更けるなり　水車
いつそ嵐へ進む内職　同
嵐つゞきを詫びる魚屋　同

川柳風呂（その七）

水谷鮎美報

眞夜中、嘘・雜吟

眞夜中の女もすこし酔ふてゐる　觀月
眞夜中の月澄みきつて影動く　同
眞夜中の屋根には月がおりてゐる　鮎美
魂は殺ろされてゐる眞夜中だ　同
人妻の眞夜中といふ月を見る　同

嘘つけば絹夜具までが氣くるし　遊歩
善き心嘘は小さく隅みにゐる　同
おちついた嘘のついでに茶をすゝり　鮎美
おかしさは寫眞にうつす嘘となり　同
忘れたころに嘘がばれてる　同
交際のビールと何か買ふて去に　白菊
下宿から世帶にかはる酒の味　同
ダンサーの毛深き脚をみせて畫　同
あだ花のへちまの蔓をのばす畫　鮎美
洗面器みづのひかりのうつくしき　同

天痴人居對座吟（島根）

九月十一日夜、園山勁一郎君の訪問を別に一夕燒へ案山子の影のグロテスク　勁一郎
カーテンの青き夏の チヤーミング　同
梨皿にナイフの白く尖る夜だ　同
ブルヂョアを倒せと案山子弓を張る　天痴人
滿月へ盜まれさうな梨畑　同
カーテンの白さ學校秋が來た　同

第十四回畔柳社句會（大阪）

八月十五日　大鐵クラブ小會議室

養子　明坊選

（佳）挨拶もそゝに養子の顏を見る　杏林
（同）養子にはまだ言ふて義理惡　天八

手術　某人選

手術室ドアーの音にほつとする　村夫子
（佳）メス振ふ醫師強い度の眼鏡　明坊
（同）無性髭へ手術の經過よし　九天
（同）退院にあの手術室ふりかへり　村夫子

兼題　海水着　山雨樓選

金鎖のマネキンモダンな海水着　木石
裏町へ派手に干してる海水着　天八
驕ぶつた水着へ水着へ波が煌めいて　某人
泳着を恥し相な腰で脱ぎ　明坊
海水着二つ並べて干されてゐ　喜山
出戻りにチト派手すぎる海水着　村夫子
海水着職業婦人らしい群　九天
（人）海水着あめ湯の味も忘れかね　村夫子
（地）海水着きると女も足を投げ　明坊
（天）視線皆集め海水着の赤さ　九天
（軸）丸髷で來た海水着むごく濡れ　山雨樓

片戀　山雨樓選

片戀を修道院へ背負ひ込み　村夫子
片戀の東京を去る汽車の中　明坊
純情を心に密める午丙　喜山
撒水の手を休めてる片想ひ　秀太
バットを空に片戀の淋しさ　九天
（人）片戀へ榮種畠がぽうとあり　某人
（地）スタンドの下で片戀更けてゐる　九天
（天）片戀へ海の魅惑が冷へて來る　藤九郎
（軸）弟と仲がよすぎる片想ひ　山雨樓

ソーダ水　山雨樓選

ソーダ水泡がこぼれる二人連　秀太
ソーダ水まだ戀知らぬ女學生　藤九郎
レーダ水下戸は笑つて飯んでをり　天人
十圓のつりにこまつたソーダ水　九天
（佳）ソーダ水獨りで飲めば三十秒　木石
（人）ソーダ水へ街紫に暮れかゝり　某人
（地）目的はソーダ水ではありません　村夫子
（天）云ひにくい話にソーダ水の泡　天八
（軸）ソーダ水女給の眉が長すぎる　山雨樓

畔柳社會報（第十五回）

八月二十四日　於大鐵倶樂部

兼題　日　記　　山雨樓選

旅日記　三十文で五人喰び　某人
變哲もなく日誌帳晴雨だけ　喜山
筆蹟に日記の一部出されてる　杏林
日記には只別れたと書いてあり　天八
青春の〇〇もある古日記　明坊
プチブルも避暑と日記に書きのこし　秀太
日記書く妻へ新聞語を教へ　九天
伏字など見える日記の二十過ぎ　村夫子
若妻の日記ベビーの事ばかり　藤九郎
片假名の日誌ひろがら蜻蛉つり　某人
（人）プログラムはさて日記長くなり　九天
（地）苦學の日記赤くなりゆく　某人
（天）親馬鹿を日記殘してくつもり　ひさし

兼題　花賣り　　山雨樓選

花賣りを呼び止めてゐる二階借　天八
花賣りへ娘の膝はかゞむなり　かほる
お朔日もう花賣りの來る時分　村夫子
花賣りの脚絆浮氣をせぬつもり　某人
肩揚の絣へ花賣りらしい線　九天
花賣りも去年死なせた子を語り　某人
（人）ちと寄つてくれと花賣荷をかつぎ　かほる
（地）花賣りへ電車のきしる音ばかり　秀太
（天）花賣りの手甲の上の朝ぼらけ　某人

兼題　頭痛膏　　かほる選

違足に頭痛膏の子も混り　天八
頭痛膏貼つて玄人めいて見え　明坊
頭痛膏大きく貼つて子守唄　村夫子
頭痛膏茶碗の影が氣にかゝり　九天
（人）頭痛膏幹事を呼んでちつと去に　同
（地）頭痛膏仕事に障りない程度　杏林
（天）頭痛膏新妻一寸てれて居る　藤九郎
（軸）今度目の豆腐屋を呼ぶ頭痛膏　かほる

席題　橋　　かほる選

追つて來てから橋の殺陣となり　明坊
橋へ來てまだ四五丁の道があり　秀太
丸髷がためらつてゐる太鼓橋　喜山
土橋のある舞臺面只濟まず　某人
鐵橋を渡れば大阪らしい風　九天
約束のある橋までを悶へたり　同
（軸）闌かんに添ひ日暮れの橋をゆく　かほる

席題　外　出　　九天選

附添ひの女中も四尺五六寸　木石
外出に子は條件を持ち出だし　村夫子
外出を種に保險屋追出され　ひさし
泣き出した子へ外出を見合せる　明坊
外出のもう蠟船に灯がはいり　かほる
外出がすきで洋服たんと持ち　某人
外出が嫌ひでも亦母案じ　同
外出が好きで娘の綠談のび　藤九郎

席題　蟬　　互選

ひぐらしへ十七年目なり母の墓　九天
ひとゝきを蟬が啼き止む砂ぼこり　かほる
壯嚴な社に蟬の宵が來る　秀太
うたゝ寢へ蟬遠くなり近くなり　某人
日盛りの蟬へ工事を休んでゐ　明坊
讀經へ蟬鳴いてゐる夏木立　同

席題　エレヴエーター　　互選

エレヴエーターよ襟足を嗅がされる　秀太
エレヴエーター食堂迄で終ひなり　かほる
エレヴエーター〜〜て上に居り　秀太
エレヴエーター世間はこんなのと知り　かほる
エレヴエーター乘るとアツツリ話止の　呑舟
エレヴエーター廻れ右の型で乘り　天八
エレヴエーターへ乘つた話・國でも　九天
エレヴエーター八階迄は止りません　喜山
詰でからへエレヴエーター降りてゆき　某人

畔柳社會報（第十六回）

九月七日　午後四時　於大鐵倶樂部

兼題　下　駄　　苦樂公選

夜遊びが歸つたらしい下駄の音　ひさし
行商へ下駄ちびて來て儲からず　九天
薄情な自分に氣付く下駄のちび　某人
どれとでも一足になる宿の下駄　村夫子
更生の仲間へ晴れた朝を出る　九天
（人）錢湯へそれだと解る下駄を脱ぎ　呑舟
（地）全快の下駄逃んびとし逃げんびし　某人
（天）女工の郷よ下駄の音ばかり　杏林

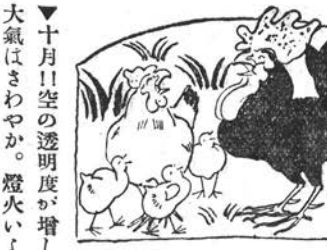
兼題　夜　業　　苦樂公選

ゴム靴の中で夜業の寒の更け　喜山
涼む氣が夜業工場をのぞいてゐ　ひさし
火の始末言うて夜業に立ち上り　呑舟
（佳）朝風呂へ夜業の顔も交つて來　同
手の荒れに今日の夜業を考へる　村夫子
（秀）終電車ベルトの動き見付けたり　九天
（軸）夜業まいシムラの記事を少し知る　苦樂公

兼題　退　院　　苦樂公選

荷物みんな投げ込んで退院し　秀太
退院だ鬚でも削つて置きましよう　村夫子
退院の荷物へ藥十日分　九天

（以下次號）



編輯の窓

山雨樓

▼十月!!空の透明度が増した。大氣はさわやか。燈火いよ〳〵親しむべく、詩囊は益々肥ゆる本誌は躍進また躍進を續けてゐる。

▼卷頭路郎主幹の「五七五の醜譯」は文壇的に評論の渦卷を起してゐる問題を扱はれたもので俳壇、柳壇への反響が尠くないと信ずる。熟讀を望む。

▼本號の表紙は本社社友三好計加壽伯の筆になつたもの、特に味つて頂きたい。

▼武玉川初篇研究は益々絶讃を博してゐるが執筆諸先生は既にもう第二篇に着手しておられる由。柳壇の爲めよろこびに堪えない。

▼日本名所名物川柳が非常に好評なので、次第に全國的に擴大し募集する方針である。御聲援と御期待を乞ふ。

▼本誌の呼び物「柳壇壽報」が稍鮮明を缺いだので各方面からお叱りを頂いたことを恐縮してゐる。今後充分留意して御期待に副ひたい覺悟である。面白い寫眞があればどし〳〵寄せられたい。

▼「月評」のために町二、水車、丹路の諸君と私が顔を合はしたこれから大いに熱を出すつもりだ。會場には里十九居を煩はした。

▼劍花坊先生の寄稿「柳人を語る」は短文ながらも先生の風貌に接するの感がある。斯うした原稿をポツ〳〵揭げたいと思つてゐる。

▼先年來本誌の好讀物であつた「柳の絮」でおなじみの長野吉高氏から久々に寄せられた隨筆「是空庵より」は御病氣恢復期を押して執筆されたもの。一日も早く御全快を祈る。

▼亂耽君の「唐人笛」はその才筆が横溢してゐると共に、一脈の哀愁を誘ふ。同君が今後の活躍茲に愛讀者諸君亜に梅本翁に感謝の意を表し、併せて本稿の淨書其他に就き多大の御援助を頂いた省二先生に深謝する次第である。

▼九月六日夜本年柳翁忌句會を開いた。當夜路郎主幹は葭乃奥樣御病氣の爲已むを得ず缺席されたことは淋しなかつたが、溪花坊、雞牛子、文久其他諸氏の出席があり盛會であつた。葭乃奥樣は既に全快せられたから御安心を乞ふ。僕は伊勢地方へ公用の旅にゐたので出席出來ず殘念であつた。

▼九月十六日夜心齋橋筋の心交社で同人社友會を開き東京句會の話を中心に社の重要用務に付協議を重ねた。

▼九月五日には本社今治支部創立句會があり、同十日には玉造支部創立句會が開かれ、何れも盛會であつた事は柳界の爲め力強き限りである。

本社十月例會

日時 十月六日(金)午後七時

會場 道頓堀倶樂部(大阪市南區日本橋南詰東入南側、天牛書店階上 電話南二七四八番)

兼題 「築泡」 三句 路郎選

會費 金三十錢

に拍車をかける決意を示してゐるのでうれしい。

▼新人丹路君が「危惧ひとつ」を書いた。同君の研究熱は益々冴えたものを發表するであらう。

▼永らく連載を續けた「肱枕艸紙」は梅本塵山翁の博識と好尚に依つて熱心な讀者の好評を博したが本號を以て完結となつた

▼本社東京句會は句餘に迫つて來た。全國各地からの聲援も非常なもので、遠く函館の晟修氏（舊號花童子）白河の五花村氏は是非行くとの御通知があり、金澤方面からも上京の報あり、本社側からは路郎主幹、綠雨、萬よし夫妻、新水、かほる、亂耽閑生、丹路、水車、豆秋、變人華水、汀柳、雨迷、夢裡、紀太翠夢、機見女の諸君と山雨樓が出席することになつており、「たまむし吟社」の一歩氏も參加せらるゝ筈である。京都及名古屋の有志も參加豫定を通知して來られたが尙此上共御聲援を祈る

▼九月二十六日の夜、端の坊で愚陀、亂耽句集「潮騷」刊行記念句會が開かれた。超滿員七十六名の盛會振りで珍らしい顏振れが多かつた。亂耽君の行屆いたそしてユーモラスな挨拶の後で路郎先生から「句集を中心として」と題し愚陀急逝前後の心境其他に付しんみりとしたお話があつた。故愚陀君の母堂も出席されてしとやかに挨拶があつた

▼散會後萬よしで路郎先生と森東魚氏を圍み次の人達で秋の酒に親しんだ。綠雨、かほる、新水、艸樂、亂耽、杏三、ひろし、鵜足、葉平、夢裡、豆秋、萬よし、山雨樓。

▼「行途は雲か、風か。風か雲か。明日のための今日の憩ひ。そして再び歩み續けるために、喫茶室のウヰンドを透して街路樹にそよぐ初秋の風を心ゆくまで呼吸しようではないか」——これは喫茶新聞第二號の卷頭言の一節——喫茶新聞は興味横溢してゐる。喫茶柳壇も盛んだ。

▼松江支部の天痴人、柳人兩君から、二十三日の柳翁忌を同支部と松江番傘會とが共催にて修したところ、三十七名といふ大盛況でしかも支部の出席者が優勢であつたと、朗かな便りが事務所へ屆いた。

▼舊同人の吉川啞人氏（山口縣）から「來春から川柳雜誌の同人として復活したいと思つてゐる」とうれしい便りが綠雨君のところへ來てゐる。

▼藤島茶六氏の令孃常子さんが九月十九日永眠せられた由。過日僕が東京で同氏にお目にかゝつた際にも大變心配してゐられたがお悼ましい。

▽

▼本社章（銀七寶メタル）が東京句會出發前に出來上るので、十四日出發の際同人社友にお渡しする。見送りにも精々多數に來て頂きたい。

移轉

▼中村山門君は東京牛込區拂方町一四

▼村田新市街君は大阪市南區日本橋町三

▼小西無鬼君は兵庫縣篠山町小川町

▼大西長三郎君は大阪市此花區玉川町三丁目二五一

▼日野華水君は神戸市中山手通七丁目五四三

▼川柳うきよ吟社は東京市荏原區戸越町九一四名川方

改號

牛田凡子君は千世子と改められました。

前號の正誤

四一頁　だあれも　戀しくはありませぬ花の役影　機見女

四八頁　戸籍調の欄、山本銀雪氏の項、（2）白丘土、（4）東京市芝區白金臺町一ノ七五、（5）松江市北堀町一七

改號

今般下記之廻り改號致しました。今後共相變らず御厚誼の程御願ひ申上ます。

昭和八年九月

函館市青柳町五〇

鑪井晟修

舊號花童子

投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▼「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る

▼「川柳塔」への投句は同人及び社友に限る。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募集

第十卷第十二號課題

十月五日締切
（各題十句以內）

▼壁　前田五健選
▼晴衣　高橋かほる選

第十一卷第一號課題

十一月五日締切
（各題十句以內）

▼寶石　闘本雅幽選
▼命令　吉田水車　西村明珠共選

毎號募集

▼近作柳樽（雜吟十句）　麻生路郎選
▼各地柳壇（會報）
▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定價

一部　金參拾錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

▼御送金は振替口座穴阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は爲新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

昭和八年九月廿五日印刷
昭和八年十月一日發行

第十卷第十號
（毎月一回一日發行）

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
發行所　川柳雜誌社
電話天下茶屋二五七九番

大阪市住吉區平野西之町八三番地
事務所　川柳雜誌社
振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

賣捌書店

（大阪）大賣捌　二盛社書店。（明文堂　其他　市內　各書店）
（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、寶文館（函館）石塚
（京都）三宅（名古屋）靜觀堂（石川縣）小松はかりや

川柳雜誌社關係の人々（いろは順）

賛助員

池澤樂居　伊藤彦造　柴谷柴舟　中見光路　三輪夏曉　楊井二南
長谷川一徹　鳥山一歩　篠原春雨　中澤濁水　水谷鮎美　朝田新水
大道弘雄　大島濤明　大谷五花村　村松夢裡　平井蒼太　阿部閑生
岡本一平　岡田三面子　蛭子省二　上野錦水　姫田夕鐘　關本雅幽
片岡直方　藤里好古　桑原京郎　日野華水　庄萬よし
笠原路生　森東魚　山本雨迷　妹尾變人

客員

嘉納純　亀井晟修　松下小柳子
田中辰二　川上三太郎　生田翠夢　須崎豆秋
長崎柳秀　川村花菱　石曾根民郎　増位汀柳　首藤竹楓
米村あん馬　市塲沒食子　奥野禿山　橋本綠雨
長岡半太郎　吉田清　熊谷紅　山本丹路
長野晴濱　田村孝之介　春元紀太　松丘町二
國枝史郎　谷脇素文　西村山月　江戸みつる
藤村作　窪田銀波樓　西村明珠　岩崎柳路
藤本卯之助　長野吉高　友淵貴山　阿形一杉　松盛琴人
赤井清司　安川久流美　大西八歩　櫻井圓角　西田艸樂
淺田一　前田雀郎　谷村稔　北山悟郎　福田山雨樓
末弘嚴太郎　前田五健　立井登美坊　喜多春秋　吉田水車
中西おさむ　宮岡白峰　岸上錦石　高橋かほる　麻生葭乃
福田鶴峰　永田里十九主幹　住田亂耽　麻生路郎

社友

編輯局（同人）

道頓堀支部（大阪市）幹事庄　万よし
九三會支部（大阪市）幹事北山　悟郎
神戸支部（神戸市）幹事西村　明珠
國館支部（函館市）幹事亀井　晟修
高知支部（高知市）幹事小松　蟬風
梅田支部（大阪市）幹事永田里十九
螢ヶ池支部（大阪府）幹事亀井　愚寵
田邊支部（和歌山）幹事辻　左馬
篠川支部（島根縣）幹事尼　綠之助
豊橋支部（愛知縣）幹事白井　梅里
加古川支部（兵庫縣）幹事宮田　泰山
京都支部（京都市）幹事平岩　司郎
鳥取支部（鳥取市）幹事中島　鐵洲
堺支部（堺市）幹事八木夜美路
松山支部（松山市）幹事河合　紫石
守口支部（大阪府）幹事朝田　新水
御旅支部（大阪市）幹事生田　翠夢
高岡支部（富山縣）幹事越田　久水
天王寺支部（大阪市）幹事福田　鶴峰
鶴町支部（大阪市）幹事妹尾　變人
小松支部（石川縣）幹事上野　錦水
御池橋支部（大阪市）幹事村松　夢裡
松江支部（松江市）幹事奈良井　柳人
塗青支部（大阪）幹事熊谷　紅
西條支部（愛媛縣）幹事荒井　英賀夫
光纏會（大阪）幹事竹内　機見女
萩ノ茶屋支部（大阪）幹事奥野　禿山
北濱支部（大阪）幹事谷村　稔
今里支部（大阪）幹事吉田　水車
奉天支部（奉天）幹事江戸　みつる
八東支部（島根）幹事平塚　亂笑
野上支部（和歌山）幹事野添　修一
玉造支部（大阪）幹事清水　友帆
今治支部（今治）幹事渡邊　曉童

道ブラから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなつた。本は寶石などのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が來たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く讀む方法として古本を買へばいゝ古本と云つても虫食本のことではない。古本が非衛生的に考へられてゐた時代は遠うの昔に過きてしまつた。道ブラの次でに公立社の棚をのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。

（路郎生）

古本は

高價に申し受けます。
御通知次第早速參上確實
迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話 南五六二番

加茂川句會

日時 十月十日(火)午後六時半
會場 仲源寺(京都四條縄手東入)
兼題「混亂」三句 司 耶 選
會費 金 參 拾 錢
京都市嵐山天龍寺前平岩方
京 都 支 部

社告

本社の例會案内希望の方は左記へお知らせを願ひます。
大阪市住吉區旭町三ノ一四
會報係 須崎 豆秋

天王寺句會

（日時）十月十日午後七時
（題）「事務服」三句
（所）大阪天王寺區大道三丁目
内藤製作所

綠雨居偶會

（日時）十月四日午後七時
（題）「初雪」三句
（所）大阪市住吉區平野西之町八三 橋本綠雨

光笑會

（日時）十月十二日夜
（所）カナメ喫茶店
（題）「乳兒」
（所）大阪市南區疊屋町六
幹事 永田里十九

▽川柳雜誌投句用箋

本社制規の投句用箋を左の價額でお送ち至します。なるべく此用箋を御使用下さい
五〇枚綴一冊 價金拾二錢（送料共）
▼御申込は本社事務所宛。
（一錢切手代用不苦）

懸賞川柳募集

題「菊」 路郎 選
十月十日締切
その他雜吟を募る
▼用紙 官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）
▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す
▼投吟所 大阪市玉出本通三の三六 麻生路郎氏宛
化粧新聞社

懸賞喫茶柳壇

題「合服」 夢裡 選
十月十五日締切
▼用紙 官製ハガキ（喫茶柳壇と明記の事）
▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す
▼投吟所 大阪市玉出本通三の三六
喫茶新聞社

川柳手拭
路郎主幹の染筆
二種 金三拾錢（送料共）

和田天民子編（初版賣切れ再版發賣）

現代川柳名句選

美　裝
四六普及版
定價八拾錢
送料六錢

川柳を作る人、愛好する人、必ず一冊を机上に備へられよ。

現代川柳人のうたつた名句は、脈々と躍つて、作句の栞に、川柳愛好家に、生きてゐる川柳として充分な滿足と指導精神を與へるであらう。

内容は人事――自然――動物――等々幾多に分類し、其間に句に對する言葉、又は傾向、時代の階調變遷等を挿んで二千數百餘の句をより意義づけてある。

編者は法學博士とし、實業界に多端であつた過去の餘暇といふ餘暇を、あらゆる柳誌、句集及び川柳發表機關より名句を探究する事十數年、玆に漸く一卷として、川柳愛好家に此書を送らんとする川柳倶樂部の顧問、倶樂部は此玉篇を自費廉價普及版として弘く世へ送るべく發行した。（輯錄句は昭和八年一月迄）

東京市牛込區方拂町四一

發行所　川柳倶樂部社

（川柳倶樂部　月刊　一部　二十錢）

振替東京三五一二七番

申込は振替又は小爲替の事

振替は節の……

宛郎太順村中……

便利御が……

すて。

洋飲食店の繁榮機關

麻生幸二郎主宰

喫茶新聞

毎月一回五日發行
定價一部金五錢
一ヶ年金六十錢郵税共

懸賞川柳を募る
課題及投句規定等に就ては別欄廣告參照の事

喫茶店・酒場・カフエー・食堂・フルーツパーラー等の繁榮機關として刊行し、頗る近代的な編輯振りと興味横溢せる記事の滿載とは本紙の特色なり。敢て御購讀を薦む。

發行所 喫茶新聞社
大阪市西成區玉出本通三丁目三六
電話天下茶屋二五七九番
振替口座大阪三〇三九二番

清酒

白鶴禮讃

白鶴をチントンシヤンと提げて來る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百事意の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狹う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
白鶴が縁とはなりぬ君と僕
白鶴に素直な父となつて寢る

摂津灘 嘉納合名會社釀

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髄脳

伊豆椿ポマード

國產唯一　大島椿の精

輝く美髪

伊豆椿香油本舗

今直に御愛用下さい

全國有名化粧品藥店にあり

大正十三年三月三日第三種郵便認可（毎月一回一日發行）
昭和八年九月廿五日印刷納本　昭和八年十月一日發行

にきびとり美顔水

面白い樣に効く！

年來の信用！的確の効果！

▲ニキビ吹出物に＝頑固なニキビ吹出物にも本當に斯かに、而も何等の副作用をも伴はず、目に見えてよく効くので非常な評判です！年來の信用！効果は彌々向上してゐます！

▲眞正の美の成長＝尙ほ少量づゝ常用すればニキビ吹出物を防ぎ、適度に脂肪を去り、キメを細かに艶をよくし、磨き込んだやうに美しくなりますので大へん喜ばれてゐます！

▼素顏の美を貴ぶ
● 御家庭人の親友▲

發賣元　株式會社　桃谷順天館

川柳雜誌（第一一七號）　定價金三拾錢